熊本大学埋蔵文化財調査室年報

第１集

１９９４

熊本大学埋蔵文化財調査室

序　文

熊本大学長　　森野　能昌

現地再開発によって熊本大学の将来構想の実現を図るという基本方針が、平成元年５月の評議会で承認されて以来、態度を保留していた医学部、附属病院が現地再開発に踏み切ったことにより、平成５年９月の評議会において、全学が足並みを揃えて、再開発の方向で本学の将来構想を実現することが確認された。この決定により、条件整備の塾度にしたがって、早速、計画を進めることとして、黒髪南地区の再開発について、従来より検討されて来た計画案が、二部会の審議を経て、同年11月の評議会で了承された。さらに具体的な準備を進める中、平成６年２月には、文部省の了承が得られるところとなり、全学待望の再開発第一期計画が実現することとなった。

一方、この間、平成５年度の補正予算によって、もろもろの環境施設整備を進める段階になって、本文に詳しく述べられるように、本学の多くのキャンパスが埋蔵文化財包蔵地に指定されていることが判明したため、急遽、埋蔵文化財調査室を設置した。発掘調査すべき箇所は多くあり、施設整備の予算執行上、可及的速やかな調査終了が強く求められるという厳しい制約の中で、調査室長の甲元眞之教授を始め、スタッフの方々には、鋭意作業を進めて頂いた。このような緊急調査の中で得られた多くの学問的成果が、年報第一集として、ここに、速やかにまとめられたことは大きな慶びであり、深尽の敬意を表したい。本学の再開発計画は、今後もしばらく年次的に進められる予定であり、調査室の役割はますます重要となることを再確認するとともに、全学構成員に代わり、調査室関係者の方々の献身的努力に対して、心から感謝申し上げる次第である。

平成７年３月10日

例　言

1．本書は熊本大学構内において、熊本大学埋蔵文化財調査室が平成6年度に行った発掘調査の概略報告である。

2．熊本大学埋蔵文化財調査室発足前の発掘調査については、熊本大学文学部考古学研究室の方々に全面的な協力を得た。また、その際に行われた武夫原グランド（黒髪地区グランド）調査およびエレベーター工事関係調査（教育学部・工学部）に関しては、考古学研究室助手である山田康弘氏に調査経過の執筆をしていただいた。

尚、熊本大学埋蔵文化財調査室発足後の調査は、平成6年5月23日から平成7年3月31日にわたって行われ、主な調査の現場指揮は原田範昭が担当した。調査組織については、6～7ページに記した。

3．調査期間中は多くの関係機関・関係者にお世話になった。中でも、熊本県教育庁文化課には全面的な協力を得、熊本大学附属中学校校舎新設に伴う発掘調査に関しては、同課の島津義昭・吉田昭一両氏に担当していただいた。本書についても、附属中学校調査結果については吉田氏に玉稿をいただいた。

4．本書の執筆・編集は、上記の方々に御協力いただいたほかは、熊本大学埋蔵文化財調査室が担当した。

本　文　目　次

1．熊本大学の埋蔵文化財保護対策
　1　熊本大学埋蔵文化財調査室成立に至る経過……1
　2　調査室活動の概要……2
　3　調査委員会と調査室……3
　4　熊本大学埋蔵文化財調査委員会の構成……6
2．熊本大学立地と環境……9
3．黒髪地区
　1　武夫原調査……11
　2　福利施設調査……14
　3　工学部実験棟調査……25
　4　教育学部エレベーター調査……35
　5　工学部エレベーター調査……35
　6　黒髪地区立会調査……37
4．京町地区
　1．熊本大学附属中学校調査結果……39
　2．熊本大学附属中学校立会調査結果……52
5．城東地区……52
6．渡鹿グランド調査……54
7．総括……67

挿　図　目　次

第1図　熊本大学周辺図……10
第2図　武夫原グランド調査グリッド配置図……12
第3図　各グリッド・セクション図……13
第4図　遺構配置図……15
第5図　東壁セクション図……17
第6図　1・2号住居址……20
第7図　3～8号住居址……21
第8図　9号住居址……22
第9図　1号建物跡実測図……22
第10図　2号建物跡実測図……23
第11図　出土遺物実測図……24
第12図　遺構配置図……26
第13図　工学部セクション図……27
第14図　1・2号住居址……30
第15図　3～5号住居址……31
第16図　6・7号住居址……32

第17図　集石遺構実測図……33
第18図　6号住居址カマド実測図……33
第19図　出土遺物実測図……34
第20図　教育学部・工学部エレベーター工事トレンチ・セクション図……36
第21図　工学部共同溝調査区およびトレンチ・セクション図……38
第22図　基本層位、調査区および遺構配置図……39
第23図　1号住居址および弥生土器実測図……40
第24図　2号住居址および墓壙実測図……41
第25図　江戸時代の遺構と遺物……42
第26図　江戸時代の遺物（1）……43
第27図　江戸時代の遺物（2）……44
第28図　江戸時代の遺物（3）……45
第29図　近代の遺構と遺物……46
第30図　附属幼稚園調査地およびセクション図……53
第31図　渡鹿グランド調査区配置図……55
第32図　Ⅰ次調査トレンチ・セクション図（1）……58
第33図　Ⅰ次調査トレンチ・セクション図（2）……59
第34図　Ⅱ次調査第1トレンチ……62
第35図　Ⅱ次調査第2トレンチ……63
第36図　Ⅱ次調査第3トレンチ……64
第37図　Ⅱ次調査第4トレンチ……65
第38図　出土遺物実測図……66

図　版　目　次

図版1　上：福利施設2号住居址　東より
　　下：福利施設3～8号住居址　西より
図版2　上：福利施設1号建物跡　南より
　　下：福利施設2号建物跡　東より
図版3　上：工学部実験棟調査区全景　北より
　　下：工学部実験棟溝状遺構　東より
図版4　上：附属中学校　調査区全景　北より
　　下：附属中学校　1号住居址　西より
図版5　上：附属中学校　2号住居址　北東より
　　下：附属中学校　墓壙　西より
図版6　上：附属中学校　墓壙　南より
　　下：附属中学校　井戸跡　東より
図版7　上：渡鹿グランド1号住居址　東より
　　下：渡鹿グランド道路跡　西より
図版8　上：渡鹿グランド2・3号住居址　西より

下：渡鹿グランド第２トレンチ遺物出土状況　南より

図版９　上：渡鹿グランド第４トレンチ　南より

下：渡鹿グランド４号住居址カマド　南より

図版10　上：渡鹿グランド５号住居址カマド　南より

下：渡鹿グランド６号住居址カマド　南より

1．熊本大学の埋蔵文化財保護対策

1．熊本大学埋蔵文化財調査室成立に至る経過

熊本大学の校地は、黒髪地区・本荘地区・九品寺地区・大江地区・小磧地区・京町地区・城東地区及び下南部地区の８地区に分散しており、また、どの校地も狭隘化してきていることなどで、かねてから校地の移転等が議論されてきた。

昭和60年に当時の熊本県知事から校地移転を検討する旨の申し出があり、そのことについて学内において議論され、本荘地区の医学部・病院を除き他の地区は現地再開発が決定された。本荘地区も平成５年に現地再開発することが決定されたので、全学が現地再開発で取り組むこととなった。

それぞれの地区での再開発構想が検討され、基本的な計画が出来上がった地区から文教施設費を概算要求し、それが認められたところからの再開発事業が始まったばかりである。

一方、黒髪地区等においては、従来から建設工事等で古い時代の遺物が発見されていたのであるが、埋蔵文化財の包蔵地としては周知されていなかった。

平成５年10月から黒髪（南）地区に情報処理センターの建設工事が始まったところ、熊本市教育委員会文化課から工事前に埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨の連絡があったので、同課へ出向き確認した結果、平成５年４月１日から熊本市文化財保護審議会において、黒髪地区等が埋蔵文化財の包蔵地として追加指定されていることが判明した。(*)

そこで、大学が計画している建設工事の予定地に係る試掘調査の届を同課に提出して、その調査を依頼した。試掘調査の結果では、ほとんどの建設工事に発掘調査が必要ということになった。

今後の発掘調査のことについて、同課に出向き相談したところ、以下のような回答があった。

① 国の機関（大学等）は考古学教室等があって専門のスタッフを擁していることでもあり、熊本大学においてもそういう機関を設け、そこが実施機関として発掘調査を担当願いたい。

② 熊本市が平成６年度発掘調査の依頼を受けたとしても、それを実施する場合、既に他の発掘調査予定が半年分はあるので、急いでも９月又は10月頃から調査を始めることとなる。

以上のことから、熊本大学の再開発事業には、事前の試掘及び発掘調査を行うことが必修条件であり、そのためには大学独自の調査組織を早急に設けることが必要となった。

先ずは、発掘調査の組織の中心となってもらうべく、文学部考古学研究室に協力を依頼し、このことについて承諾を得た後、急ぎ委員会などの組織作りを行い、責任体制を確立するための作業が始められた。

本学の状況及び他大学（東京大学・京都大学・岡山大学・広島大学・山口大学・九州大学・鹿児島大学等）に既に設置されている同種組織の内容を勘案しながら検討した結果、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」と略する）を設けることとなった。また、この調査委員会の下に熊本大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」と略する）を置き、発掘調査の実務を担当させることとした。

調査委員会は各学部等から推薦された教官、大学院自然科学研究科長、附属図書館長、学生部長、事務局長、調査室長の15名で構成し、委員長は互選により選出することとした。

調査委員会の任務としては、大学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

調査室は調査委員会の下に置かれ、文学部考古学教授を室長とし、発掘調査の実務を担当する調査員、事務部門を担当する事務補佐員により構成されている。

調査室は、学内にあり埋蔵文化財の発掘調査に関して、実施計画の立案、発掘調査の実施、出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存、発掘調査報告書の作成等実務を全て行う組織である。

埋蔵文化財調査委員会委員名簿

文学部	松本寿三郎	教育学部	森山　恒雄	法学部	山中　至
理学部	岩崎　泰頴	医学部	吉永　秀	薬学部	庄司　省三
工学部	北野　隆	教養部	猪飼　隆明	附属病院	土亀　直俊
医技短大部	蔦川　忠久	大学院自然科学研究科長		柏木　潤	
附属図書館長	植村啓治郎	学生部長	中島　最吉	事務局長	島田　直樹
埋蔵文化財調査室長　甲元　眞之					

なお、調査委員会と調査室の日常的事務の窓口は、現在発足時ということで経理部主計課であるが、今後、再開発計画が実施段階に入ると、発掘調査は建設工事予定地に限ることとされているので、計画実施部門と調査室との連帯が非常に重要なポイントとなる。

2．調査室活動の概要

平成6年度に計画されている施設整備事業は、平成5年度補正予算で措置され繰り越されたものも含め、工期日程が目白押しの状態であり、それに伴う事前の発掘調査は一時の猶予も許されない状態であった。

年度当初から調査室発足までは、文学部考古学研究室の甲元眞之教授をはじめとしたスタッフの多大なる協力のもとに発掘調査が行われ、調査室発足と同時にスムーズに引き継ぎがなされて調査室の任務が遂行されている。

以下、地区ごとの発掘調査を記述する。

黒髪地区（黒髪遺跡群）

運動場整備（照明塔建設）工事	4／15～17
基幹整備（エレベーター室取設）工事	4／21・25
福利施設建築予定地の樹木移植	5／13・14
運動場整備（集水桝埋設）工事	5／20・23・24
福利施設建設工事	5／23～7／28
グランド建物新営・外灯基礎工事	8／11
基幹整備（スロープ取設）工事	8／22
工学部実験棟新営工事	9／12～10／31
福利施設設備工事	1／18～20

大江地区（大江遺跡群）

グランド集水桝整備工事	8／1～10
グランド整備工事	11／14～12／22

京町地区（京町台遺跡）

附属中学校校舎建設工事	5／17～6／25
附属中学校電気引き込み配線工事	8／12

城東地区（熊本城跡）

附属幼稚園排水管布設替工事	2／27

3．調査委員会と調査室

平成6年4月7日　熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則が定められ、調査委員会が設置された。

この調査委員会に埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行う調査室が置かれることとなり、熊本大学埋蔵文化財調査室要項も定められた。

平成6年4月28日　評議会において、埋蔵文化財調査室での発掘調査を担当する調査員確保のための定員流用が認められた。

平成6年5月16日　熊本大学埋蔵文化財調査委員会の委員が委嘱された。

甲元眞之教授が初代の調査室長となる。

原田範昭を助手に採用、調査室の調査員となる。

矢野希久代を事務補佐員に採用する。

平成6年5月20日　熊本大学埋蔵文化財調査室のオープンセレモニーが学長、事務局長、各学部長、調査委員会委員ほか多数の出席を得て行われた。

平成6年6月10日　第1回埋蔵文化財調査委員会が開催された。

学長挨拶のあと、委員長に北野隆教授が選出された。審議では、調査委員会の今後の方針として、委員会の開催は原則として2回と決まり、発掘調査の認識は建設予定地に限ることが確認された。

平成6年度の発掘調査の進捗状況と発掘調査計画について説明があり、了承された。

調査室の運営経費を全額共通経費として要求することが了承された。

平成6年7月21日　調査室経費が認められ、予算が配分された。

平成6年7月26日　福利施設建設予定地で発掘調査結果の概要説明が行われた。続いて、大江グランドの整備工事に関しての発掘調査について、調査委員長、調査室長、事務局長（代理として経理部長、施設部長が出席）による3者協議が行われた。

平成6年11月11日　第2回埋蔵文化財調査委員会が開催された。

審議では、平成7年度の定員流用申請が了承された。今年度の発掘調査結果の説明があり、了承された。調査室の移転が報告された。会議終了後、調査委員会参加者に工学部実験棟建設予定地の発掘現場で現地説明会が行

われた。

平成６年12月12日　大江グランドの発掘調査現場で調査中の現況説明が行われた後、調査範囲拡張について、調査委員長、学生部長、調査室長、事務局長（代理として施設部長、主計課長が出席）による４者協議が行われた。

平成６年12月21日　平成７年度の教官定員流用が学長から承認された。

（参考資料１）

熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則

（設　置）

第１条　熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任　務）

第２条　委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

（組　織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）各学部、教養部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授　各１人

（２）大学院自然科学研究科長

（３）附属図書館長

（４）学生部長

（５）事務局長

（６）埋蔵文化財調査室長

（７）その他委員会が必要と認めた者　若干人

２　前項第１号及び第７号の委員は、学長が委嘱する。

（任　期）

第４条　前条第１項第１号及び第７号の委員の任期は２年とし、再任は妨げない。

２　前項の規定にかかわらず、前条第１項第１号及び第７号の委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

２　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

３　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（議　事）

第６条　委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

２　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（意見の聴取）

第７条　委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聴くことができる。

（調査室）

第８条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

２　調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

（事　務）

第９条　委員会の事務は、経理部主計課において処理する。

（雑　則）

第10条　この規則が定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附　則

１　この規則は、平成６年４月７日から施行する。

２　この規則施行後、最初に委嘱される第３条第１項第１号及び第７号の委員の任期は、第４条第１項の規定にかかわらず、平成８年３月31日までとする。

（参考資料２）

熊本大学埋蔵文化財調査室要項

（趣　旨）

第１条　この要項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第８条第２項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の業務、組織その他必要な事項について定める。

（業　務）

第２条　調査室は、熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

（１）実施計画の立案及び実施に関すること。

（２）出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。

（３）文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。

（４）その他必要な事項

（組　織）

第３条　調査室に、室長を置く。

２　室長は、調査室に関する業務を掌理する。

３　調査室に調査員その他必要な職員を置くことができる。

４　調査員は、発掘調査に関する業務を行う。

（室長等の任命）

第４条　室長及び調査員は、本学の教官のうちから学長が任命する。

２　学長は、必要がある場合は、学外の者を調査員に委嘱することができる。

（事　務）

第５条　調査室の事務は、関係学部等の協力を得て、経理部主計課において処理する。

（雑　則）

第６条　この要項に定めるもののほか、調査室の運営に必要な事項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会が定める。

附　則

この要項は、平成６年４月７日から実施する。

４．熊本大学埋蔵文化財調査委員会の構成

熊本大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成６年５月16日現在）

委員長	北野　隆（熊本大学工学部教授）	
委　員	松本寿三郎（文学部教授）	森山恒雄（教育学部教授）
	山中　至（法学部教授）	岩崎泰頴（理学部教授）
	吉永　秀（医学部教授）	庄司省三（薬学部教授）
	猪飼隆明（教養部教授）	土亀直俊（附属病院助教授）
	蔦川忠久（医技短大部教授）	柏木　潤（大学院自然科学研究科長）
	植村啓治郎（附属図書館長）	中島最吉（学生部長）
	島田直樹（事務局長）	甲元眞之（埋蔵文化財調査室長）

熊本大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成６月10月１日現在）

委員長	北野　隆（熊本大学工学部教授）	任期（６.５.16～８.３.31）
委　員	松本寿三郎（文学部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	森山恒雄（教育学部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	山中　至（法学部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	岩崎泰頴（理学部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	吉永　秀（医学部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	庄司省三（薬学部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	猪飼隆明（教養部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	土亀直俊（附属病院助教授）	（６.５.16～８.３.31）
	蔦川忠久（医技短大部教授）	（６.５.16～８.３.31）
	柏木　潤（大学院自然科学研究科長）	（６.５.16～８.３.31）
	植村啓治郎（附属図書館長）	（６.５.16～７.５.15）
	江端正直（学生部長）	（６.10.１～８.９.30）
	占部道敏（事務局長）	（６.10.１～）
	甲元眞之（埋蔵文化財調査室長）	（６.５.16～）

熊本大学埋蔵文化財調査室（平成６年５月16日現在）

室　長（併）	文学部教授	甲元眞之
調　査　員		原田範昭
事務補佐員		矢野希久代

整理作業員及び発掘作業員

整理作業員　甲斐美紀代、古賀敬子、柴田やよひ、田中レイ、土田ちえみ、橋本みどり、林田恵子、春木藤美、藤岡泰江、松井昭子

発掘作業員　相川奈美、飯田考俊、稲田和加、今村佳子、岩谷史記、内薗拓也、大塚宏之、

大坪志子、岡部是央、岡村久美子、甲斐美紀代、甲斐田末男、川野博之、清田志野、蔵冨士寛、古賀敬子、後藤郁子、小深田ナオ、佐藤タエ子、澤田まり子、柴田やよひ、高崎芳美、高松幸一、田崎末人、田中末光、田中聡一、田中大介、田中レイ、土田ちえみ、中嶋由起子、中村さつみ、中村哲史、橋本みどり、花田誉宣、林田恵子、春木藤美、番山明子、東　真一、藤田實千代、藤岡泰江、古屋俊英、本田晶子、本田浩二郎、槙林啓介、益永武史、松井昭子、松浦一之介、松里健一、丸岡恵子、美浦雄二、村山志穂、山口健剛、山下直哉、吉岡和哉、若杉あずさ、若杉竜太

註

(1)熊本大学校地内において、黒髪地区については昭和47年４月に熊本大学武夫原グランド西側が、昭和62年４月に国道57号線北側（北地区）が既に埋蔵文化財包蔵地指定を受けていた。また、本荘地区については平成５年４月、大江地区・京町地区・城東地区についても昭和47年４月に埋蔵文化財包蔵地指定を受けている。

但し、こうした埋蔵文化財の指定地拡大に伴っての熊本市教育委員会文化課による周知徹底の処置は、熊本大学に対して何らなされていなかっただけでなく、埋蔵文化財包蔵地としての指定後も建築申請段階においてチェックを受けることはなかった。このことに対して大学関係者が同課に問い合わせしたところ、「埋蔵文化財包蔵地の指定地拡大については、熊本市の文化財審議委員会に答申をしており、その委員として熊本大学の関係教授が参加しておられるので、当然大学に伝わったはずである。」との回答を得た。しかしその裏付けとなる新しい遺跡地図は、熊本大学のいかなる関係機関にも送付されず、周知されていない。このことが熊本大学の埋蔵文化財に関する対策が遅れる一因でもあった。

2．熊本大学位置と環境

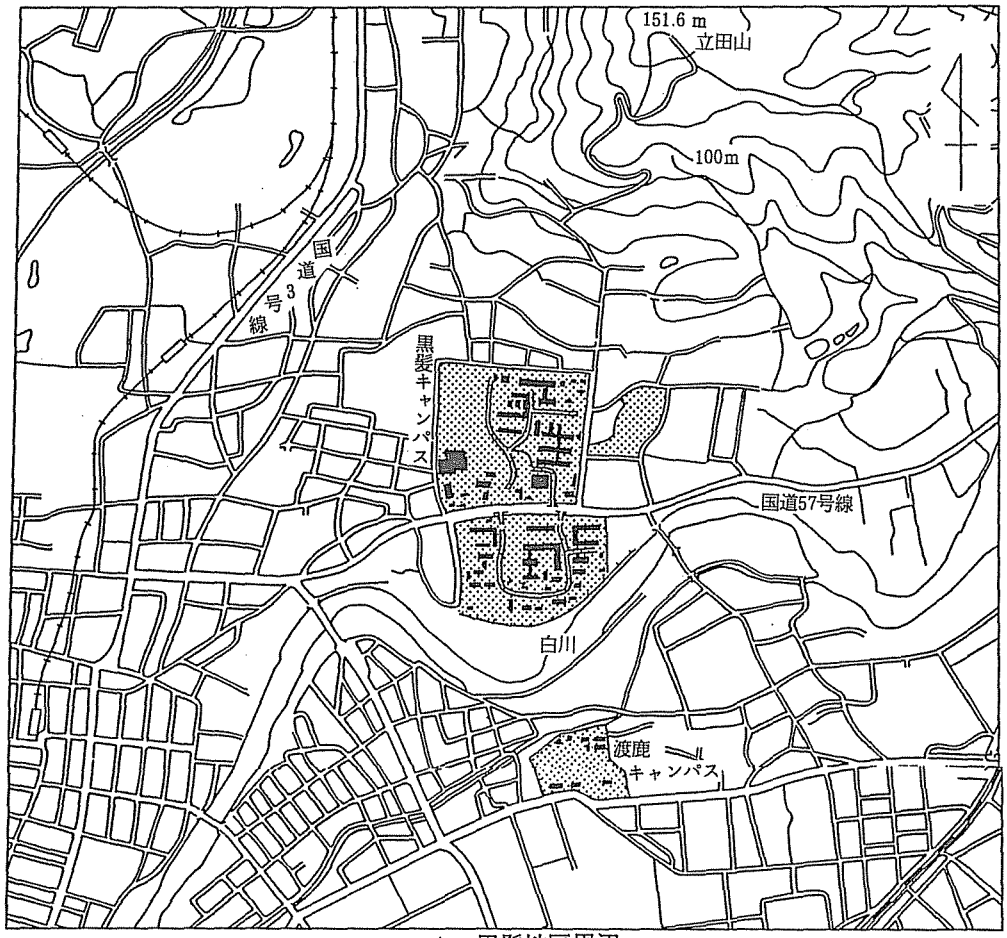
熊本大学黒髪地区キャンパスは、熊本市中央をほぼ東西に貫流し有明海に注ぐ白川下流の右岸に位置する（第１図－１）。九十九曲がりと呼ばれるように、小刻みに蛇行する白川の氾濫によって、下流域の熊本市平野部は形成されている。白川が放出した土砂の堆積が扇状地に発達したものであり、黒髪地区はその扇状地の発端部に相当する。熊本市内においては白川を挟んで北側に、金峰山を中心とする火山群から立田山などの独立山頂に連なる高地が多く、南側に平野部が広がる。当キャンパスは背後に標高151.6ｍの立田山を控え、その山裾から南側を流れる白川に向かって、緩やかに傾斜する河岸段丘上に立地する。国道57号線を挟んで北側を北地区、南側を南地区とし、敷地は東西約400ｍ、南北約650ｍに渡り、総面積281,854㎡の規模をもつ。北地区には法・文・教育・教養学部、南地区には工・理学部がある。当キャンパスにおいては、1972年に北地区グランドの一部が埋蔵文化財包蔵地指定され、次いで1987年に北地区のすべて、1993年に南地区が熊本市文化課によって指定を受けた。

熊本大学渡鹿グランドは白川を挟んで、熊本大学黒髪キャンパスの対岸、白川下流左岸に位置する（第１図－１）。本運動場は川岸から約100ｍ程離れて、沖積平野上の住宅地の中に39,786㎡の規模をもって存在する。本調査区は北は白川左岸から、南は水前寺駅周辺にまで、東西1.7㎞・南北1.4㎞に渡って分布する大江遺跡群の最北端を担う。過去には1976年、運動場造成に伴い、当大学が組織する大江遺跡調査団によって予備調査が行われ、1977年の本調査に至った。当時の調査では13軒の住居址が検出され、奈良朝から平安中期頃までに渡る集落とされている。白川下流左岸から江津湖周辺にかけての遺跡においては、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く出土している。

黒髪キャンパスの属する黒髪地区、及び白川を挟んで対岸に位置する渡鹿地区には、縄文時代から歴史時代にまで渡る様々な遺跡が存在する。その中でも際立って奈良・平安時代に属する遺跡を多数確認することができる。遺跡の存続時期は８世紀半ばから、９世紀前半にまで渡り、これは国府・国分寺の存在と関係するようである。託麻郡寺の西北部、託麻郡家の西部にあたるこの渡鹿調査区一帯が郡の中心を形成していたとされている。

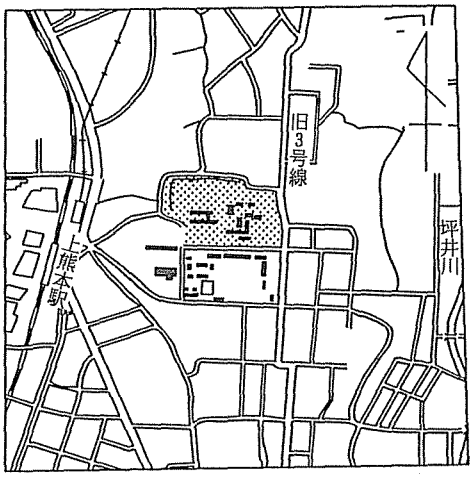
熊本大学教育学部附属中学校および小学校は、熊本市京町本丁５番12号に位置する（第１図－３）。熊本市中央部北寄り、旧国道３号線沿いに位置し、校地面積51,547㎡をもつ。両校は井芹川と坪井川に挟まれた住宅地の中に存在し、金峰山の山裾から広がる標高30ｍの台地上に立地する。井芹川と坪井川は合志台地を浸蝕して形成され、北から熊本市に流れ込み、白川の流れに沿って有明海に注ぐ。両河川は本来白川の支流であったものと考えられている。両校周辺は京町台遺跡群とされ、弥生時代遺物の出土地として知られている。

熊本大学教育学部附属幼稚園は熊本市城東町５番９号に位置する（第１図－２）。当園は熊本市中央部のやや北に立地し、坪井川左岸の市街地にほど近い住宅地の中に存在しする。校地面積は4,632㎡をもつ。坪井川を挟んで西側には近接して熊本城が存在するため、熊本城に関する近世の遺物および遺構が予想される。また付近には横穴墓の存在も知られている。



1　黒髪地区周辺

2　城東地区周辺



3　京町地区周辺

第1図　熊本大学周辺図（スクリーントーンがキャンパス）

3．黒髪地区

1．武夫原発掘調査

グランド内外に設置される照明塔のため、８カ所に４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、Ⅲ層までを重機によって掘り下げ、その後手作業でこれを発掘調査した（第２図）。

グランド内は度重なる整地工事のために全体的にかなり撹乱がひどく、土層が１次堆積のまま保存されているグリッドは皆無であったために、ここではＧ１およびＧ５を取り上げて基本土層を説明する。以下、第２図中の層名はこれと同じである。

Ⅰ層：表土層である。黒褐色（7.5ＹＲ3／2）で堅くしまりの良い土層である。粘性はなく、砂利やレンガなどを含む。過去の配管工事などでかなり掘り返されている。

Ⅱ層：暗褐色土層（7.5ＹＲ3／3）しまりはあまり強くなく、粘性もない。ガラス破片、レンガ、コンクリート破片などを含む。

Ⅲ層：黒褐色土層（7.5ＹＲ3／2）しまりはあまり強くないが、粒子が細かく、若干粘性をおびた層である。木根による撹乱が入るが、土質は均一であり、少量の土師器、須恵器が出土することから遺物包含層と考えられる。Ｇ４やＧ７ではこの層の下面が遺構確認面となる。

Ⅳ層：黒褐色土層（7.5ＹＲ2／2）粒子が細かく、粘性をおびたしまりの良い土層である。若干砂礫が混入するがほぼ均一な土層である。若干の土師器、須恵器を出土することから遺物包含層と考えられる。Ｇ２やＧ８では、この層の下面が遺構確認面となる。

Ⅴ層：褐色土層（10ＹＲ4／6）粒子は細かいが、粘性もなくしまりも悪い。混入物もなく均一の土層である。

次に各グリッドの概要を述べる（第３図）。

Ｇ１　遺構は検出できなかった。遺物としてはⅢ層とⅣ層から土師器と須恵器が数点出土している。詳細な時期は特定できないが奈良・平安時代以降のものと考えられる。

Ｇ２　木根の撹乱が激しいものの、溝が検出された。この中から土師器が２点出土したが、胎土や調整から奈良・平安時代のものと考えられる。遺構も同時期のものであろう。

Ｇ３　特に撹乱が激しく、旧制五高時代の廃材が埋められ、遺構・遺物ともに存在しなかった。

Ｇ４　Ⅲ層下に落ち込みが検出されている。深さは60㎝程であり、住居址の可能性が高い。Ｇ５では遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。

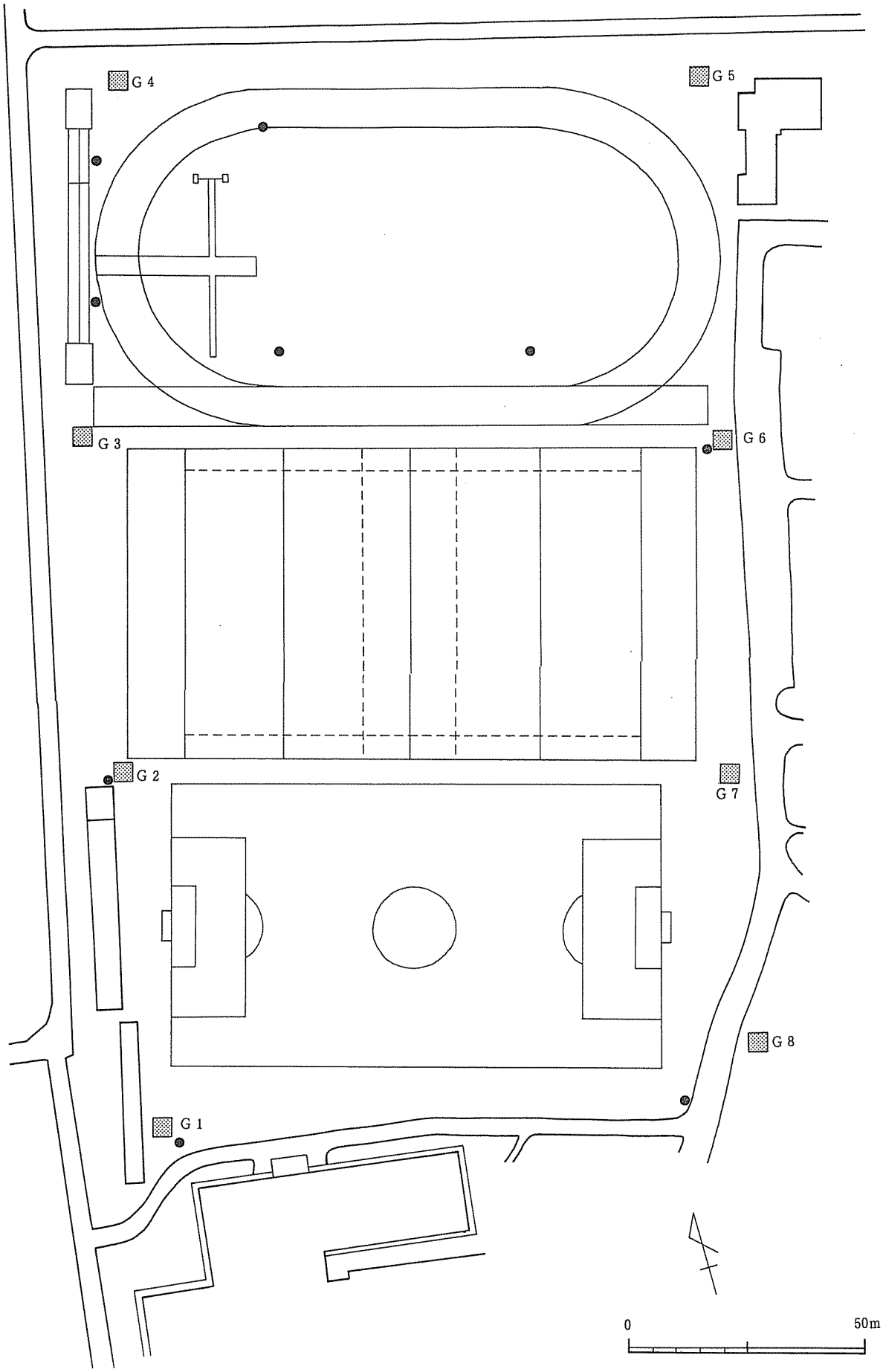
Ｇ６　Ⅲ層を掘り込んでパイプが埋設されていた。撹乱がひどく、時期の特定できる遺物は出土しなかった。

Ｇ７　Ⅲ層下に落ち込みを確認できた。立ち上がりの途中に段が存在するが、住居址か溝となる可能性が高い。埋土中から須恵器が出土している。

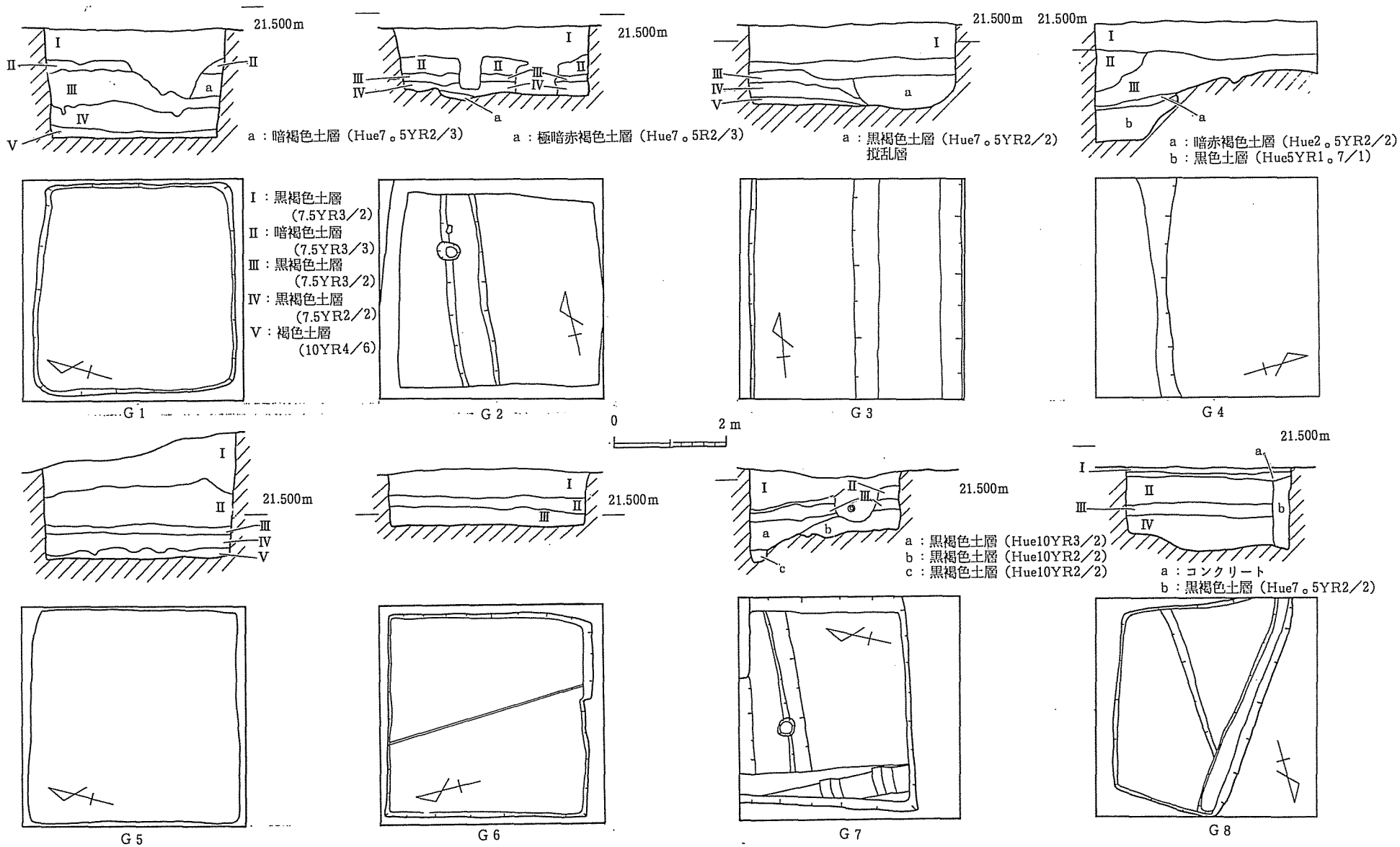
Ｇ８　Ⅳ層下に落ち込みが検出された。埋土はⅣ層と区分できないほど類似していることから層堆積時に短時間の内に埋没したものと考えられる。その規模から住居址の可能性が高いが、時期を特定できる遺物は出土していない。

これらのグリッドの他に第１図にドットを落とした地点における配管工事に伴って、深さ1.5ｍ程の掘り下げを行ったが、特記すべき遺構や遺物は出土しなかった。

上述したように武夫原グランドは後世の撹乱がかなり入っており、遺跡の保存状態は良好ではない。しかし、奈良・平安時代の住居跡と思われる遺構が検出されており、今後の掘削には十分な注意が必要である。



第２図　武夫原調査グリッド配置図（黒丸は試掘地点）



第3図　各グリッド・セクション図

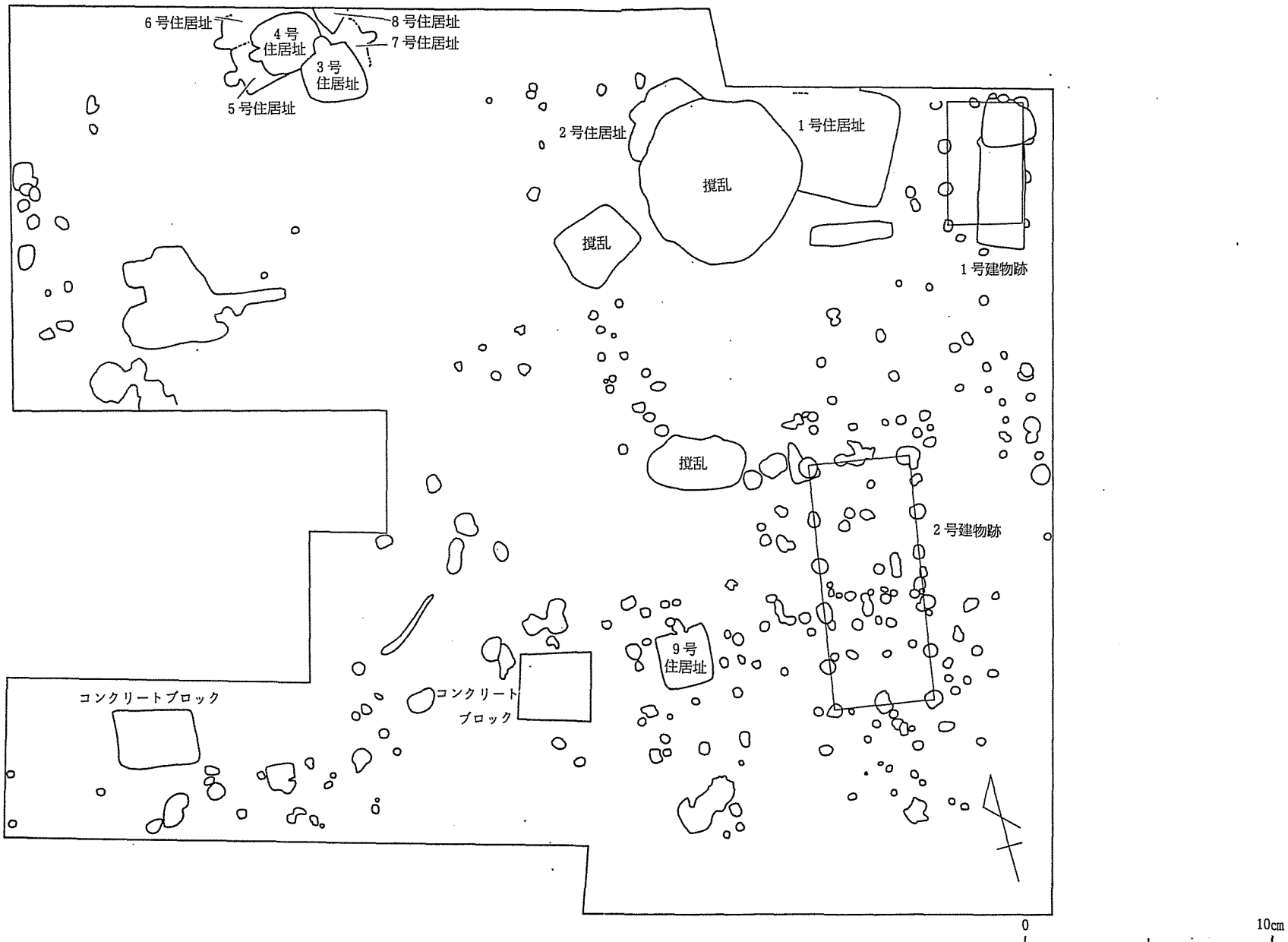
2．福利施設調査

1．調査の目的と経過（第４図）

当調査地区は、熊本大学黒髪キャンパス北地区の北東隅に位置する。木造の学生集会場が１軒あり、あとは空き地となっていた場所である。今回の調査は福利施設新営工事に伴う調査であり、調査面積は1290㎡である。試掘の結果、遺物包含層の保存状態が比較的良好であったので、包含層上面まで重機による除去を行い、手作業による調査を行った。廃土置場の確保と調査の混乱を避けるため、調査区を４分割して順次調査を行う方針を立てた。

また建物の建築工事に伴う電気配線工事や給排水配管工事に関して、平成７年１月17日から21日まで立会調査を行った。

５月13日　樹木移植開始。
５月18～20日　重機による表土剥ぎ開始。調査区全面においてⅠ層を除去。
５月23日　作業員投入。調査区を４区に分け、１区よりⅡ層の掘り下げ開始。
５月26日　雨のため作業中止。
５月30日　１区において住居址確認。住居址の検出作業開始。
６月１日　２区においてⅡ層の掘り下げ開始。須恵器・土師器片多数出土。
６月８～13日　雨で作業難行。
６月20日　トレンチにより、１区南半部には遺構の存在しないことを確認。
６月23日　雨天のため作業昼まで。
６月27日　２区において住居確認。トレンチによって他の遺構の有無を確認。
６月28日　住居址の検出作業開始。
７月６日　実測作業開始。
７月７日　１区において建物跡を確認。
７月10日　１区調査終了。
７月11，12日　３，４区においてⅢ層除去。Ⅳ層上面において遺構確認。
　　排土を１区に移動。
７月13日　３，４区調査開始。
７月14日　３区において住居址確認。
７月20日　２区においてⅢ層の除去完了。３，４区遺構検出作業開始。実測作業開始。
７月22日　実測の完了をもって４区調査終了。
７月25日　実測の完了をもって３区調査終了
７月28日　２区における実測作業を完了し、全調査終了。


6号住居址
4号
住居址
8号住居址
7号住居址
3号
住居址
5号住居址
2号住居址
1号住居址
撹乱
撹乱
1号建物跡
撹乱
2号建物跡
9号
住居址
コンクリートブロック
コンクリート
ブロック
0
10cm

第4図　遺構配置図

2．福利施設基本層序（第５図）

福利施設新営工事に伴う調査において確認された層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層：褐色土層（10ＹＲ4／6）

表土層である。レンガや礫を多く含み、大部分に撹乱を受けている。粘性が全くなく、しまりがない。

Ⅱ層：黒褐色土層（10ＹＲ2／3）

遺物包含層である。粘性がなく軟質である。きめが細かく、焼土粒などを多く含む。中位から下位にかけて須恵器片・土師器片を特に多く含む。

Ⅲ層：暗褐色土層（10ＹＲ3／3）

無遺物層である。やや粘性があり、軟質で粒子は細かい。混入物は特にないが、押型文土器の入る可能性が指摘されている。

Ⅳ層：暗褐色土層（10ＹＲ5／4）

無遺物層である。粘性で粒子が細かく、しまっている。ニガ土と呼ばれる。

Ⅴ層：オリーブ褐色土層（2.5Ｙ5／8）

無遺物層である。粘性が強く、特に硬質である。ニガ土と呼ばれる。

Ⅵ層：黄褐色土層（10ＹＲ5／8）

無遺物層である。特に粘性が強く、しまっている粘土層である。ローム層である。

3．福利施設調査結果

今回の調査では住居址９軒を検出した。重複しているものが多く、かなりの改築を繰り返し行ったようである。住居内の覆土は、いずれも遺物包含層と同質の土に灰や焼土が混入するものであり、分層はできない。いずれも壁体がもろく、プランの確認が困難である。

竪穴住居址

１号住居址（第６図）

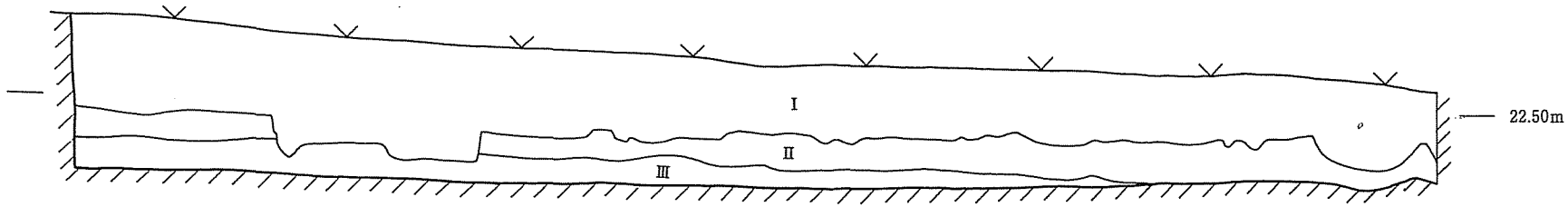
１号住居は１区中央北端に位置する。西側は撹乱により破壊されている。平面形は一辺4.3ｍの方形プランを想定している。主軸はＮ－10°－Ｅである。柱穴は確認できなかった。北壁中央部分から床面にかけて、焼土が集中する地点がある。カマド跡と思われる。破壊を受け、構造は明らかではない。焼土下において直径70㎝・深さ40㎝、直径60㎝・深さ20㎝のカマドに伴うピット２基、直径65㎝・深さ60㎝のカマドを切るピット１基を検出した。

２号住居址（第６図）（図版１）

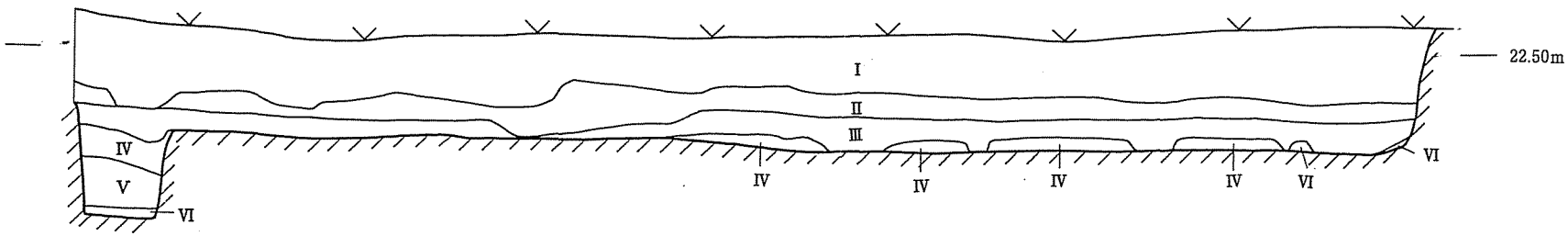
２号住居は、調査区におけるＩ区北西部に位置する。樹木移植による破壊を受け、詳細は不明である。一辺3.5ｍを確認した。主軸はＮ－45°－Ｗである。住居北壁中央部にカマドをもつ。カマドは破壊を受けており、焼土・粘土・灰が混在し、構造については明らかではない。焼土上より、座った形で土師器の坏を検出した。

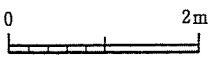
３号住居址（第７図）（図版１）

２区中央北側に住居址６軒（３～８号）が切り合う。３号住居はこの住居群において、最も新しく構築されたものである。2.3×2.3㎝の隅丸の正方形プランである。主軸はＮ－10°－Ｗ



Ⅰ層：褐 色 土 層（10YR4／6） Ⅱ層：黒　褐　色（10YR2／3）
Ⅲ層：暗褐色土層（10YR3／3） Ⅳ層：暗褐色土層（10YR5／4）
Ⅴ層：オリーブ褐色（25YR5／8） Ⅵ層：黄　褐　色（10YR5／8）





第5図　東壁セクション図

である。切り合いにより、北及び東側の壁がはっきりと検出できなかった。残存する壁高は20㎝である。直径22㎝・深さ22㎝の柱穴を住居中央に1基検出した。カマドは北壁中央および床面を掘り窪め、粘土を貼り付けるようにして形成されている。幅65㎝・全長85㎝の規模をもつ。

4号住居址（第7図）（図版1）

4号住居は東南の一部が1号住居によって切られている。2.5×2.3ｍの隅丸の方形プランを呈する。主軸はW－10°－Sである。残存する壁高は20㎝である。カマドは、西壁の中央を掘り窪め、粘土を貼り付けることで形成されている。幅50㎝・全長70㎝である。壁面より住居内に粘土で作られたカマド袖部が張り出す。柱穴は確認できなかった。

5号住居址（第7図）（図版1）

5号住居はその3壁が、2号住居によって切られている。一辺1.9ｍを北壁において確認することができた。隅丸の方形を想定している。主軸はW－15°－Sである。残存する壁高は25㎝である。カマドは西壁中央に付設される。カマドの平面形は袋状を呈し、粘土を用いて構築される。焚口幅30㎝・最大幅40㎝・奥行き50㎝を呈する。

6号住居址（第7図）（図版1）

南半は2号及び3号住居によって切られており、東半は調査区外にあるためプランは確認できない。他の住居の状況より、隅丸の方形が想定できる。主軸は4号住居に平行すると考えられる。残存する壁高はカマド周辺で20㎝程度である。カマドは西壁に形成される。カマド壁体からカマド脇の住居壁面20㎝程度に及んで、粘土が貼り付けられている。したがって粘土の貼り付けられた住居壁面の一部が、カマドの袖部を兼用する形となる。焚口幅は40㎝・奥行き50㎝を呈する。

7号住居址（第7図）（図版1）

住居壁体及び床面は検出できず、カマドのみの確認となった。他の住居との位置的関係より、おそらく一辺2ｍ前後の方形の住居と考えている。カマドは西向きに開口することより、住居の東壁に存在するようである。6号住居同様、袖部を住居壁体と兼用し、カマド内から住居壁面におよんで粘土を貼り付けて形成されている。粘土は厚さ10㎝程度で貼り付けられている。焚口幅30㎝・奥行き45㎝である。

8号住居址（第7図）（図版1）

住居床面の一部のみの確認となった。大部分が調査区外にあり、東西1.2ｍ・南北1.2ｍの範囲で住居南西隅の床面のみが露呈する。

9号住居址（第8図）

2.3×2.0ｍの長方形プランである。主軸は南北に沿う。床面には東南側を除いてほぼ全面に硬化面が広がる。残存する壁高は10㎝である。住居内北東隅に、長軸55㎝・短軸45㎝の楕円形のピットを検出。ピットの性格は不明である。カマドは北壁の中央に存在する。袋状の三角形を呈し、焚口幅30㎝・奥行き60㎝である。一部がピットによって切られている。

掘建柱建物跡

1号建物跡（第9図）（図版2）

調査区北東隅において柱穴8基が並ぶ。棟方向に大きく撹乱が入っているため、柱穴列1列の約半分は破壊されている。棟方向はN－12°－Wである。桁行3間、梁行1間の建物を想定している。梁間に撹乱部分が及ぶため明らかではないが、梁行2間の可能性もある。柱穴直径はすべて50cm前後であり、確認できた深さは20～65cmである。本来もっと上位から掘り込まれていたものと考えられる。桁柱間は1.5～1.8m、桁長は4.8mである。梁長は3.0～3.4mであり、北に向かって若干幅広になる。また調査区外に柱穴列が続く可能性もある。

2号建物跡（第10図）（図版2）

調査区南東部分において柱穴12基が並ぶ。棟方向はN－6°－Eである。桁行5間、梁行1間または2間の建物を想定している。柱穴はすべて比較的円形に近く、直径は70cm前後である。確認できた深さは0.2～1.0mと統一を欠く。桁柱間は1.8～2.3mであり、桁長は9.8mである。梁長は4mである。

4．黒髪団地福利施設立会調査

平成7年1月17～21日の日程で、福利施設新営工事に伴う電気配線工事および給排水配管工事について、立会調査を行った。5～7月に行った調査区の周辺における工事である。前回調査の結果を踏まえ、一連の遺構の有無を確認することを目的とした。

1月17，18日

給排水配管工事のため、重機にて幅60cm・深さ100cmで南北5.7mと4.8mの溝を2箇所に掘る。精査の結果、堆積土層は撹乱層と客土層のみであり、工事による遺物包含層および遺構への影響はないことを確認した。

1月19日

電気配線工事のため、重機にて幅130cm・深さ90～120cmをもって東西29mの溝を掘る。部分的に遺物包含層の上面に達するが、大部分が表土層および撹乱層である。したがって記録保存し、工事の着工を許可した。更に溝西端より北へ14.5mの掘削を行う。深さは70～100mであり、表土層下には及ばない。

またスロープ設置工事に伴い、14×9mの範囲を深さ30～70cmの掘削を行う。表土層のみの掘削であり、埋蔵文化財への影響はないと判断した。

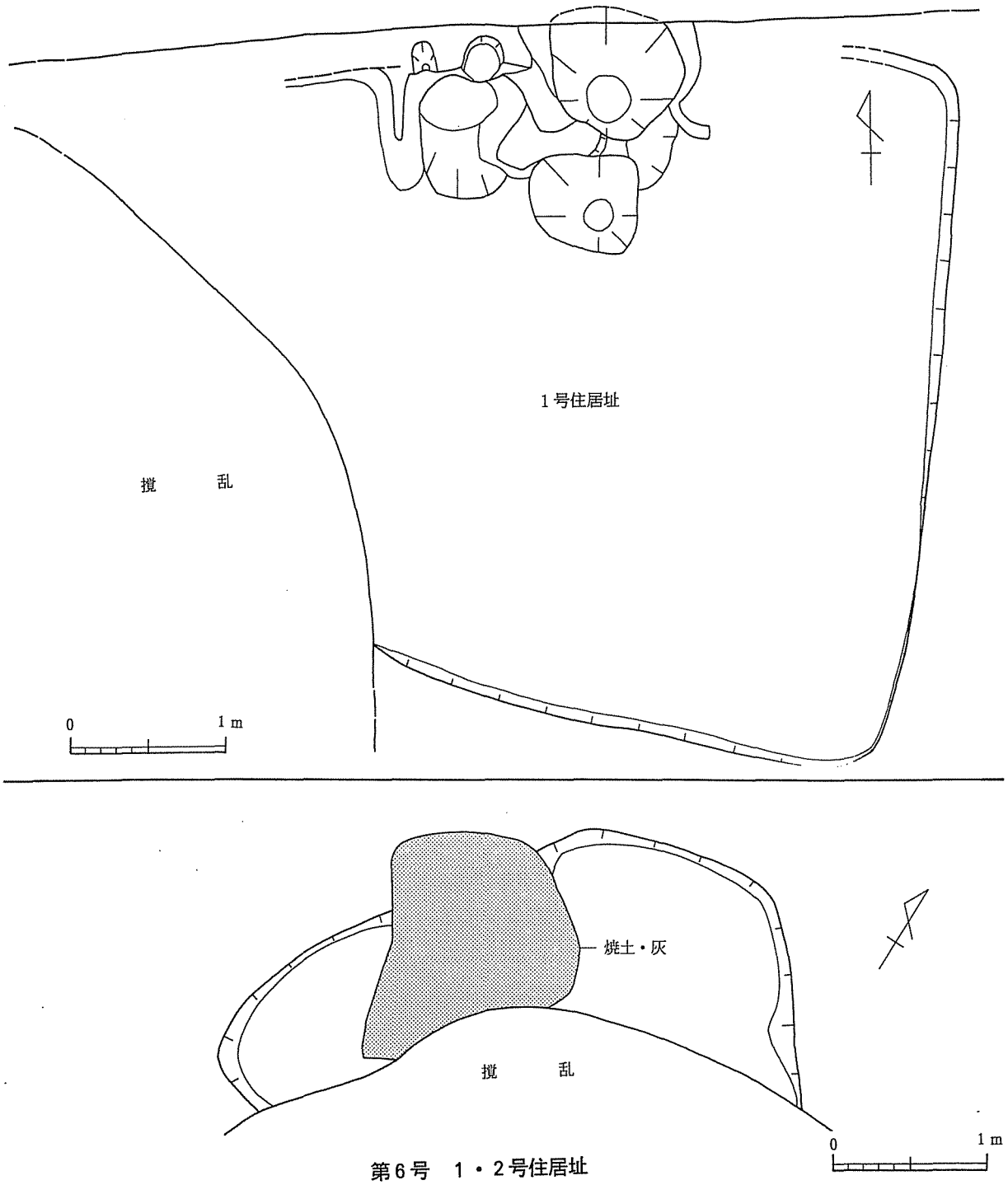
1月20日

給排水配管工事のため、重機によって幅80cm・深さ90cmをもって、南北方向に28m、東西方向に12mにわたって掘削を行う。大部分が削平を受け、客土層が堆積する。遺物包含層はほんの一部にしか残っておらず、保存状況は不良である。したがって記録保存し、工事の着工を許可した。

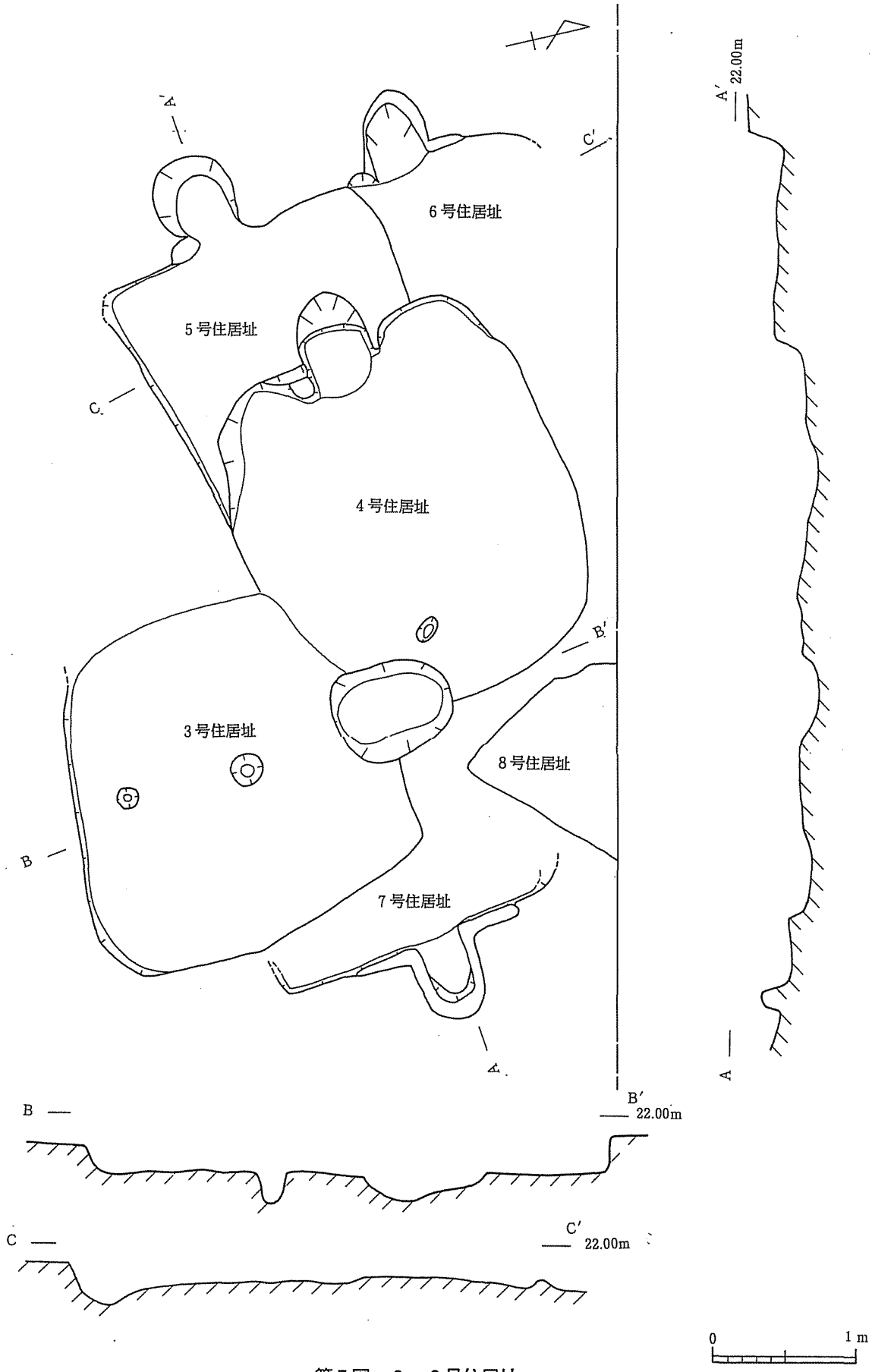
1月21日

給排水配管工事のため、重機にて幅90cm・深さ150cmの溝を南北50mにわたって掘削する。前回調査区の東側に沿う工事であるため、遺構への影響が予想された。掘削は包含層下まで及ぶが、精査の結果、遺構は存在しなかった。北から35mの地点までは包含層の堆積が確認できるが、以南においては既に人為的な改変が加えられており、客土の堆積が確認できる。記録保存し、工事の着工を許可した。

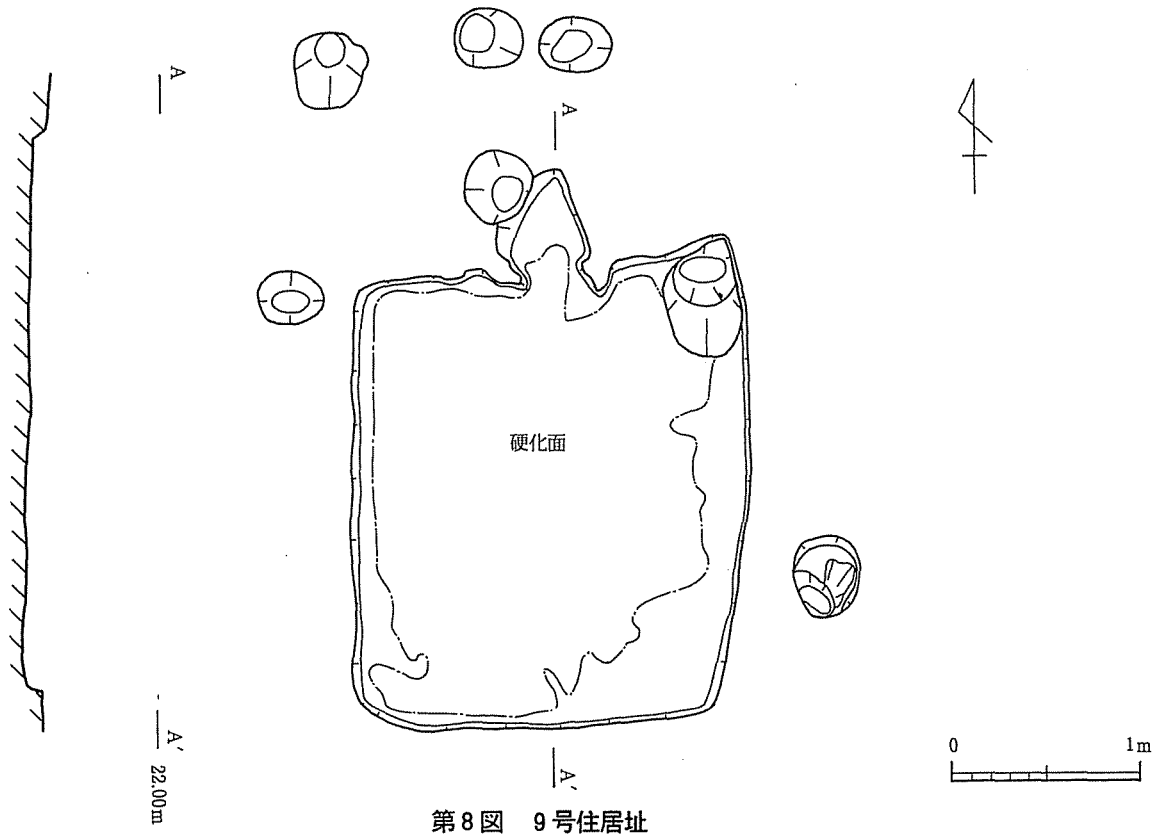
また19日の工事を更に北へ20m延長した。深さは60cmであり、客土層および撹乱層内での工事である。したがって状況確認の上、埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



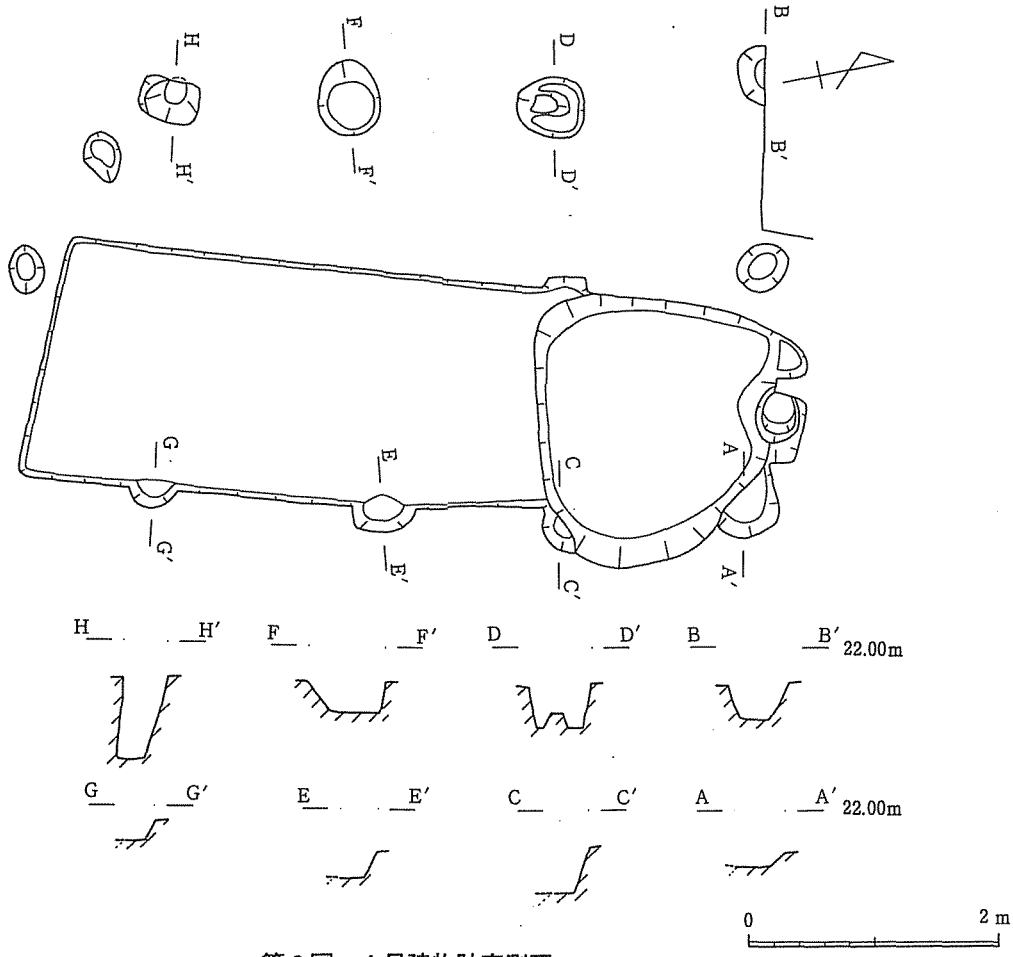
第6号　1・2号住居址


6号住居址
5号住居址
4号住居址
3号住居址
8号住居址
7号住居址
A
A′
22.00m
B
B′
22.00m
C
C′
22.00m
0
1 m

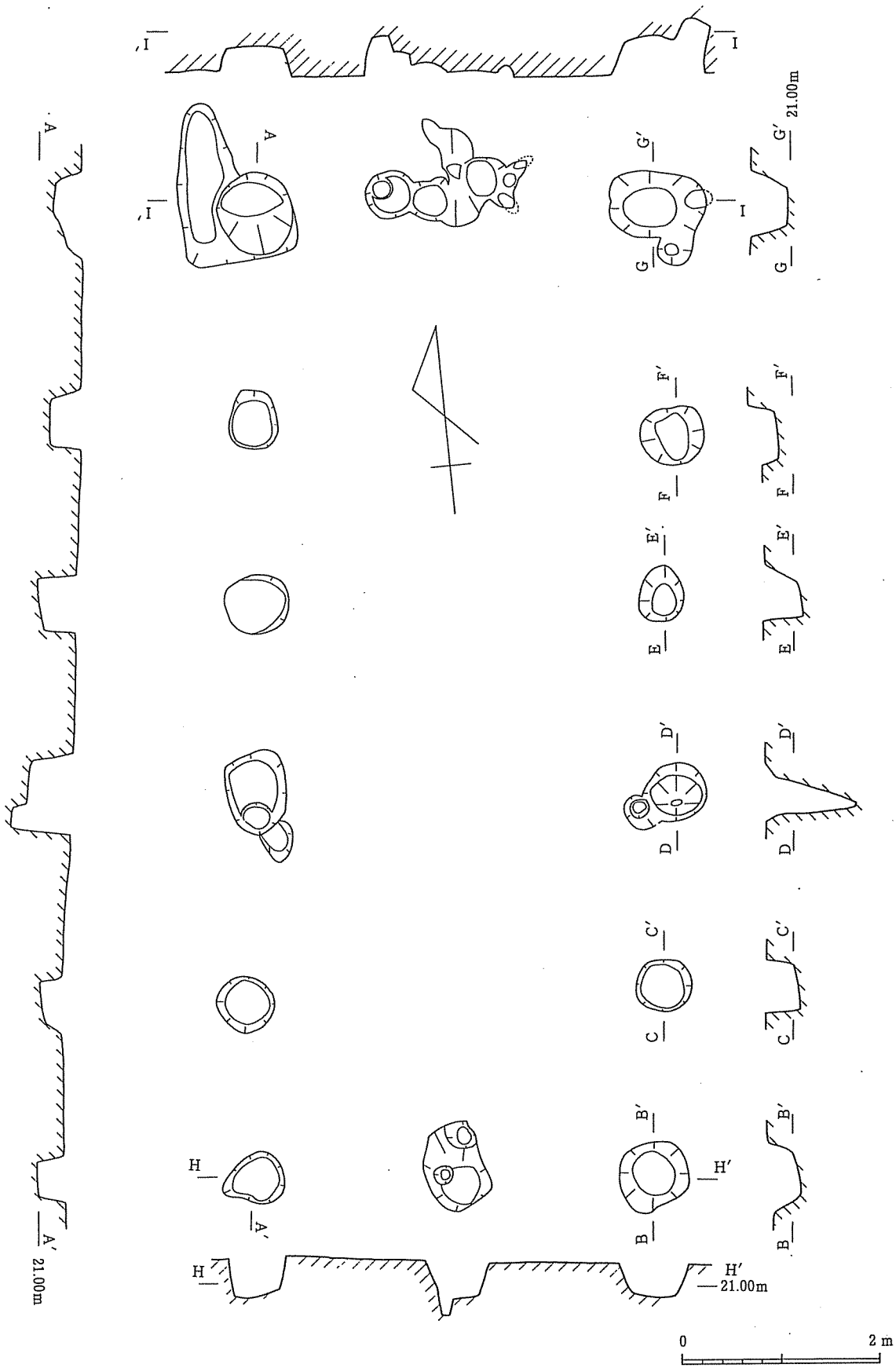
第7図　3～8号住居址



第8図　9号住居址



第9図　1号建物跡実測図



第10図　2号建物跡実測図

4．福利施設出土遺物（第11図）

出土遺物はパンケース50箱以上に及ぶが、時期判定可能な遺構出土の遺物が少ないため、残存状況の良好な遺物を抽出して紹介する。

2号住居址出土遺物

土師器　碗（2）体部はやや膨らみを帯び、口縁部はゆるやかに外反する。高台は体部から丸みをもって屈曲し、底部端につく。貼り付け後ナデ調整によって仕上げられている。内外器面ともにナデ調整が施されている。

Ⅱ区遺物集中地点出土遺物

須恵器　坏（1）平坦な底部より直線的に体部へとつながる。口縁部はわずかに外反するが、やはり直線的である。口縁端部は鋭角的である。底部は回転ヘラキリ後ナデ調整による。

土師器　碗（4）体部はわずかに内湾し、口縁部はわずかに外反する。体部と高台の境は丸く、中実高台をもつ。底部は回転ヘラキリ後ナデ調整が施されている。

ピット内出土遺物

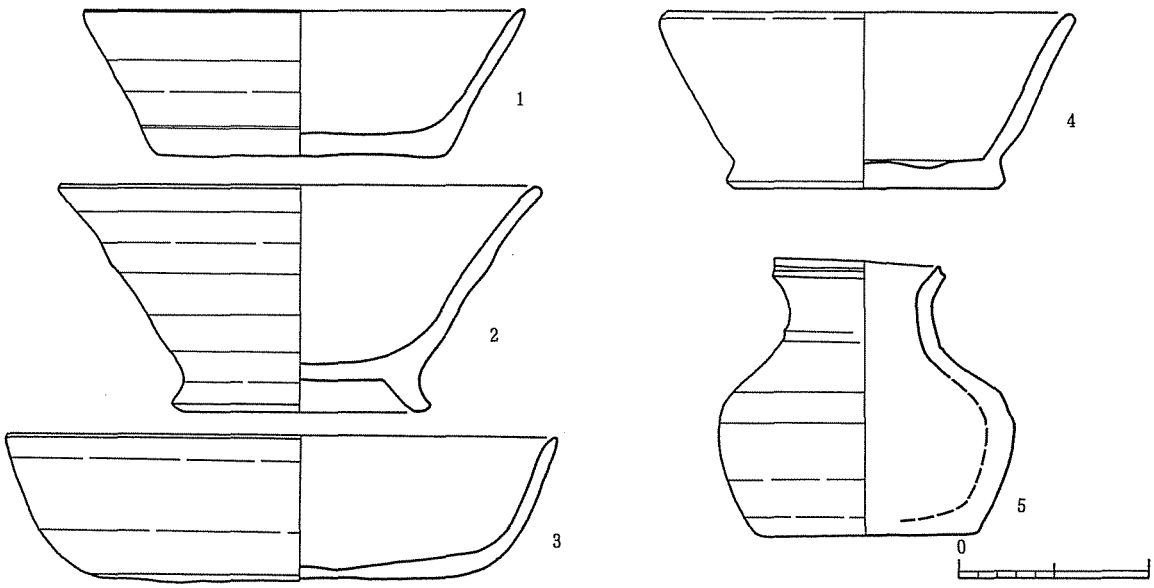
土師器　坏（3）平坦な底部より直線的に体部へとつながる。体部はわずかに内湾する。体部外器面は回転ヘラケズリ後ナデ調整が施されている。

遺構外出土遺物

短頸狭口壷（5）体部は肩部が張り偏平であり、頸部は体部よりゆるやかに外反する。口縁部は頸部よりくの字に内曲し、さらに外反する。底部は平坦である。体部外器面は回転ヘラケズリ後ナデ調整が施されている。

5．まとめ

本調査区においては遺構として住居址9軒・建物跡2軒を検出することができた。遺跡の存続時期は出土遺物より8世紀末～9世紀前半代に相当するであろう。住居址が北側に集中していることより、集落の中心はさらに北に位置するものと考えている。



第11図　出土遺物実測図

3．工学部実験棟調査

1．調査の目的と経過

今回の調査地区は、黒髪キャンパス南地区工学部１号館の南側、共同実験棟及び中庭として利用されていた場所である。工学部研究実験棟新設工事に伴う調査であり、総調査面積は東西49.2m・南北33.8mで約1663㎡となる。しかしながら旧実験棟として利用されていた部分は、その建造物が地中深くにまで及んでいるため、埋蔵文化財の遺物包含層及び遺構が破壊されていることを確認の上で、精緻な調査の必要がないと判断した。したがって実調査地区は中庭であった部分東西22m・南北33.8mの、面積743.6㎡である。

遺物包含層は、地表下60cmから約60cmに渡って堆積する。しかしながら実調査区においても旧建築物および樹木移植による撹乱、さらに鉄筋コンクリートの解体片等産業廃棄物が埋められているため、遺物包含層がかなりの広範囲に渡って乱されていた。したがって包含層内における遺構の確認は不可能であると判断し、上層を大部分除去し、包含層下の遺構が掘り込まれる面において遺構の確認を行う方向を採った。

８月30日　樹木移植開始。

９月８日　重機による表土層除去。旧建築物の基礎などの産業廃棄物の除去。包含層の保存状態が非常に悪いため、遺構掘り込み面にて遺構確認を行う方針を立てた。

９月12日　作業員投入。撹乱部分を徹底的に除去。

９月22日　撹乱部除去終了。

９月26日　残存する包含層の掘り下げ開始。ピット内より土製印出土。

９月29日　雨天のため中止。

10月５日　調査区南側で溝状の遺構確認。調査区北東部分の一角に包含層の落ち込む部分を確認（以下北東地区）。

10月７日　溝状遺構内より籾殻を検出。遺構確認できず。同遺構内にて集石を検出。

10月11日　北東地区において遺構確認のためトレンチを掘る。土器片大量に出土。住居址３件を確認。

10月12日　雨天のため中止。

10月13日　北東地区においてピットを検出。

10月14日　焼土などの痕跡を検出。住居には伴わない。

10月19日　図面作業開始。溝状遺構内の集石より採図。遺構配置図作成。

10月21日　雨天のため中止。

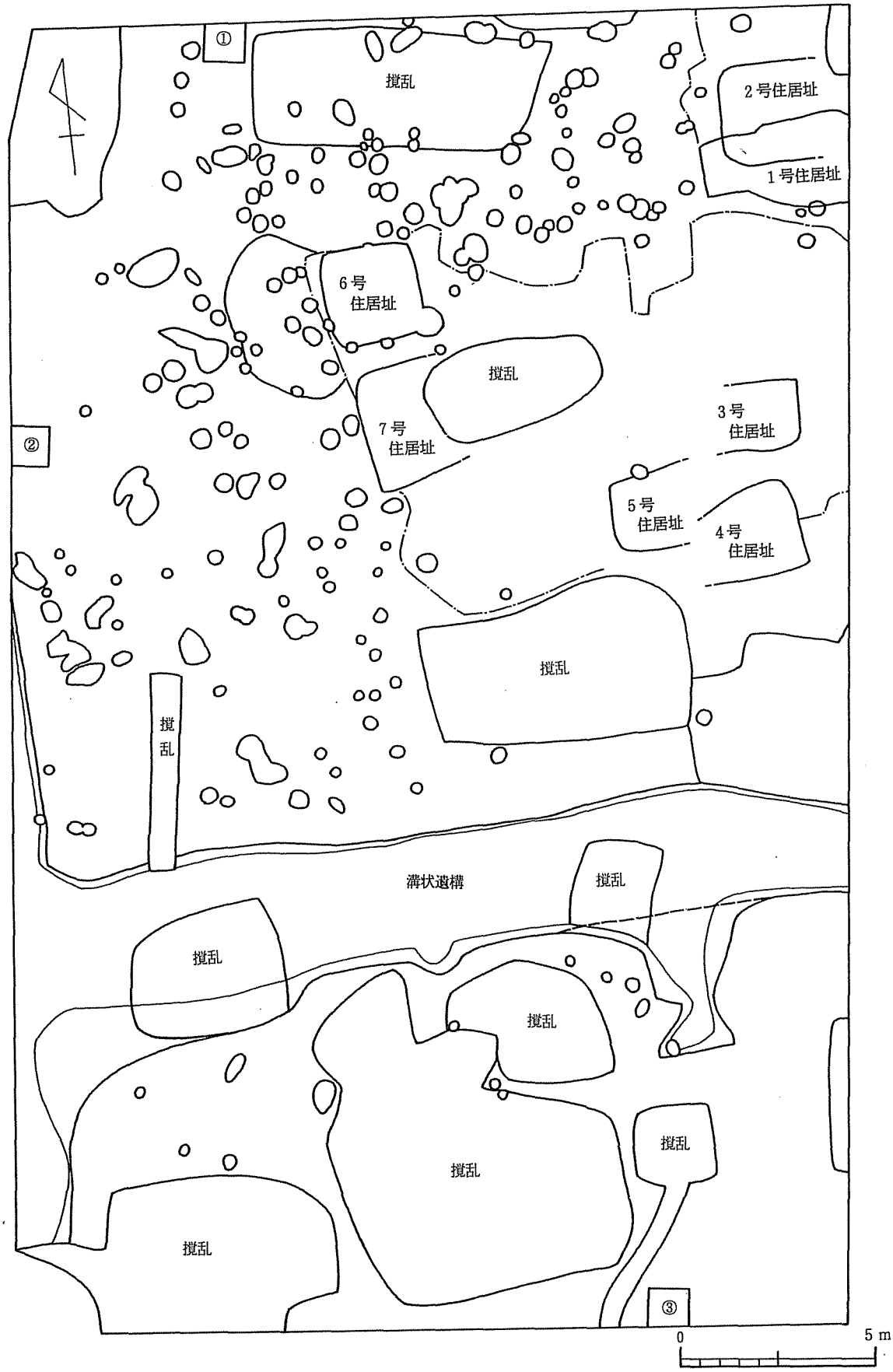
10月24日　層序確認のため３箇所を深堀りする。

10月26日　土層断面図作成。住居址５件を検出。かなり破壊されている。

10月27日　住居址さらに２件確認、検出。

10月28日　遺構検出状況・全景写真撮影。図面が完了した住居より地山整形面まで掘り下げる。

10月31日　掘り下げを完了し、採図を行い、調査を終了。



第12図　遺構配置図

2．層序（第13図）

工学部実験棟新営工事に伴う調査において確認された層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層：褐色土層（10Ｙ R6／8）

表土及び撹乱層である。２度の整地が施されている。瓦・石など多く含む。

Ⅱ層：Ⅱａ　黒褐色土層（10Ｙ R3／2）

二次堆積の包含層である。焼土粒・砂粒・小石など多く含む。乾燥した質感で、固くしまっている。

Ⅱｂ　黒褐色土層（10Ｙ R2／2）

一次堆積の包含層である。焼土粒などわずかに含む。やや湿気のある質感で、粒子が細かく、柔らかい層である。

Ⅲ層：明黄褐色土層（10Ｙ R6／8）

遺構はこの層に掘り込まれる。ローム層である。混入物はない。やや乾いた質感で粒子は細かい。

Ⅳ層：明褐色土層（7.5Ｙ R5／8）

質的にはⅢ層と同様だが、色調が異なる。　層と同質の塊がブロック状にはいる。

Ⅴ層：明黄褐色土層（10Ｙ R6／6）

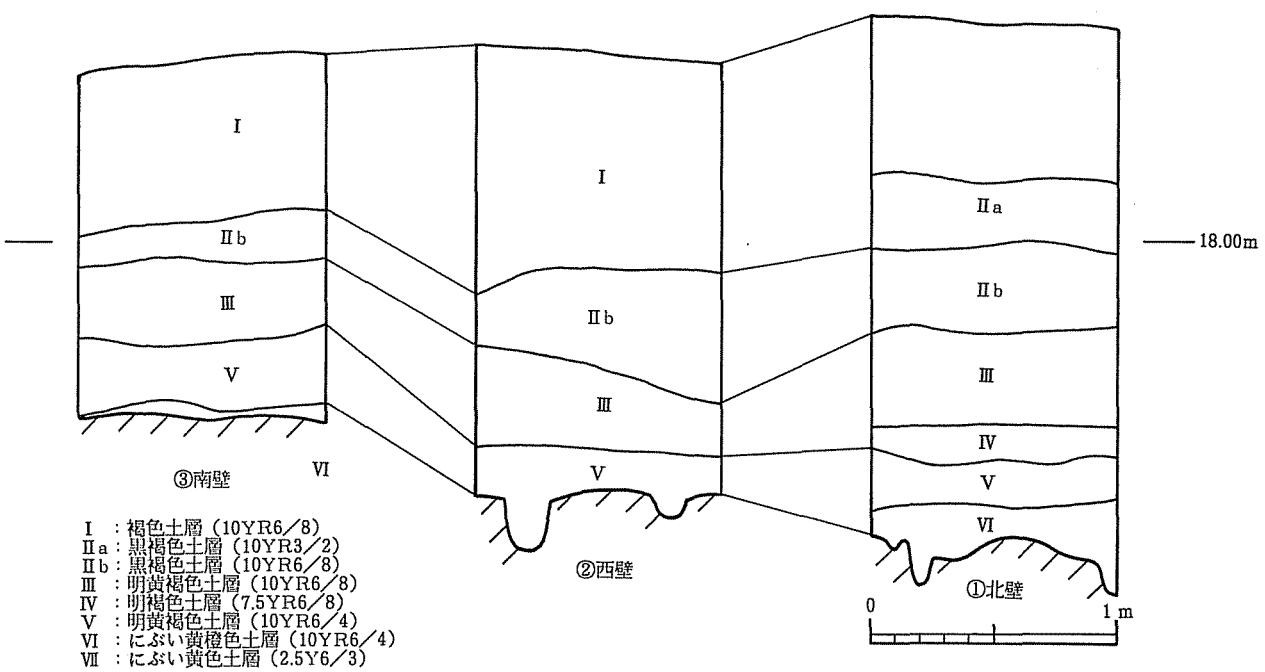
質的にはⅢ層と同様で、さらに固くしまる。混入物はない。

Ⅵ層：にぶい黄橙色土層（10Ｙ R6／4）

Ⅲ層同様の土質で、Ⅶ層がわずかに混入する。

Ⅶ層：にぶい黄色土層（2.5Ｙ6／3）

岩盤である。非常に硬質である。表面には細かい凹凸が激しい。



第13図　工学部セクション図

3．調査結果

竪穴住居址（図版３）

竪穴式住居址は、破壊を受け詳細の明らかでないものを含めて、計７基が検出された。本調査区においては遺物包含層の保存状態が不良であったため、包含層下のⅢ層上面まで重機による削平を行い、Ⅲ層上面において残存する遺構の確認を行った。調査区北東部分にⅢ層を掘り込んで包含層が保存される一帯があり、住居址はすべてこの地区より検出された。上記の一帯は南北14ｍ・東西14ｍに渡って、Ｌ字状に確認でき、面積は約135㎡に及ぶ。本来は今回調査で検出した住居数以上の住居址が存在したものと推定している。

１号住居址（第14図）

１号住居は調査区の北東隅に位置する。一部旧建築物の撹乱による破壊を受けるが、基本とする平面プランは２×２ｍの隅丸方形を呈する。また住居西側に1.2×1.2ｍの方形の突出部が付設される。住居内におけるものと同様の硬化した床面をもち、壁体も一連のものである。したがって方形を主とする通例とは異なるが、１号住居の一部として認定している。住居入り口部分に相当するのではないかと考えている。主軸はＷ－５°－Ｓである。残存する壁高は15㎝である。柱穴は突出部西端に１基、住居外南壁際に１基を検出したが、全容は明らかではない。柱穴規模は、前者が直径63㎝の円形で深さ55㎝、後者が長軸65㎝・短軸45㎝の楕円形で深さ65㎝である。

２号住居址（第14図）

２号住居は１号住居の下に掘り込まれている。南側1／3が１号住居と重複する。床面が柔らかいため確認が遅れ、掘方のみの検出となった。平面プランは、残存部と他の住居の例より１辺2.2ｍの方形を想定している。主軸は東西方向である。残存する壁高は15㎝である。柱穴は住居の周囲を廻る５基と住居内の１基を検出した。柱穴直径はいずれも30～35㎝であり、深さは15～35㎝とやや統一を欠く。

３号住居址（第15図）

３号住居は調査区東側中央付近に位置する。破壊を受け詳細は明らかではないが、2.0×1.7ｍの長方形のプランを想定している。主軸はＷ－４°－Ｎである。非常に小規模の住居である。残存する壁高は16㎝である。柱穴は確認できなかった。

４号住居址（第15図）

４号住居は、３号住居から約1.0ｍの距離をおいて南側に位置する。やはり破壊を受けており、詳細は明らかでない。2.5×2.3ｍの方形プランを想定している。主軸はＷ－10°－Ｓである。残存する壁高は20㎝である。柱穴は東壁際に２基を検出した。直径20㎝・深さ22㎝のものと、長軸30㎝の楕円形で深さ20㎝のものである。３・４号ともにカマドおよび炉跡は残存しない。

５号住居址（第15図）

５号住居は調査区東側中央部分、３・４号住居の西に位置する。確認が遅れたことと、破壊

を受けていることより、詳細は明らかではない。残存部より1.8×2.0mの小規模の住居を想定している。主軸はW－5°－Sである。残存する壁高は25cmである。柱穴は住居内中央に直径30cm・深さ25cmのものを1基、住居北壁際に直径30cm・深さ60cmのものを1基検出した。

6号住居址（第16図）

6号住居は調査区北側中央に位置する。平面形は2.5×2.4mの方形を呈する。主軸はW－4°－Sである。残存する壁高は35cmである。柱穴は住居壁に半分かかるような形で4基、いずれも直径20～25cmであるが、床面よりの深さ10～50cmとばらつきをもって検出されている。また住居外にも住居を廻るように、直径30～50cmのピットを6基検出した。深さは35～65cmである。住居南東隅にはカマドが付設する（第18図）。住居の壁体の一部を掘り込んで構築したものであり、カマド壁体は粘土をもって作られる。幅100cm・長さ115・高さ50cm・焚口幅50cm・奥行55cmである。住居内北東隅にカマドとは別に灰が集中する。1×1mの正方形の範囲に広がっており、床面より5cm程度高く段を形成する。灰の広がる面を除去すると、下には直径50cm・深さ20cmの円形のピットが存在する。ピット内には灰が多量に混入する土が充填されており、カマドより排出される灰の廃棄場所、もしくはなんらかの必要により灰を保存する場所ではないかと推定している。

7号住居址（第16図）

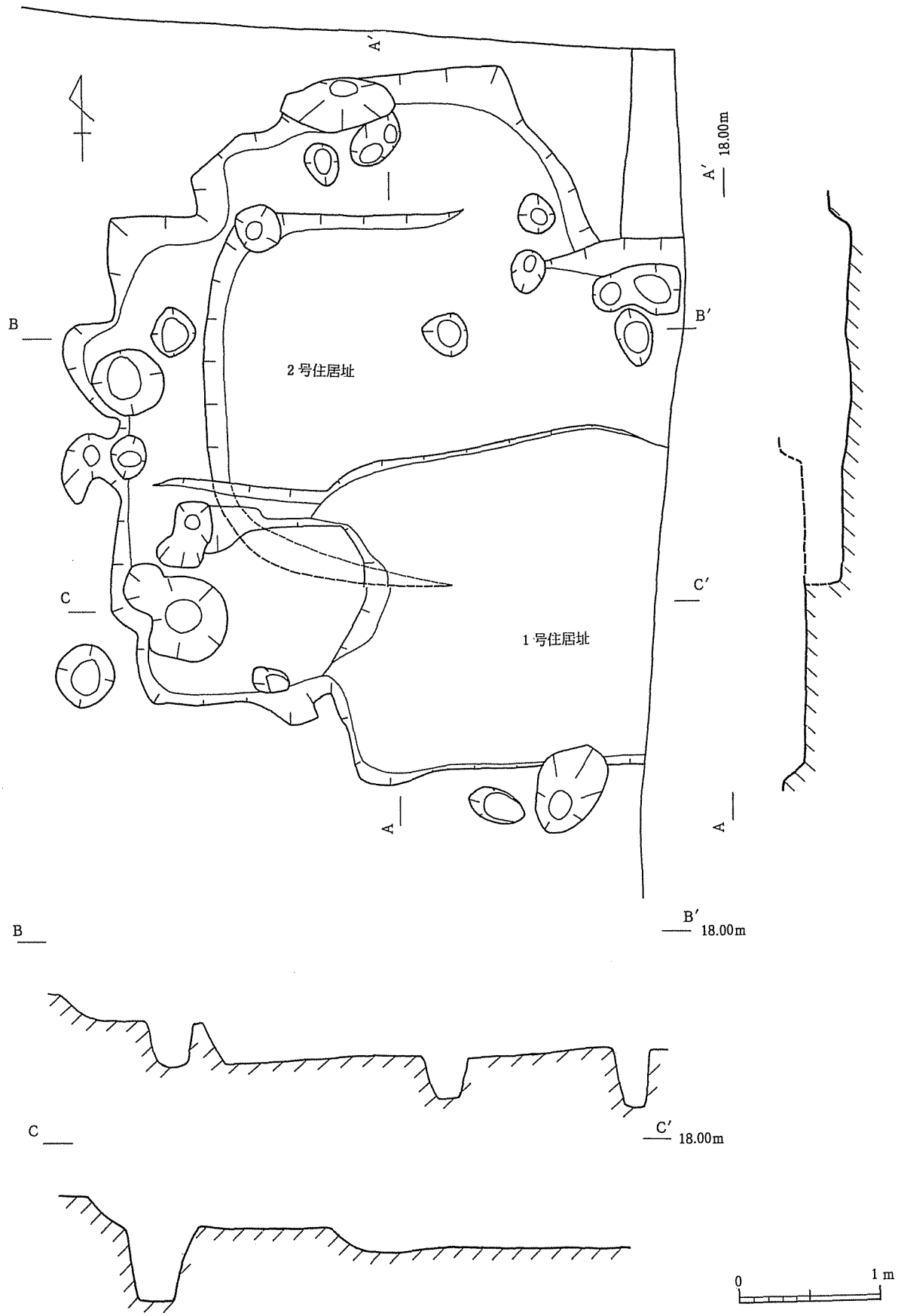
7号住居は6号住居との間に50cmの間隔をおいて、すぐ南に存在する。東側の大部分が破壊を受けており、全容は明らかではない。西壁3.0mを確認している。主軸は東西に沿う。残存する壁高は35cmである。柱穴は住居壁際に相当する部分に2基、住居内に2基、住居外に3基を検出した。壁際のものは長軸30cmの楕円形で深さ20～30cm、住居内のものは直径40cmの円形で深さ30～35cmである。住居外には直径50cm・深さ30cmのもの2基、直径35cm・深さ35cmのもの1基をそれぞれ検出した。6号・7号を通じて柱穴の大きさにばらつきがある。これは住居内壁際に沿って細い柱を並べ、住居外に比較的太い柱を配置し、住居上屋部を支えたものと考えている。

溝状遺構（第12図）（図版3）

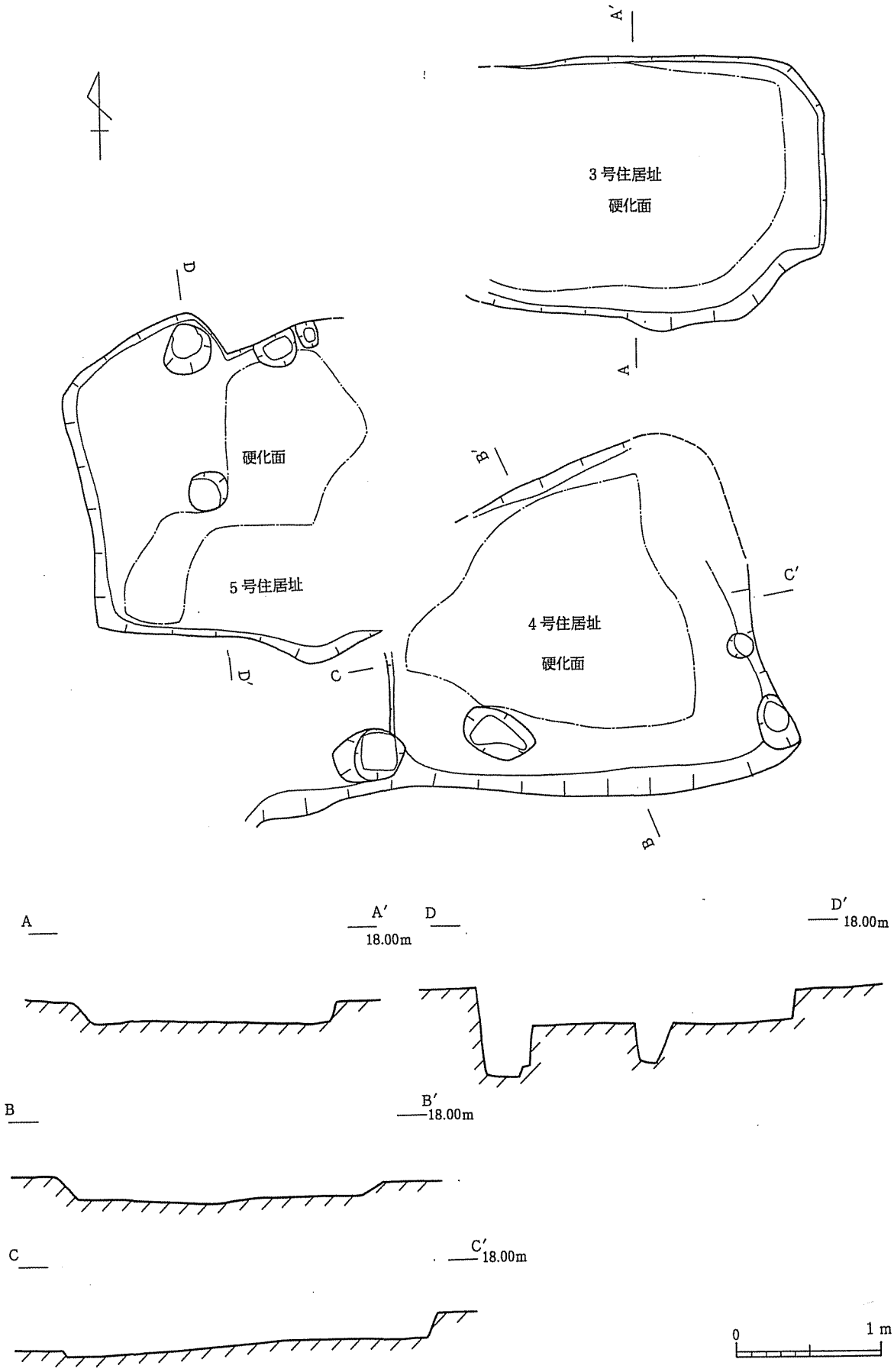
溝状の掘り込みは調査区南半部において、幅約3m・深さ60～80cmをもって東西に伸び、現状では調査区西端付近でT字に分岐する。分岐点の西側は調査区外になるため、実際には十字、またはそれ以上に分岐する可能性も考えられる。遺構および遺物の密度が、この溝を境界として極端に異なることより、本区の一連の集落に伴うものと考えている。溝内の堆積土は基本的にすべて火山灰土層である。遺物は少ない。

集石遺構（第17図）

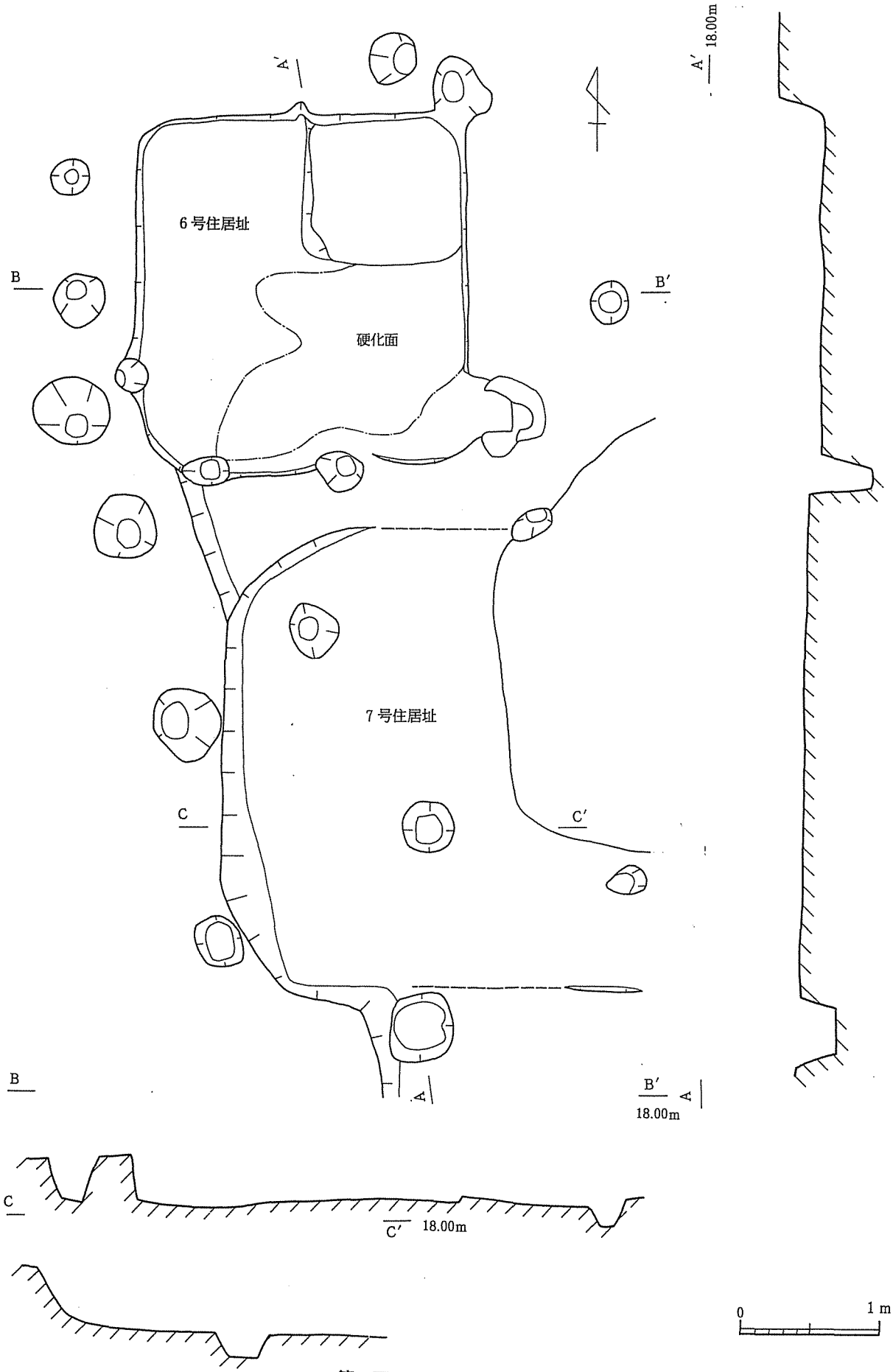
溝状遺構の分岐点底部に5～10cm程度の河原石を集めた集石遺構を検出した。百数十個の石を積み、範囲は東西40cm・南北70cmの楕円状に広がる。石の間には須恵器・土師器片が混在する。集石の性格は判然としない。



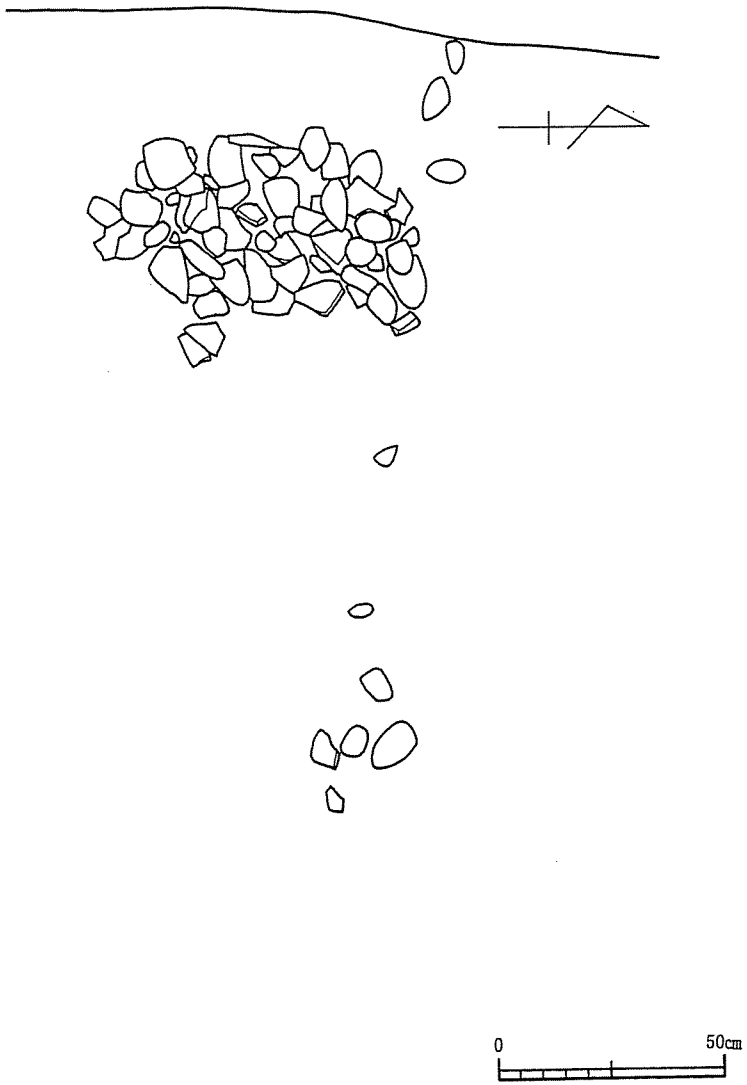
第14図 1・2号住居址


A′
3号住居址
硬化面
A
D
硬化面
5号住居址
D′
C
B′
C′
4号住居址
硬化面
B
A
A′
18.00m
D
D′
18.00m
B
B′
18.00m
C
C′
18.00m
0
1 m

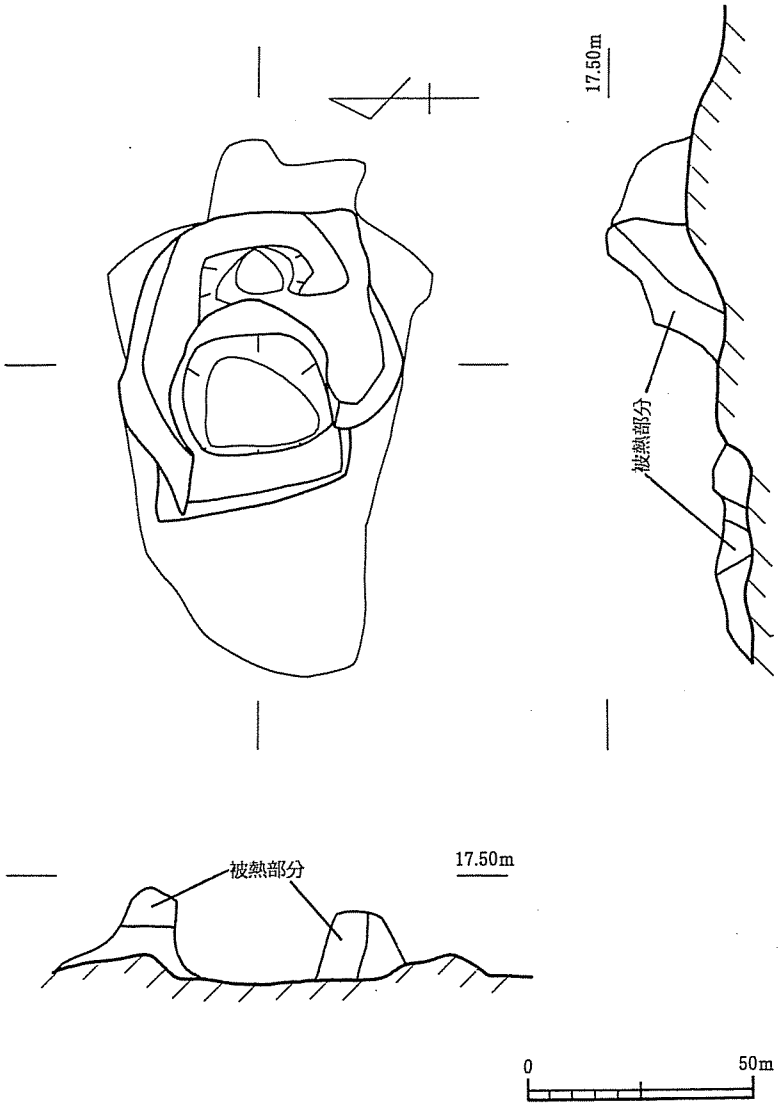
第15図　3～5号住居址



第16図　6・7号住居址



第17図　集石遺構実測図



第18図　6号住居址カマド実測図

4．工学部実験棟出土遺物（第19図）

出土遺物はパンケース30箱程である。遺構出土のものを中心に、時期比定可能なものと特記すべきものを抽出し紹介する。

5号住居址出土遺物

土師器　坏（1）体部は平坦な底部から内湾しながら口縁部へとつながる。器高は低い。内外器面ともに底部から体部にかけて回転ヘラミガキが施されている。

6号住居址出土遺物

須恵器　椀（3）体部はわずかに内湾し、口縁部は外部に膨らみをもちつつ外反する。高台は底部端に垂直に貼り付けられ、器高に比べ短い。内外器面ともにナデ調整が施されている。

ピット内出土遺物

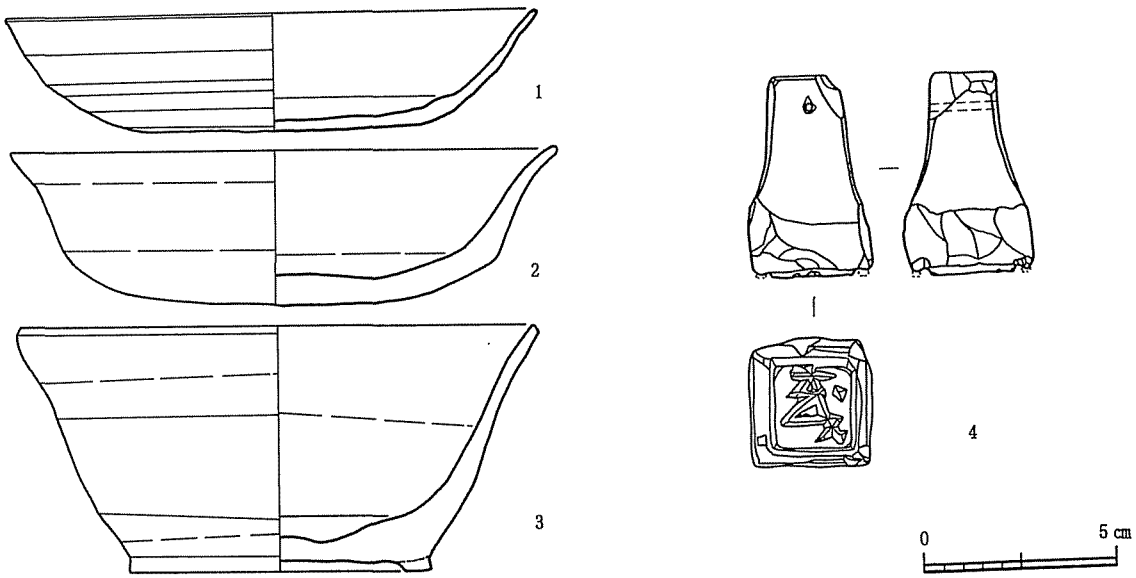
土師器　坏（2）体部は平坦な底部より内湾し、口縁部は外反する。全体的に丸みを帯びている。底部はヘラキリ後ナデ調整が施されている。内外器面ともにナデ調整が施されている。

土製印（4）粘土を堅く焼き締めたものを整形し、彫刻刀のような工具で陰刻を施している。大きさは全長53㎜・使用面34×32.5㎜である。使用面は角がとれ破損しているが、「口」（くにがまえ）のあった痕跡があり、恐らく「國」の正字と考えられる。把手部分には径2㎜の穿孔がなされている。

5．まとめ

当遺跡の存続時期は、出土遺物より8世紀後半に比定できる。上記の土製印はピット内中位より出土した。同ピット内より土師器片・須恵器片が出土していることより、遺跡存続時期に同定できよう。調査区南側に存在する溝状遺構内の上位堆積土層中からは陶磁器が出土しており、同溝がかなり長期にわたって存続していたことが窺える。

（第19図）



第19図　出土遺物実測図

4．教育学部エレベーター調査（第20図）

エレベーター設置に必要な面積と同じ大きさの６ｍ×８ｍグリッドを設定し、その中央部分を重機によって掘り下げたところ、武夫原グランドでみられたようなシルト質土層の堆積は見られず、過去の水田面と思われる粘土層とその下に砂質土層の堆積が確認できた。砂質土層は白川の氾濫によって堆積した洪水層であると思われる。この土層は全体的にしまりが非常に悪く、安定性にも欠け、重機で掘り下げている間にも崩落していくほどであった。このため重機の固定が困難となり、またグリッド内での作業も危険であると判断したことから、地表面より２ｍほど掘り下げた時点で調査を断念した。重機による掘り下げ作業中、遺物は全く出土しなかったこと、また遺物包含層となりえるようなシルト質土層が確認できなかったことなどからこの付近には遺物包含層は存在しないと考えられる。以下に、調査時の土層観察所見をのべる。

Ⅰ層：黒褐色土層（10ＹＲ3／2）粘性は強いがしまりは弱い。礫やレンガ、ロームブロックが多量に含まれる。教育学部の建物の基礎を築いた時の掘り込みに廃材が投げ込まれたものと思われる。

Ⅱ層：褐色土層（10ＹＲ6／4）粘性があまり強くないシルト質土層。砂利や礫、ガラスを含み、部分的に鉄分の沈着が観察できる。水田面上の盛土と考えられる。

Ⅲ層：黒色土層（7.5Ｙ1／2）水田面である。イネワラが腐食せずに残存していることからそれほど古いものではないと考えられる。保水性、粘性が極めて高く、細かい粘土によって構成されている。

Ⅳ層：オリーブ黒色土層（5Ｙ1／3）保水性の高い粘土層である。しまりは良好で粘性も強い。ガラスが出土しており、比較的新しい時期の堆積であると思われる。

Ⅴ層：青灰色砂層（10ＢＧ1／5）礫や砂利を含む砂層である。粘性はなく、安定性も悪い。

5．工学部エレベーター調査（第20図）

エレベーター設置に必要な面積と同じ大きさの５ｍ×８ｍのグリッドを設定し、重機を用いて　層上面まで掘り下げ、その後手作業で発掘を行った。アスファルトとその下の整地面を剥ぐと過去の建物の基礎が現れたことから、既にこの地点にはかなり撹乱が入っており、遺物包含層も残存していないことが予想されたが、重機で掘り下げたところ遺物包含層の可能性があるシルト質土層（Ⅱ層）があり、ここから数点の土器が出土した。細片のため時期は特定できなかった。この層の下にはやはり同様にシルト質土層が存在したが、遺物は出土しなかった。以下に調査時の土層観察所見を述べる。

ａ：アスファルト

ｂ：砂利層。アスファルト下の整地面。

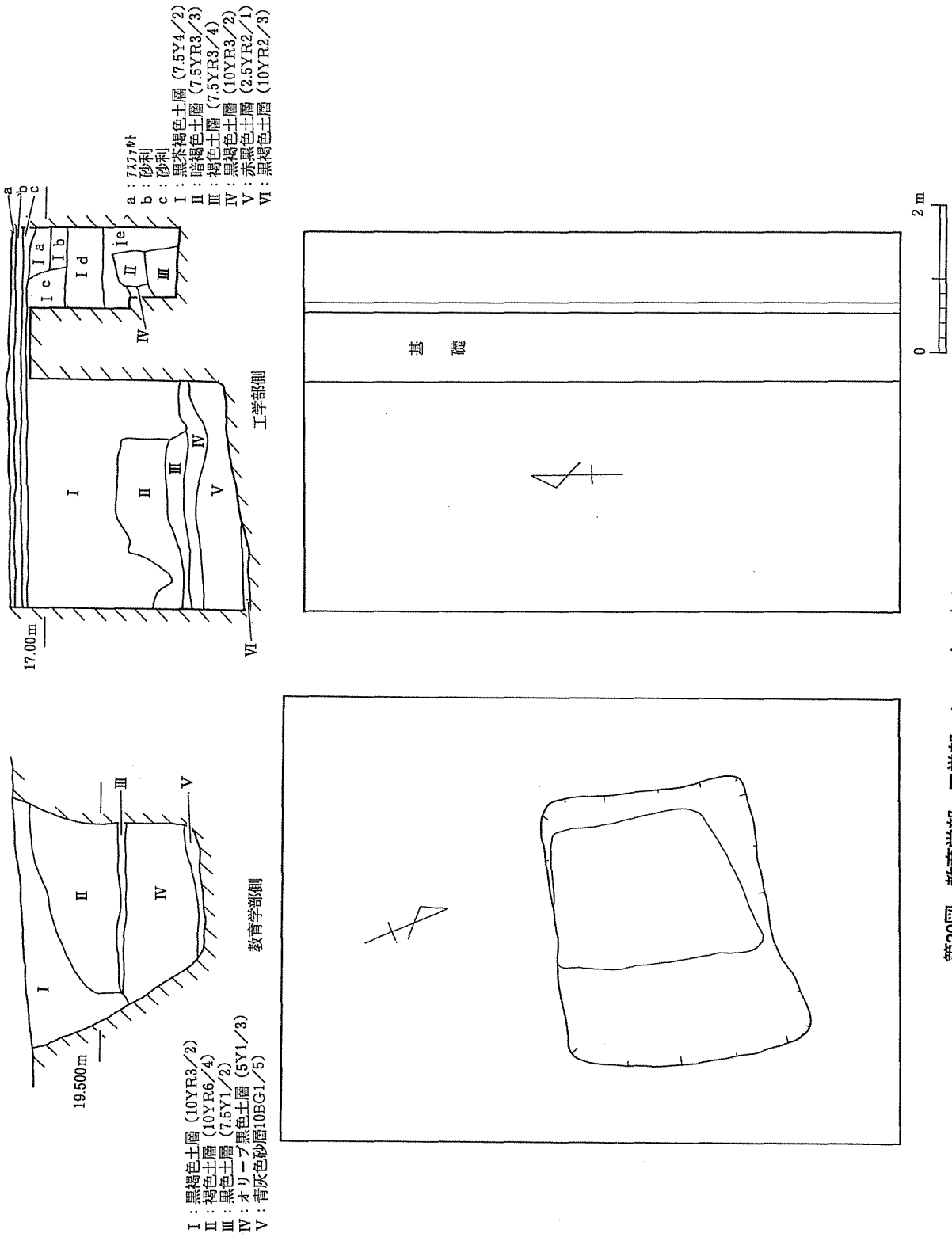
ｃ：砂利層。整地面。

Ⅰ層（含ａ～ｆ）：黒茶褐色土層（7.5ＹＲ4／2）ロームブロック、バラス、レンガなどを含む撹乱土層である。しまりはあまりなく、粒子もふぞろいである。

Ⅱ層：暗褐色土層（7.5ＹＲ3／3）粘性のあまり強くないシルト質土層。若干土器片が出土する。上部は撹乱によって削られている。

Ⅲ層：褐色土層（7.5ＹＲ3／4）砂質シルト層であり、非常にしまりがよく、緻密である。

Ⅳ層：黒褐色土層（10ＹＲ3／2）３㎝程度の河原石を含む砂層である。しまりはわるく、粘



第20図　教育学部・工学部エレベータ工事トレンチ・セクション図

性もほとんどない。

Ⅴ層：赤黒色土層（Hue2.5Y R2／1)砂層。白川の氾濫による洪水層であろう。下部の方が粒子が細かくなる。上部には小石を含む。

Ⅵ層：黒褐色土層（Hue10Y R2／3)非常に緻密な基盤層である。

6．黒髪地区立会調査

武夫原器具庫

熊本大学器具庫新営工事に関する調査を平成６年８月11日に行った。黒髪北地区内西側に位置する運動場内の西端に器具庫を新営する工事である。工事範囲は東西６ｍ・南北39ｍの234㎡である。調査は工事区域の長軸39ｍに沿って、幅60ｍで工事の掘削に必要な深さのトレンチを掘り、遺物包含層への影響の有無の確認を目的として行った。前回の運動場における調査より、奈良・平安時代の遺物包含層は地表下約１ｍから約30㎝に渡って堆積するⅢ層であることが確認できている。工事に必要な掘削は40～60㎝であり、運動場におけるⅡ層の上面を削平する程度のものであった。Ⅱ層はひどく撹乱されている土層であり、したがってこの工事による埋蔵文化財への影響は、全くないものと判断した。

熊本大学附属図書館

一連の熊本大学黒髪団地基幹設備工事における、附属図書館のスロープ取設工事に際して、平成６年８月22日立会調査を行った。附属図書館は黒髪北地区内南側中央に位置する。今回の工事は図書館西側の正面玄関前にスロープを取設するものであり、９×3.7ｍの範囲に幅2.5ｍのＬ字状の掘削を行う。掘削面積は25.5㎡である。調査目的は工事に必要な掘削が及ぼす、遺物包含層および遺構に対する影響の有無の確認であり、工事による掘削は地表下50㎝までである。結果として調査区の大部分が撹乱層であり、地表下50㎝程度では遺物・遺構ともに確認できなかった。また撹乱部分以外はすべて表土層であった。したがって工事による埋蔵文化財に対する影響は、全くないものと判断した。

工学部共同溝（第21図）

熊本大学工学部研究実験棟新営工事の一環としての共同溝設置工事に伴い、１月９～11日および１月26～２月１日の間、調査を行った。実験棟調査地区より南方約70ｍの地点に幅６ｍで東西110ｍ、その東端より同幅をもって北に16ｍの掘削を必要とする。今回の調査区は埋蔵文化財包蔵地指定地区の境界にあたる地点であり、実験棟新営工事に伴う調査の結果を踏まえ、遺物包含層の広がる範囲の確認を目的として調査を行った。調査の結果遺物包含層および遺構は存在せず、以下にその層序の所見を述べる。

Ⅰ層：撹乱層である。道路舗装時の砂利やバラスを含む。

Ⅱ層：黒褐色土層（10ＹＲ3／1）客土層である。

Ⅲ層：褐色土層（10ＹＲ4／4）客土層である。

Ⅳ層：黄褐色土層（10ＹＲ5／6）火山灰である。実験棟調査地区における遺構確認面である。

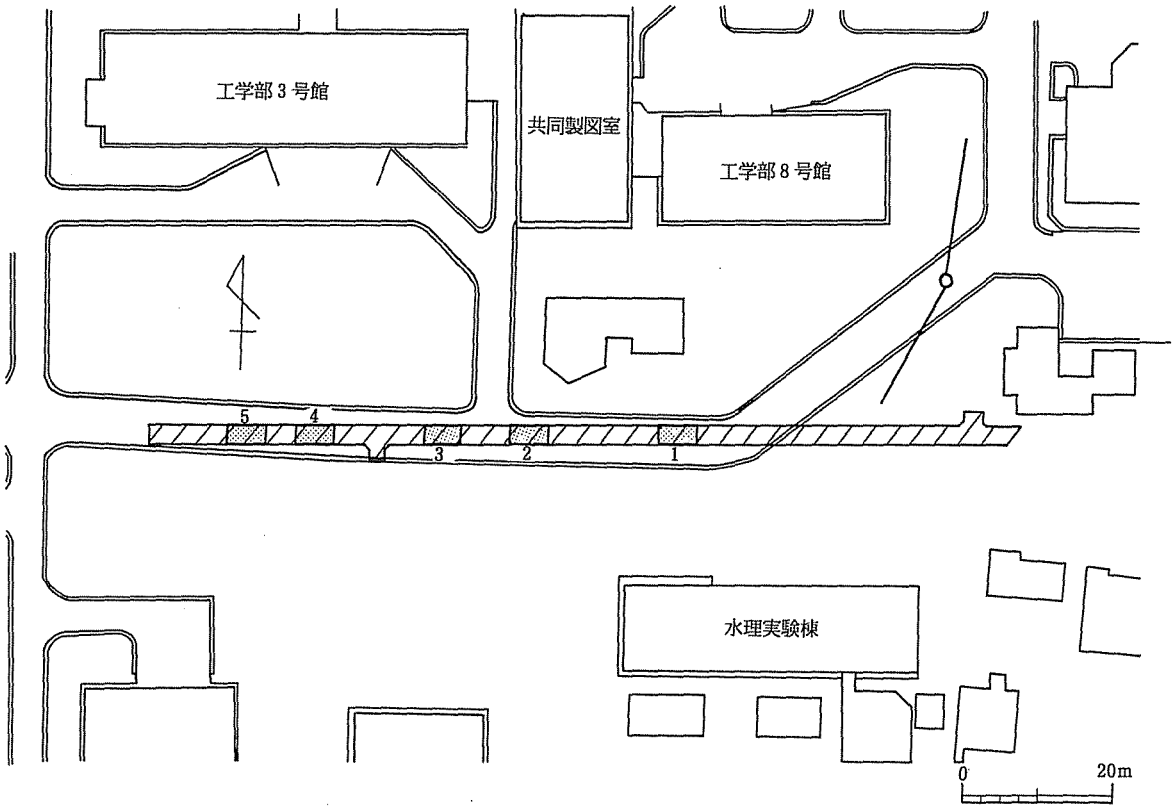
Ⅴ層：褐色土層（10ＹＲ4／6）粒子は細かく、緻密である。

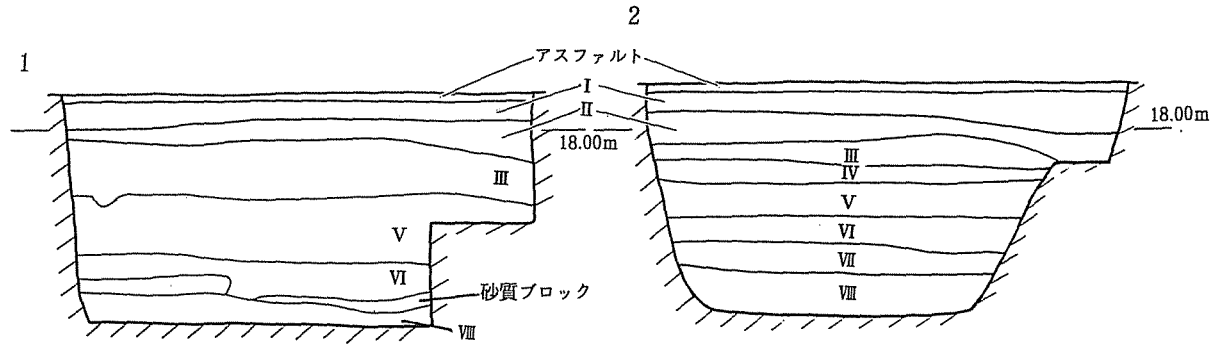
Ⅵ層：黄褐色土層（2.5ＹＲ4／6）下位に青灰色のブロックを多量に含む。

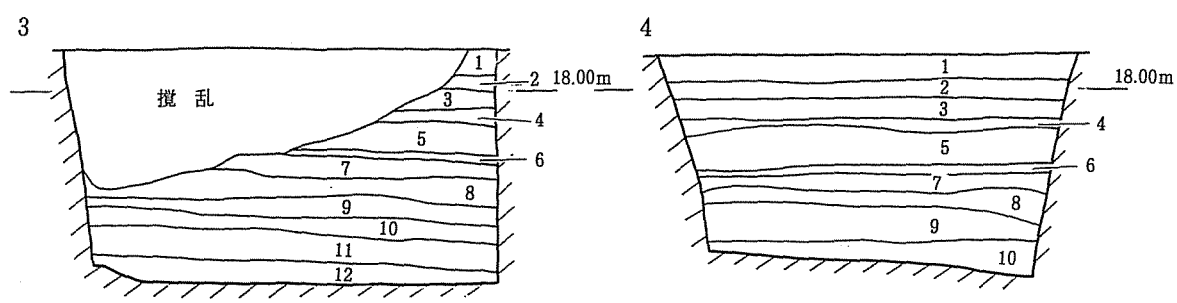
Ⅶ層：オリーブ褐色土層（2.5Ｙ4／4）火山灰であり、水の影響を受ける。

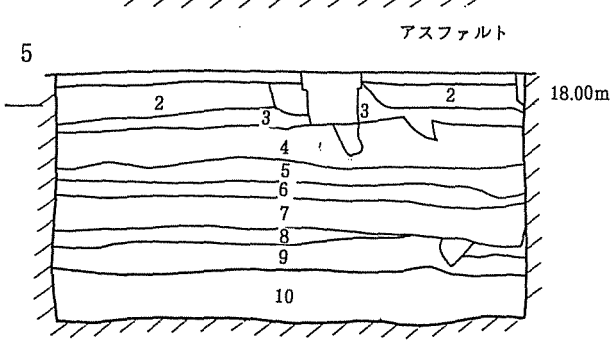
Ⅷ層：青灰色土層（10ＢＧ5／1）粒子の細かい砂層である。川底の堆積層である。

Ⅳ層以下は全体に均質な土層である。粘質はなく、混入物も含まれない。また１，２トレンチでは純粋な自然堆積層を確認したが、３～５トレンチにおける堆積土層はすべて客土層であった。









Ⅰ層：撹乱層
Ⅱ層：黒褐色土層（10YR3／1）
Ⅲ層：褐色土層（10YR4／4）
Ⅳ層：黄褐色土層（10YR5／6）
Ⅴ層：褐色土層（10YR4／6）
Ⅵ層：黄褐色土層（2.5YR4／6）
Ⅶ層：オリーブ褐色土層（2.5Y4／4）
Ⅷ層：青灰色土層（10BG5／1）

1層：バラス
2層：砂利
3層：黒褐色土層（10YR2／2）
4層：オリーブ褐色土層（5Y3／1）
5層：褐色土層（10YR4／4）
6層：黒褐色土層（10YR2／3）
7層：暗褐色土層（10YR3／3）
8層：褐色土層（10YR4／4）
9層：暗褐色土層（10YR3／3）
10層：暗褐色土層（10YR3／4）
11層：暗褐色土層（10YR3／3）
12層：暗褐色土層（10YR2／3）

0　2m

第21図　工学部共同溝調査区およびトレンチ・セクション図

4．京町地区

1．熊本大学附属中学校調査結果

1．遺跡の位置と環境

（1）遺跡の位置

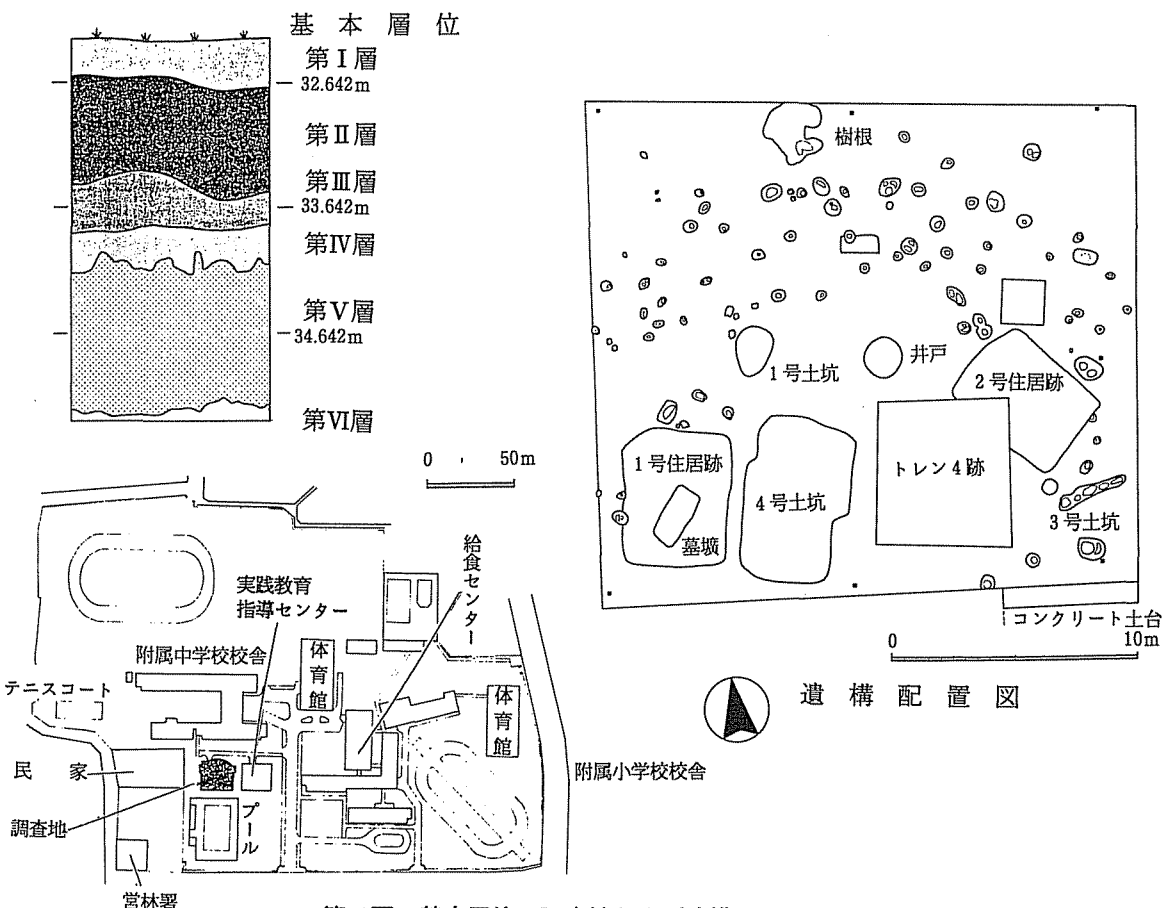
遺跡は、熊本市京町本丁の熊本大学附属中学校構内に所在する（第22図）。遺跡の立地する京町台地は、熊本平野の北部にあり、市の中心部に向かって北から突出した30〜40mの台地である。東西両側はそれぞれ坪井川、井芹川が流れ急峻な崖地を形成し、天然の要害をなす。台地の南端は地の利を生かし、熊本城が築かれている。

遺跡のある京町台地は、熊本の北からの入口として熊本城時代の諸施設があったところである。熊本大学附属中学校構内は弥生土器の出土が古くから知られていた。周知の遺跡としては、学校の西側に伝赤尾城と称する地点があるが実体は詳らかでない。

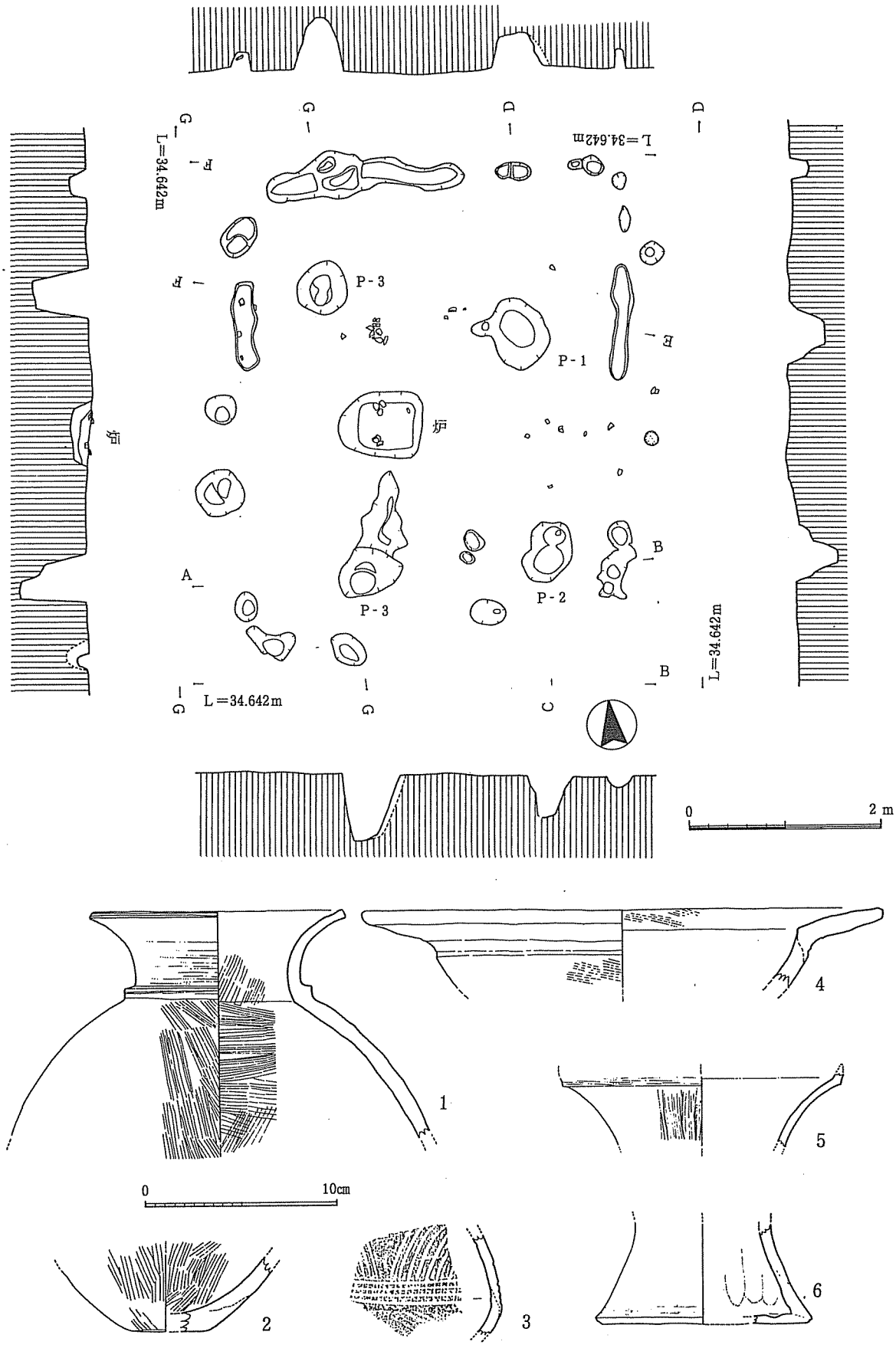
（2）遺跡の環境

この一帯は、今日全く都市化しているが、かつては雑木に覆われた台地であり、台地の鞍部にある学校の北には湧水地点があったといわれる。

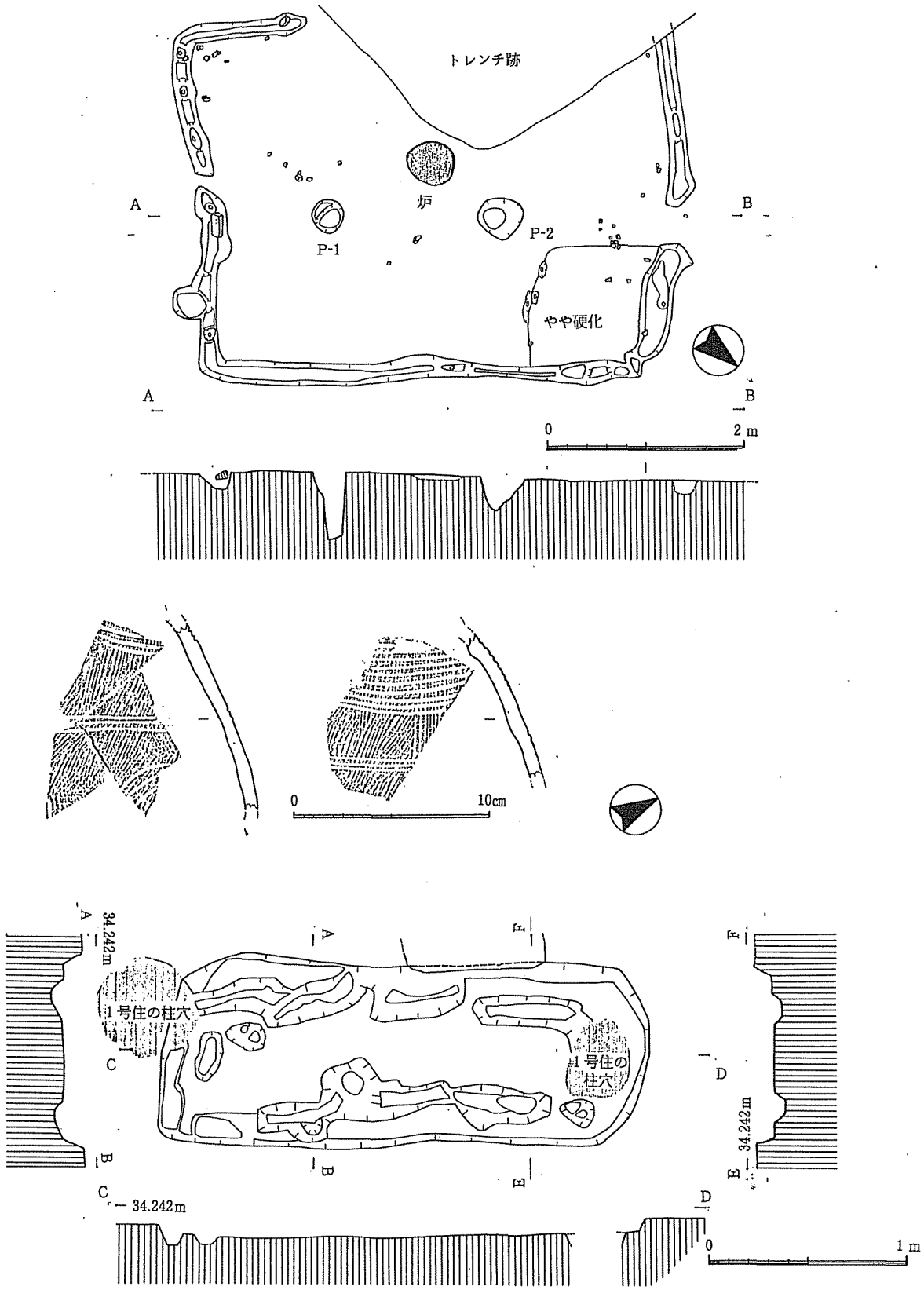
南北の京町台地上には、点々と弥生時代の集落跡があり、全体として熊本平野の北側台地部の弥生後期の遺跡群を構成している。また先行する弥生中期の遺跡は、台地の両側裾部にある。東の立田山の山麓の低台地部の松崎遺跡群は墓地地帯である。



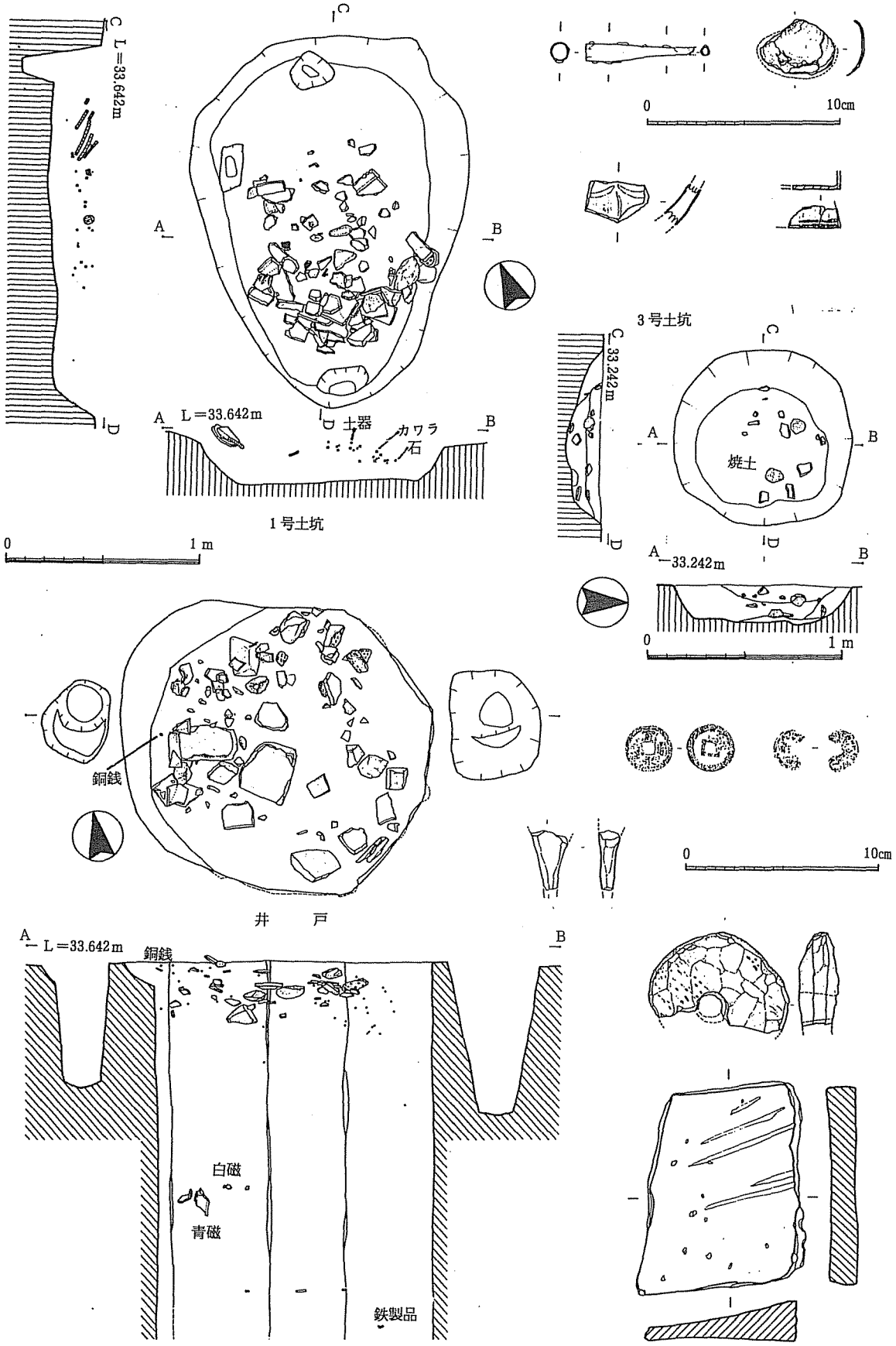
第22図　基本層位、調査地および遺構配置図



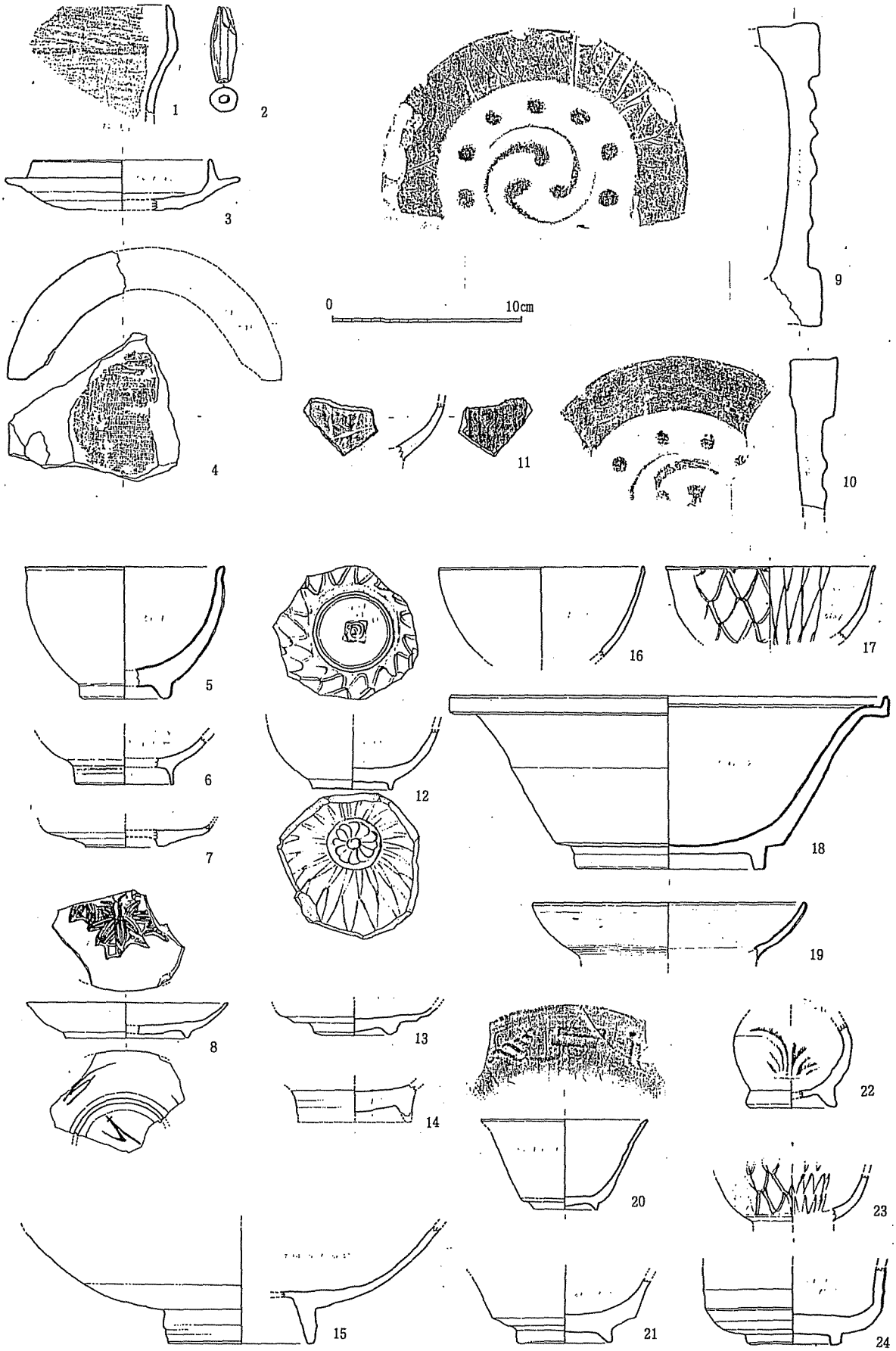
第23図　1号住居址および弥生土器実測図



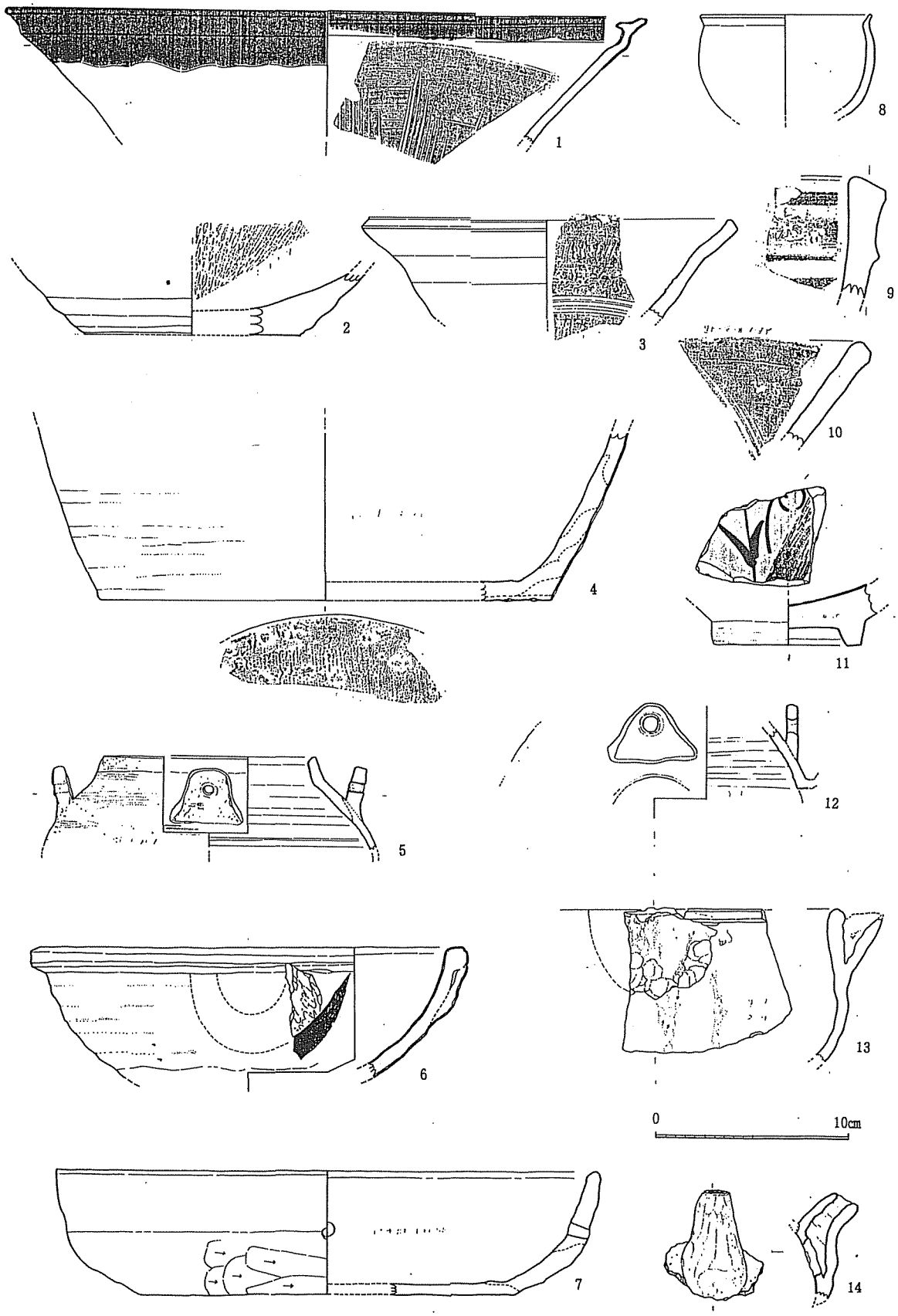
第24図　2号住居址および墓壙実測図



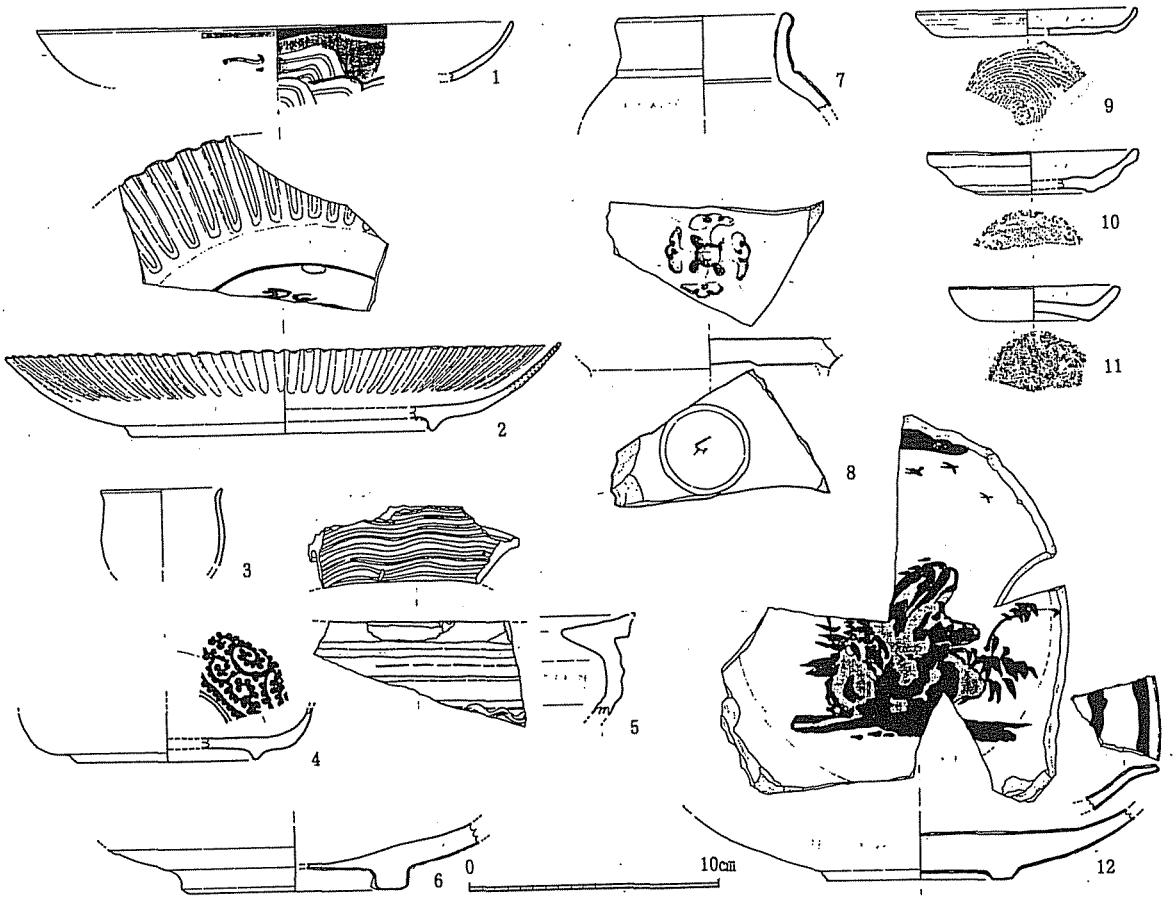
第25図　江戸時代の遺構と遺物



第26図　江戸時代の遺物（１）



第27図　江戸時代の遺物（２）



第28図　江戸時代の遺構図（３）

２．調査の概要

（１）目的と経過

熊本大学では、関係施設の大規模な設備の新設、改修が計画され、それに対応するための学内遺跡調査委員会の設置の検討が始まった。この新組織は平成６年度から正式に発足したが、すでに事業の完成年度の計画はなされており、熊本大学附属中学校コンピューター教育施設地の発掘調査については、大学の現有人員では対応ができない状況であった。大学との協議の結果、発掘調査は熊本大学においておこなうものの、調査作業は熊本県教育庁文化課が応援することとなった。

本調査に先立つ確認調査は熊本市教育委員会文化課において実施され、弥生時代の遺構の存在が予想されていた。これを受けて本調査は、コンピューター教育施設の敷地範囲約400㎡を対象に平成６年５月17日から同年６月25日に行った。

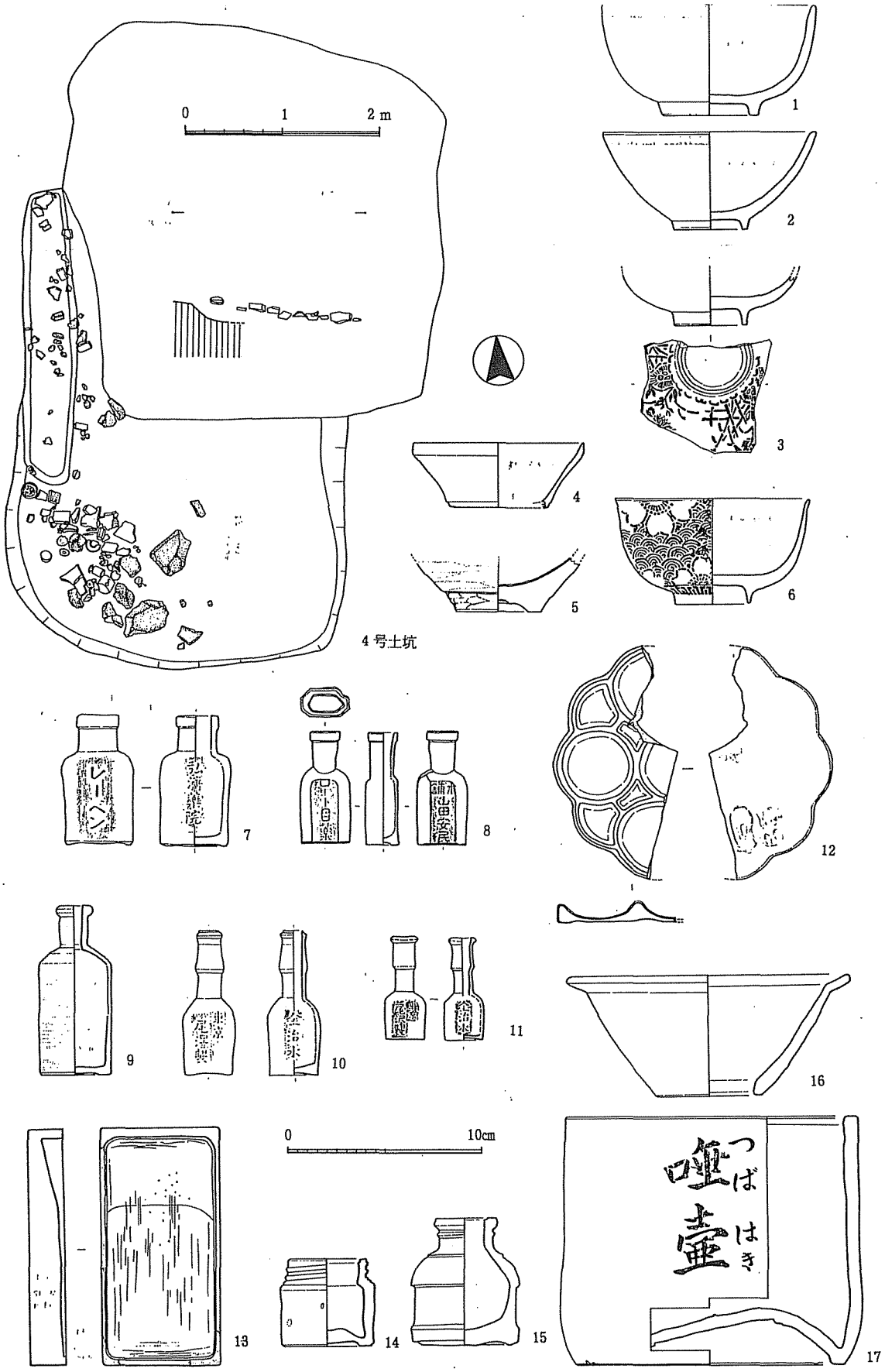
（２）遺跡の基本層位（第22図）

遺跡の基本層位は次のとおりである。

Ⅰ層は、表土であるが、現代の瓦礫混じりであり、ほとんどの地点で同層はⅢ層まで切り込みが達している。この層位には近現代の新旧の建物の基礎、塵穴が包含される。

Ⅱ層は、黒褐色土であるが、ほとんど自然層は失われ、藩政時代に大規模な整地と客土がなされている。同層もかなりの部分がⅠ層の撹乱を被るとともに、同層自体もⅢ層の上層を広範囲にわたり撹乱している。主として近世の遺物を包含する。

Ⅲ層は、暗褐色ないし黒褐色土である。弥生時代の遺物を包含するが、かなりの部分がⅠ、Ⅱ層からの撹乱を受けている。



第29図　近代の遺構と遺物

Ⅳ層は、褐色土でわずかな粘性がある。微細な軽石状の粒子を含み、ややクラックを有する。
Ⅴ層は、黄褐色土で強い粘性を有する。無遺物層である。
Ⅵ層は、淡赤色味のある黄褐色土で強い粘性を有する。無遺物層である。

3．検出遺構および出土遺物

熊本県教育委員会がおこなったが、表土を剥ぎ、遺構検出の結果、弥生時代後期の遺物と遺構のほか、江戸時代の遺物と遺構が出土した。さらに明治、大正時代以降の学校関係の遺物が古いゴミ穴から多く出土した。この他には、流入した遺物として、縄文時代および古墳時代の土器片、歴史時代の布目瓦が出土しており、古くから連綿としてこの台地上に人間の営みが継続していたことが明らかになった。出土した各時代の遺構と遺物は次のとおりである。

（1）縄文時代の遺物

26－1は、深鉢の口縁部である。口縁端部の外面には、横方向に貝殻らしい施文具で粗く擦痕を残す。縄文時代晩期の遺物であるが、遺構は検出されない。

（2）弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居址を2基、墓壙を1基検出した。

竪穴住居址は、弥生時代後期のものである。いずれも床面まで削平を受け、遺構の残りが悪く、壁溝により辛うじて規模を窺い知ることができる。

1号住居址（第23図）

調査区の南西に所在し、平面形態は、壁溝の配列から想定して長方形をなすとみられる。長軸方向は520㎝、短軸方向は410㎝を測り、主軸の方位はN－6°－Eである。主柱穴は4本であり、柱の囲む床面には若干の硬化が観察された。炉は、住居跡の中心部より西寄りにあり隅丸の長方形をなし、その規模は、長軸方向は88㎝、同じく短軸は71㎝、深さは21㎝を測り、主軸の方位はN－43°－Wである。遺物は、柱穴より出土した壷形土器の口縁から肩部にかけての資料（第23図－1）である。胴部は長球状をなし頚部にて強く外湾して開き口縁を形成する。頚部に断面が三角形の突帯を有する。

2号住居址（第24図）

調査区のやや東寄りに所在し、一部を後世の撹乱により切られる。ほぼ連続する壁溝の残存状況からみて平面形態は長方形であり、長軸方向は508㎝、短軸方向は378㎝を測る。主軸の方位はN－36°－Wであり、主柱穴は2本である。北隅には床面の硬化の差が観察され、削平により失われたベッド状遺構が設けられていたとみられる。住居跡の中心部より南西よりの床面に、円形の炭化物の集中部分があり、炉の痕跡であろう。その規模は、長軸方向は48㎝、同じく短軸は6㎝を測る。出土遺物は、重弧文と平行の沈線を施す壷形土器の肩部破片（第24図－1、2）である。当該住居址の出土ではないが、同時期の遺物と思われる重弧文を有する長頚壷形土器の胴部破片（第23図－3）、ジョッキ型土器の底部破片（同－6）も調査区より出土している。

墓壙（第23図）

１号住居址と切り合う。住居跡の硬化面上に乾燥しない長方形の部分を検出した。発掘すると、床面は平坦であり、その縁辺に重なりがちに並行する長方形の深い溝列が現れた。板石の抜き取りか、短幅の板材の抜き取りあるいは腐朽により生じた棺材の配列痕と判断した。遺物の出土はなかったが、検出状況よりみて住居跡より古い時期の遺構である。規模は長軸方向は246㎝、短軸方向は99㎝を測る。主軸の方位はＮ－31°－Ｅであり、床面までの比高差は９㎝、溝の最深部までは同じく15㎝である。

（３）古墳時代の遺物

第26図－３は、須恵器の杯身である。口縁端部の立ち上がりはやや高く先端は尖る。江戸時代の土坑より流入遺物として出土した。

（４）歴史時代（古代）の遺物

第26図－４は、瓦である。外面は縦方向に磨かれ、内面は布目の圧痕が残る。江戸時代の井戸より流入遺物として出土した。京町台地南端のこの一帯には布目瓦の出土事例が報告されており、かつて存在したとされる古代寺院「大道寺」に関する遺物とみられる。

（５）江戸時代の遺構と遺物

土坑と井戸の遺構を検出し、いずれも多数の遺物が出土した。遺物説明は別表に掲げる通りである。附属中学校敷地は、東隣の同小学校敷地とともに旧肥後藩の家老職を勤めた澤村家の屋敷跡である。

１号土坑（第25図）

平面形態は楕円形であり、長軸方向は195㎝、短軸方向は144㎝を測る。主軸の方位はＮ－14°－Ｅである。深さは６㎝を測る。出土遺物は多く土器溜め状を呈する。瓦の破片を主体にし、これに陶磁器の小破片を含む。

３号土坑（第25図）

平面形態は円形であり、直径は92㎝を測る。主軸の方位はＮ－２°－Ｅである。深さは６㎝を測る。埋土は硬くしまっており若干の遺物を交える。

井戸（第25図）

調査区の中央に所在し、平面形態は円形であり、長軸方向は147㎝、短軸方向は145㎝を測る。深さは６㎝を測る。井戸穴に随伴して井戸を覆う建屋のものとおぼしき一対の柱穴を検出した。この柱穴を結ぶ線を主軸としての方位はＮ－82°－Ｅである。井戸壁面には垂直方向に柾目板の圧痕が観察され、７～８枚の板で井桁を構成したとみられる。多くの遺物が浅いレベルに偏在し、これに交えて２枚の銅銭が出土したことは注目される。１枚は寛永通宝と判読できる。思うに廃絶の際、井戸梅の祭祀に供されたものである。浅いレベルに遺物が集中するのは埋没後に地盤の沈下で生じた窪みが掃き溜めと化したためであろう。

（６）近代の遺構と遺物

調査区内には新旧とりまぜて数カ所の長方形の塵捨穴があり、この中には附属中学校の前身である旧熊本師範学校当時の古い学用品、瓶類などが出土した（出土状況は第29図）。明治から昭和初期の遺物である。この中でも最も多いのは石板であった。出土遺物の説明は別表に掲げる通りである。

４．まとめ

近世以降、様々な造成工事によって大きく改変されていたと考えられていた校庭に弥生時代の遺構が残存していたことは予想外のことであった。

検出した竪穴住居址は２基であったが恐らく周辺にも住居跡は広がっており、弥生集落がこの一帯に存在していたことは疑いない。土器の特徴からみて弥生時代後期の所産であろう。縄文、古墳時代の包含層は今回発掘した部分では既に削平されていたが、多くの事例からみて周辺にこれらの時期の遺跡が存在する可能性が高い。

思いがけず多かったのは、江戸時代の遺物である。江戸時代には、この地は熊本城へ通じる街道の要衝であり、古地図によると、附属中学校敷地の北辺には大地を横断する広い堀切が描かれ、その北には街道を挟み、往生院をはじめ妙教寺、光永寺などの現在も残る３寺院が配置される。一方、堀切の南は肥後藩の家老澤村家の広大な屋敷を置き、有事に備えた陣型をなす。屋敷は附属小中学校敷地の全域を占め、小学校敷地は下屋敷跡、中学校敷地は上屋敷跡である。このたびの調査地点は上屋敷の南西部にあたる。遺物は日用雑器に交えて優品が相当含まれ当時の上級階級の生活が偲ばれる。

第１表　出土遺物観察表

図番号-遺物番号	器　種	部　位	出土地点	備　　考
25－１	煙管	吸口	１号土坑58	銅製
－２	貝殻		１号土坑	蛤　風化により白色を呈する
－３	碗		井戸５	青磁
－４	鉢	底部	井戸下層	磁器　緑色釉
－５	銅銭		井戸上層	寛永通宝
－６	銅銭		井戸上層	錆と破損により銘不明
－７	土製品	柄部分	井戸下層	土製ミニチュア杓子　土師質
－８	石製品		井戸下層	有孔円盤　凝灰岩製
－９	砥石		井戸７	粘板岩製
26－１	深鉢	口縁	１号住所跡	縄文土器
－２	土錘	完形	調査区一括	土師質
－３	杯		１号土坑２	須恵器　杯身
－４	瓦		井戸一括	丸瓦　布目圧痕
－５	碗		井戸下層	青磁　畳付に砂粒付着
－６	碗	底部	井戸86	染付

図番号-遺物番号	器　種	部　位	出土地点	備　　考
26－7	碗	底部	井戸69	陶器　淡灰褐色釉　砂目
－8	皿	底部	井戸31	染付　内：笹の葉紋　外：松葉紋
－9	瓦	軒丸	1号土坑46	軒丸瓦　珠文左三つ巴紋
－10	瓦	軒丸	1号土坑32	軒丸瓦　珠文右三つ巴紋
－11	碗	胴部	1号土坑73	陶器　唐津系蛍手　黒褐色釉地に白色で外面は円紋、内面は線紋
－12	碗	体、底部	1号土坑49	染付　内外に網状紋
－13	碗	底部	井戸75	磁器　灰色釉　砂目
－14	碗	底部	1号土坑64	白磁
－15	碗	口縁欠	井戸45	陶器　茶褐色釉地に白色で内面に波状紋　高台内は無釉
－16	碗	底部欠	井戸40	磁器
－17	碗	底部欠	井戸37	染付　内外は網状紋
－18	鉢		井戸87	青磁　花器　内底に剣山による擦痕
－19	皿	底部欠	井戸47	磁器　灰色釉
－20	碗		井戸90	白磁　薄手　内面に浮彫紋
－21	碗	底部	1号土坑53	磁器　灰色釉
－22	瓶	口縁欠	1号土坑	染付　草花紋　内面は無釉
－23	碗	底部欠	1号土坑7	染付　内外面に網目紋
－24	鉢	底部欠	1号土坑5	体部外面のみ緑色釉
27－1	擂鉢	底部欠	1号土坑	陶器　口縁に鉄釉　擂目単位10本
－2	擂鉢	底部	1号土坑4	陶器　擂目は密
－3	擂鉢	底部欠	井戸76	陶器　乳白色の施釉
－4	鉢	口縁欠	井戸下層	陶器　外面に施釉　底部に板圧痕
－5	鉢	底部欠	1号土坑6	陶器　耳部あり
－6	片口鉢	底部	井戸中層	陶器　胴部に鉄絵
－7	火舎	底部	井戸88	瓦器　胴部中位に孔　炭化物付着
－8	鉢	底部欠	1号土坑40	磁器
－9	甕	口縁	井戸中層	瓦器　七花紋スタンプあり
－10	擂鉢	口縁	井戸下層	瓦器
－11	鉢	底部	井戸下層	陶器　内面に灰色釉地に鉄絵の草花紋
－12	注口鉢	耳部	井戸28	陶器　外面に褐色釉
－13	片口鉢	底部欠	井戸下層	陶器　内外面には梨地状の黒褐色釉
－14	注口鉢	注口部	1号土坑	陶器　黒褐色釉
28－1	皿	底部欠	井戸71	染付　外面に波状紋
－2	皿		井戸下層	染付　口縁端は花弁状
－3	壷	底部欠	1号土坑60	白磁
－4	皿		1号土坑13	染付　蛸唐草紋

図番号-遺物番号	器　種	部　位	出土地点	備　　考
28－5	鉢		井戸	陶器　褐色釉地に白色釉で波状紋
－6	皿		1号土坑72	青磁　外面のみに厚い施釉
－7	壷		1号土坑	陶器　外面に緑色釉
－8	皿	底部	調査区一括	染付　見込部に「ウ」の銘
－9	杯		井戸	土師質土器　糸切底
－10	杯		井戸	土師質土器　糸切底
－11	杯		井戸	土師質土器　糸切底
－12	皿		井戸	染付　内面に山水図
29－1	碗	完形	4号土坑23	磁器　口縁端部外面に緑色の条線
－2	碗	完形	4号土坑22	磁器　口縁端部外面に緑色の条線
－3	碗	底部	4号土坑41	染付　高田焼
－4	碗		4号土坑39	磁器　オリーブ色の釉
－5	碗	底部	調査区一括	陶器　外：海老茶色釉　内：黒褐色
－6	碗	完形	4号土坑	染付　桜花と波状紋
－7	瓶	完形	4号土坑	薬瓶　ガラス　褐色　「レーベン」 「弘濟薬院」
－8	瓶	完形	4号土坑	薬瓶　ガラス　青色　「ロート目薬」 「本舗山田安民」
－9	瓶	完形	4号土坑	薬瓶　ガラス　濃紺色
－10	瓶	完形	4号土坑	薬瓶　ガラス　「全治水・東京小沢製」
－11	瓶	完形	4号土坑	薬瓶　ガラス　「全治水・東京小沢製」
－12	皿		4号土坑	陶器　絵皿　裏面に墨書
－13	硯	完形	4号土坑	硯
－14	瓶	完形	4号土坑	糊瓶　ガラス　淡緑色
－15	瓶	完形	4号土坑	インク瓶　淡緑色
－16	漏斗		4号土坑	磁器　痰壷とセット
－17	壷	完形	4号土坑	磁器　痰壷「唾壷・つばはき」

2．熊本大学附属中学立会調査結果

熊本大学教育学部附属中学校校舎新営工事における電気配線工事に伴い、平成6年8月12日に立会調査を行った。本調査区においては校舎新営工事に先立ち、熊本大学の委託によって熊本県文化課による調査が、平成6年5月17日から6月27日の日程で行われている。前回調査の結果を踏まえ、遺物包含層および遺構の確認を目的として調査を行った。

工事は体育館とボイラー室の間3ｍに、幅30㎝で深さ40㎝の掘削を行う。部分的に深さ90㎝まで掘り下げたが、スレートやガラス片が出土し、後世の撹乱を受けていることが判明した。したがって遺物包含層および遺物に対する影響はないものと判断し、工事の着工を許可した。

さらに現在は駐車場として利用されている場所に、幅35㎝で小学校体育館から校舎までの間東西35ｍにわたって40㎝の掘削を行う。地表下10〜20㎝は表土層であり、砂利の混入する砂層である。その下層は粘質の強い赤土であり、遺物包含層は確認できなかった。したがって工事による埋蔵文化財への影響はないものと判断し、工事の着工を許可した。

5．城東地区

城東地区熊本大学教育学部附属幼稚園においては、屋外排水管布設工事に伴い、平成7年2月25，27日の日程で立会調査を行った。工事範囲は幅60㎝をもって総長55ｍに及ぶ。また6カ所に汚水桝を設置するため掘削はやや深くなる。全体をとおして工事は深さ0.7〜1.2ｍの範囲内で行われる。

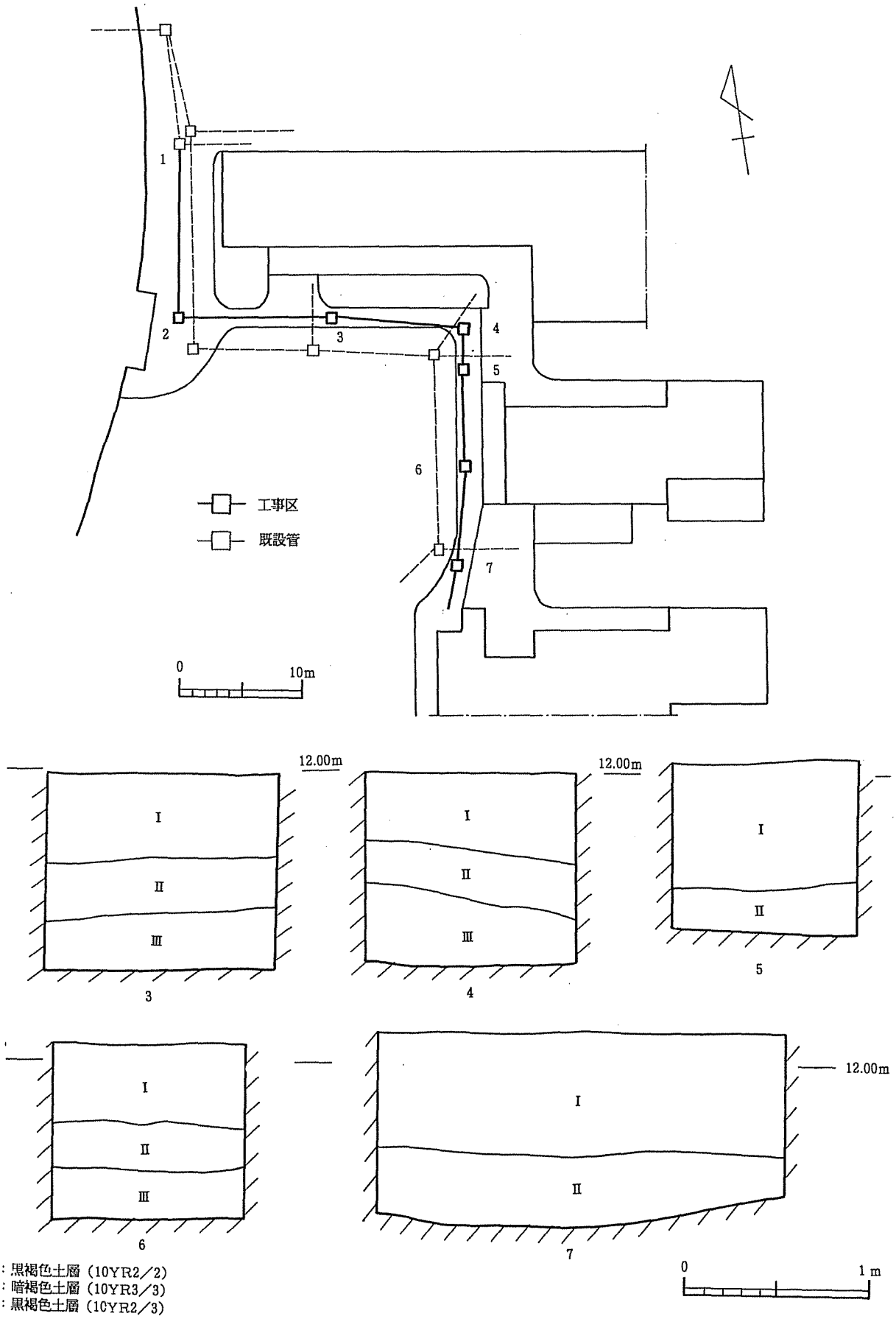
城東地区の西方には熊本城を臨むことができ、当調査区においても熊本城関連の遺物および遺構が確認されるのではという予想をもって調査を行った。調査の目的は遺物包含層および遺構の確認と工事による埋蔵文化財への影響の確認である。調査は調査員立ち会いのもとに、重機によって必要な掘削を行い、その後断面観察を行うという方向で実施した。以下に確認できた層序所見を述べる（第30図）。

Ⅰ層：黒褐色土層（10ＹＲ2／2）撹乱層である。川石・産業廃棄物などを含む。

Ⅱ層：暗褐色土層（10ＹＲ3／3）火山灰層である。緻密だがしまりはない。川砂を含む。

Ⅲ層：黒褐色土層（10ＹＲ2／3）緻密でややしまっている。混入物はほとんど無く、わずかに砂が混じる。

Ⅱ層以下が自然堆積層である。1，2の工事区間は排水管が既設されているため、工事範囲内の自然堆積土層はすでに撹乱を受けていた。遺物包含層および遺構の確認はできなかった。したがって記録保存し、工事の着工を許可した。



第30図　附属幼稚園調査区及びセクション図

6．渡鹿グランド調査

1．調査の目的と経過

今回調査は熊本大学渡鹿団地野球場等整備工事に伴うものである。Ⅰ次・Ⅱ次に渡る調査であり、Ⅰ次調査は集水桝設置のため、Ⅱ次調査は透水管埋設のためである。

本調査区は1977年に、現在の運動場造成に伴い発掘調査がなされている。調査主体は熊本大学を中心としたものであり、現運動場の南東部分を中心に調査を行ない、13軒の住居址を確認している。奈良朝から平安中期にわたる住居址であり、大小それぞれ相違があり、北側またはそれに近い箇所の外壁中央に炉跡をもつことが住居の特徴であるという結果を得ている。また同調査区域内において、縄文晩期初頭のものを主体とする土器片が多数出土している。以上の調査結果を踏まえ、以下の日程の通り調査を実施した。

Ⅰ次調査日程（第31図）

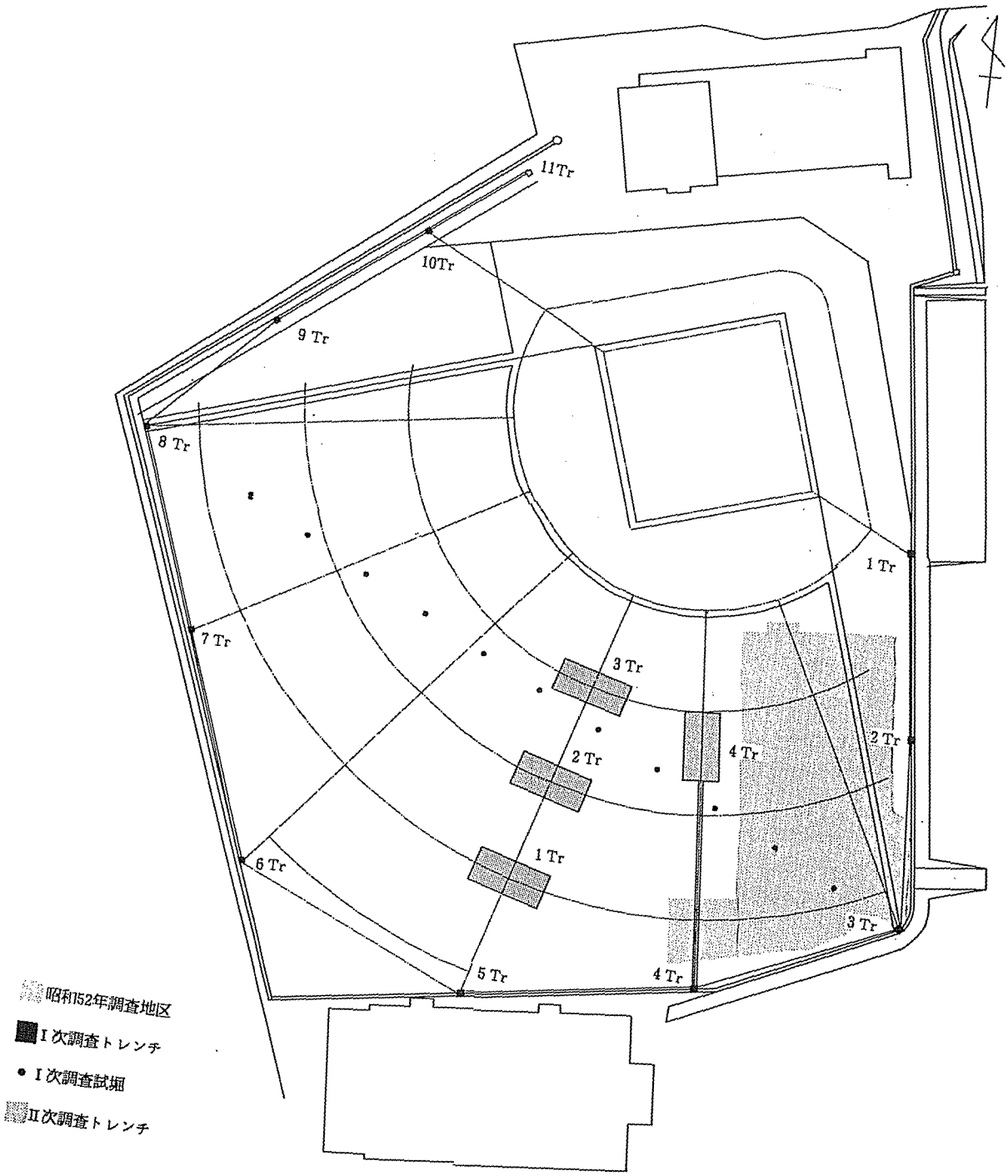
Ⅰ次調査は平成6年8月1日より実質8日間に渡る調査である。集水桝設置箇所に、必要な掘削範囲をもって11箇所のトレンチを設け、掘削の及ぶ深度までの調査を行った。遺物包含層および遺構の保存状態の確認を目的としたものである。

8月1日　調査開始。1～11トレンチを設定。
　　重機による掘り下げを開始。1トレンチにおいて遺物の集中がみられる。
8月2日　手作業による掘り下げ。11トレンチにおいて土師器壷の一部が出土。
8月3日　掘り下げ続行。
8月4日　全トレンチ完掘。
8月5日　電気配線工事立会調査。
8月8日　包含層の傾斜確認のため、グランド内東南隅より北西隅に向かって、10m間隔で試掘を開始。
8月9日　写真撮影、実測作業。
8月10日　全調査終了。

Ⅱ次調査日程（第31図）

Ⅱ次調査の結果より、かなり上位において遺物包含層が確認され、配管工事による影響を受けると考えられる運動場内東南部を調査するに至った。透水管が交差する地点を中心に、透水管の走る方向に沿って、5×10mのトレンチを3箇所に設定し、発掘調査を行う。また1～3トレンチの調査から、より東側および南側の地区においての工事による遺跡破壊の可能性が浮かび上がり、該当地区に第4トレンチおよび任意トレンチを設定し、調査するに至った。

11月10日　重機にて表土より50cmを掘り下げる。遺物包含層に到達。
11月14日　作業員投入。手作業にて掘り下げ開始。2トレンチにおいて遺物が多量に出土。
11月18日　自動車部練習場試掘。
11月21日　2トレンチにおいて古代の道路跡を検出。



第31図　渡鹿グランド調査配置図

11月24日　1トレンチにおいて住居址床面を検出。プランを確認する。3グリッドにおいて住居址を確認。検出進行。

11月25日　2トレンチの道路遺構を断面確認のため断ち割る。

11月30日　1トレンチ住居址完掘。

12月2日　2・3トレンチ完掘。

12月7日　1・2トレンチ図面終了。調査の結果より、工事によって影響を受けると考えられる位置に第4グリッドを設定。掘り下げ開始。

12月8日　3トレンチの住居址においてカマドを検出。

12月9日　3トレンチ図面終了。4トレンチにおいて住居址3軒を確認。検出進行。

12月14日　4トレンチの住居が2軒ずつの重複で、計4軒であることを確認。4トレンチより南へ向かって、透水管埋設部分に確認のためトレンチを掘る。

12月16日　住居址完掘。カマドを断ち割る。

12月19日　カマド完掘。トレンチ調査終了。

12月22日　カマド実測の終了をもって、全調査終了。

2．層序（第32・33図）

渡鹿グランドにおける調査で確認された層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層：黄褐色土層（2.5Y5／3）

運動場造成時の客土である。整地によって非常に堅くしまっている。石・砂・炭・焼土粒などの混入物を多く含む。

Ⅱ層：オリーブ褐色土層（2.5Y4／3）

整地前の表土層である。土質はⅠ層と同様である。混入物は少ない。遺物をわずかに含む。

Ⅲ層：黒褐色土層（2.5Y3／2）

遺物包含層である。しまりはなく、柔らかい。橙色の焼土粒を含む。

Ⅳ層：暗褐色土層（10YR3／3）

無遺物層である。緻密であり、住居址が掘り込まれる。混入物はほとんどない。

Ⅴ層：黒褐色土層（10YR3／1）

Ⅳ層と同様の土に黒ニガと呼ばれる黒色の土が混じる。上面における凹凸が激しい。混入物はない。

Ⅵ層：黄褐色土層（10YR5／6）

ローム層である。粘性があり、緻密である。

3．Ⅰ次調査トレンチ所見

今調査は集水桝設置場所に、必要な広さおよび深さのトレンチを11箇所に設け、遺物包含層および遺構の保存状況確認を目的として行った。トレンチは東側側溝沿いより運動場を一周して同場北端まで、右回りで1～11トレンチとする（第31図）。

第1トレンチ　1.8×1.7mのトレンチである。東側は運動場造成時に撹乱を受けている。また西側は配管による撹乱を受けている。残存部において地表下10cmにて遺物包含層を確認。須

恵器・土師器片が多数出土。遺構は確認できない。

第２トレンチ　2.2×1.7ｍのトレンチである。地表下20㎝において遺物包含層を確認。運動場内に広がる遺物包含層の東端である。したがってトレンチ東壁には包含層は確認できない。遺構は存在しない。

第３トレンチ　1.4×2.0ｍのトレンチである。遺物包含層は確認できない。グランド造成時に既に削平されたものと考えられる。地表下75㎝においてローム層を確認。これより上層は客土である。

第４トレンチ　1.5×2.3ｍのトレンチである。南側は撹乱を受ける。地表下30㎝において遺物包含層を確認。しかし包含層の上部は、造成時に大部分削平されている。遺構は存在しない。

第５トレンチ　1.4×2.4ｍのトレンチである。遺物包含層は確認できない。大部分が造成時に削平されたと考えられる。包含層下の自然堆積土層を確認。

第６トレンチ　2.4×1.4ｍのトレンチである。地表下30〜80㎝にて遺物包含層を確認。部分的に撹乱を受けている。遺構は確認できない。

第７トレンチ　2.5×1.5ｍのトレンチである。地表下110㎝にて遺物包含層を確認。遺構は確認できない。

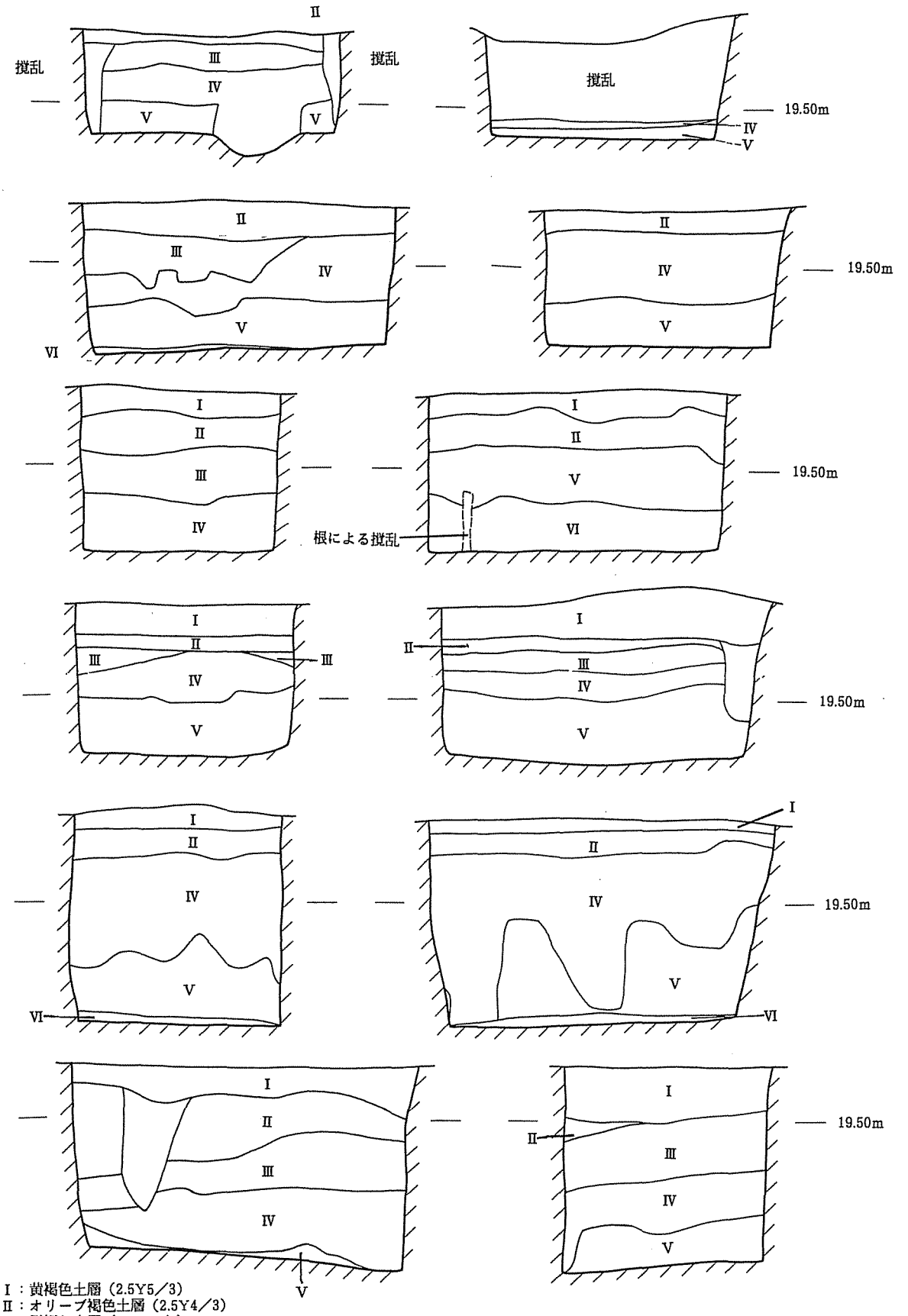
第８トレンチ　2.5×1.3ｍのトレンチである。深さ1.5ｍまで調査を行ったが、包含層は確認できない。1.5ｍ以下に堆積するものと考えられる。

第９トレンチ　1.9×2.5ｍのトレンチである。深さ1.5ｍまで調査を行ったが、包含層は確認できない。第８トレンチ同様、1.5ｍ以下に堆積すると考えられる。

第10トレンチ　1.9×2.7ｍのトレンチである。地表下155㎝において遺物包含層を確認。現段階では遺構は確認できず、工事による遺構への影響はない。

第11トレンチ　2.7×1.4ｍのトレンチである。西側はフェンス設営時に撹乱を受けている。地表下110㎝において遺物包含層を確認。遺構は存在しない。

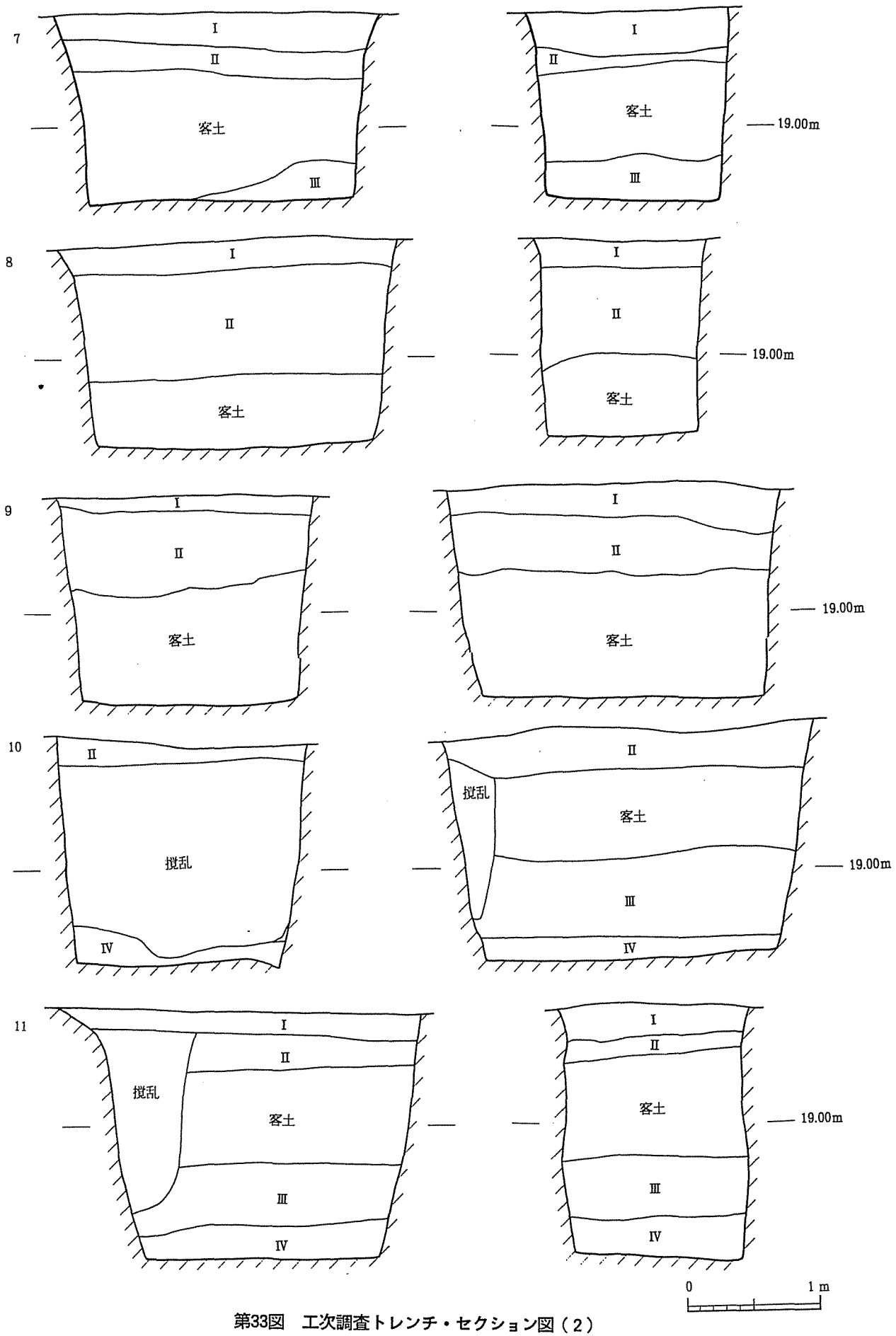
以上が各トレンチにおける所見である。また第３トレンチと第８トレンチを結ぶ直線上に、10ｍ間隔で0.5×0.5ｍの試掘を11箇所行った。方向は南東から北西である。南東側では地表下18㎝において包含層を確認でき、北西に進むにしたがって次第に深くなり、最も北西では地表下82㎝で確認できる。トレンチ調査の結果と総合した場合、遺物包含層は南東から北西に向かって傾斜して堆積していると考えられる。これは旧地形の起伏によるものと考えている。



Ⅰ：黄褐色土層（2.5Y5／3）
Ⅱ：オリーブ褐色土層（2.5Y4／3）
Ⅲ：黒褐色土層（2.5Y3／2）
Ⅳ：暗褐色土層（10YR3／3）
Ⅴ：黒褐色土層（10YR3／1）
Ⅵ：黄褐色土層（10YR5／6）

0　1 m

第32図．Ⅰ次調査トレンチ・セクション図（1）



第33図　工次調査トレンチ・セクション図（2）

4．Ⅱ次調査結果

1977年の調査より、本調査区が奈良から平安時代の集落跡であることが確認されている。今回調査では住居址を７軒と道路跡を検出した（第34〜37図)。住居址はすべてⅣ層に掘り込まれている。また出土遺物により住居址はすべて同時期に属すものと考えている。住居内の覆土は黒褐色（2.5Y5／3）の土であり、Ⅲ層と同質のものである。住居内における分層はできない。住居外に比べ焼土粒や灰がより多く含まれることが、平面における住居址の確認の手掛かりとなる。住居址は、第１トレンチより確認された順に１〜７号とした。

竪穴式住居

１号住居址（第34図）（図版７）

第１トレンチ内南西隅において検出した。住居址の大部分は調査区外にあるため、住居址1／4程度の調査となった。東壁のみを完全に確認することができ、他のトレンチにおける調査結果を考え合わせた場合、プランは一辺４ｍの正方形を推定するこができる。主軸はN－34°－Wである。残存する壁高は20cmである。柱穴は確認できなかった。住居内東側に長軸50cm・短軸30cmの楕円形を呈する凹みがあるが、深さ13cmと浅いため、柱穴とは考え難い。住居内床面には被熱した粘土塊が広がっているため、カマドをもつものと考えられる。他の調査結果からカマドは北壁寄りに付設するであろう。

２号住居址（第36図）（図版８）

第３トレンチの北東隅より検出。一部分が調査区外となるため、全容は明らかではない。２号住居址は大部分が調査区外にあることや、３号住居内の覆土に掘り込まれていることなどより確認が遅れ、床面のみの確認となった。

３号住居址（第36図）（図版８）

第３トレンチの北東隅において、２号住居と重複して存在する。３号住居は東壁部分が調査区外となり、約2／3程度の検出となったが、完全に把握することができた西壁より推定した場合、そのプランは１辺４ｍの正方形を呈すると考えられる。主軸はN－32°－Wである。残存する壁高は26cmである。３号住居内では７基の柱穴を検出した。直径20〜30cmの円形ピットであり、深さは20〜30cmである。床面の硬化した部分を囲むように配列されているようである。住居北西隅の灰や焼土が集中する地点において、被熱した砂岩のようなブロックが床面直上に散在する。また同地点より直径45cm・深さ30cmの、内部に灰や焼土を充填する掘り込みを検出した。前者は破壊をうけたカマドの構築材の一部であり、後者はカマド内の掘り込みと想定している。

４号住居址（第37図）（図版９）

４号住居は第４トレンチの中央東寄りに存在する。トレンチ東壁部分にひっかかり、５号住居の上に重複して掘りこまれている。プランは西壁１辺2.8ｍを検出したが、全容は把握できない。主軸はN－16°－Wである。残存する壁高は12cmである。住居内に柱穴を４基検出した。規模は直径20〜50cm・深さ20〜95cmと不揃いである。全容は判然としないが、住居の軸に沿って、それぞれの壁際中央部と住居の中心部とに、十字に柱が配列されていたのではないかと想

定している。カマドは北壁の西隅を一部掘り込む形で構築されている（図版９）。整形された砂岩性のブロックを中央の支柱および両袖部に用い、壁体は粘土を貼り付けることによって形成されている。焚口幅80㎝・奥行50㎝の規模をもつ。上部構造は確認できない。

５号住居址（第37図）（図版９）

５号住居は第４トレンチのほぼ中央において、４号住居にその東側の一部を切り取られる形で存在する。平面プランは3.5×3.8ｍの隅丸方形を呈する。主軸はＮ－45°－Ｗである。残存する壁高は18㎝である。柱穴は住居内に５基、住居外に３基検出したが、位置的にすべてが住居に伴うものとは考え難い。規模は直径30～40㎝であり、深さは住居中央付近と南西隅のものが60～95㎝と深く、その他が15～40㎝と比較的浅い。カマドは住居北壁の中央を一部掘り込み、砂岩性ブロックと粘土を用いて構築されている（図版10）。破壊を受けているが、残存部よりの推定規模は焚口幅1.5ｍ・奥行1.0ｍと大きなものとなる。カマド内部に堆積した土より土師器坏片が出土している。

６号住居址（第37図）（図版９）

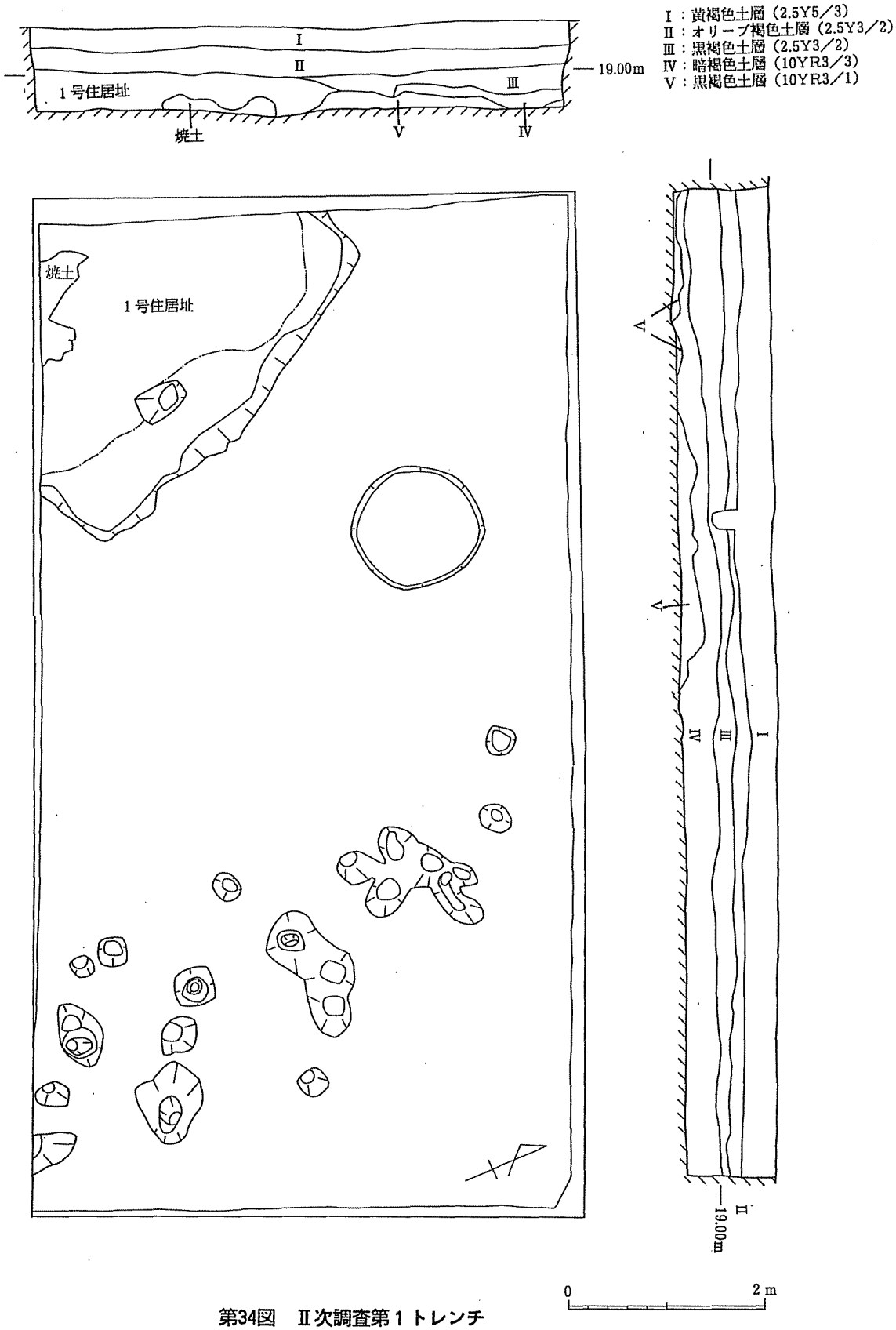
６号住居は第４トレンチの北東隅に位置する。東壁と南壁の一部が調査区外となる。平面プランは2.5×3.5ｍの方形プランである。主軸はＮ－22°－Ｗである。残存する壁高は15㎝である。柱穴は住居内に４基、住居外に１基を検出した。規模は直径25～40㎝であり、深さは15～65㎝と統一を欠く。カマドは住居址北壁中央に位置する（図版10）。両袖部及び支柱に柱状に加工した砂岩性ブロックを用い、燃焼部には高さを揃えた同質のブロックを敷きつめている。カマド壁体は粘土を用いて形成されている。煙道部は確認できなかった。焚口幅1.0ｍ・奥行1.0ｍの規模である。

７号住居址（第37図）（図版９）

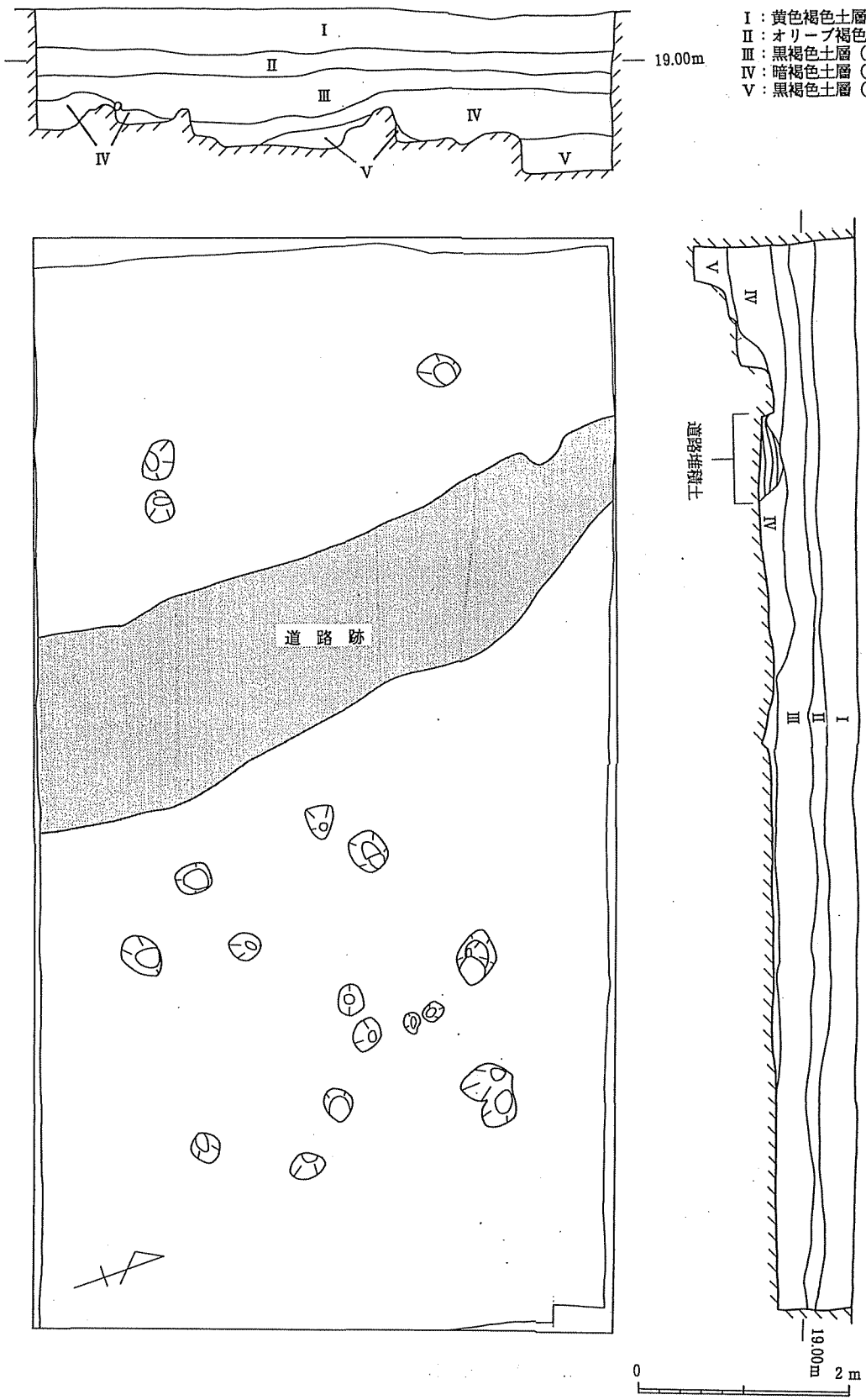
７号住居は第４トレンチの南東隅において、６号住居にその大部分を切られる形で存在している。また東半部分は調査区外に位置する。したがって検出範囲は1.5×0.7ｍというほんの一部のみの調査となり、規模などの大容は不明である。残存する壁高は８㎝である。

道路状遺構（第35図）（図版７・８）

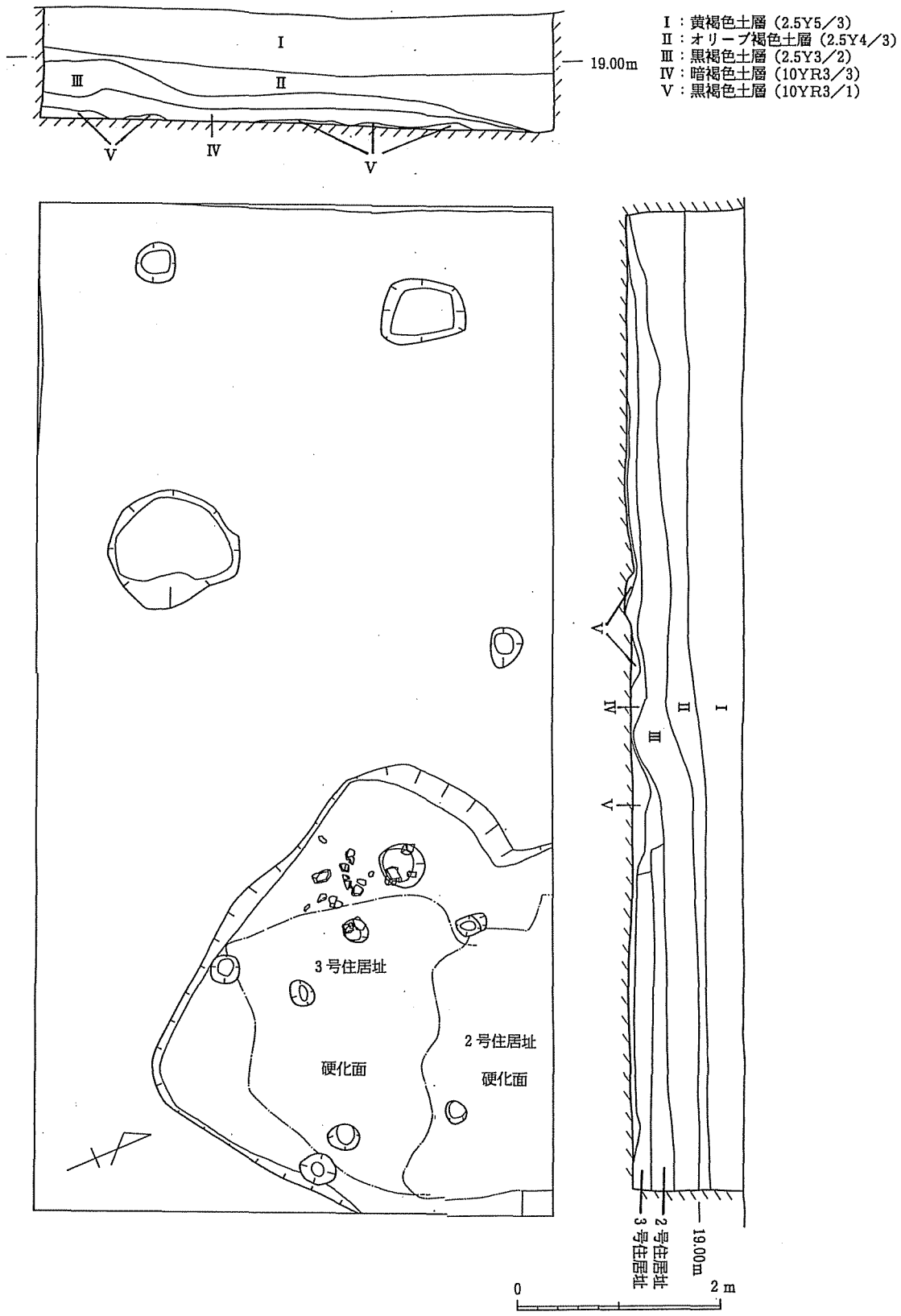
第２トレンチ中央やや西よりに、帯状に伸びる硬化した土層の堆積を検出した。ほぼ南北に沿ってやや西に湾曲しながら、幅1.0ｍから1.8ｍをもって、トレンチを横断する。Ⅴ層上面からⅢ層の下部に渡って、焼土粒・砂粒・細かい土器片を多量に含む土（にぶい黄褐色・10ＹＲ4／3)の堆積によって形成される。断面観察の結果、４枚の層序を確認した。すべて土質は同じだが、それぞれの層の上面が硬化していることより分層が可能である。人為的に整地が施された結果と考えている。以上よりこれを古代の道路跡と認定した。



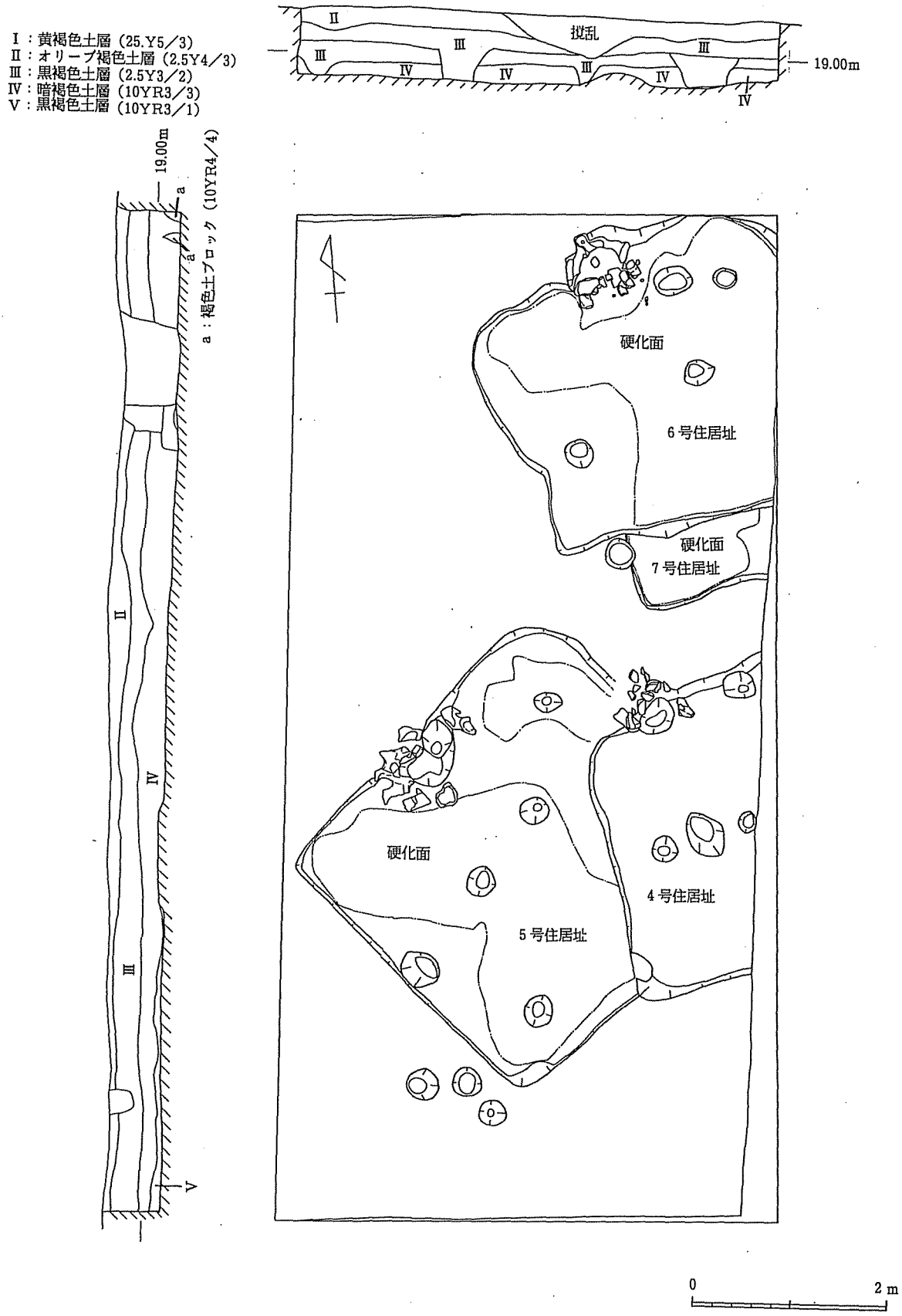
第34図　Ⅱ次調査第1トレンチ



第35図　Ⅱ次調査第２トレンチ



第36図　Ⅱ次調査第3トレンチ



第37図　Ⅱ次調査第4トレンチ

5．渡鹿グランド出土遺物（第38図）

出土遺物はパンケース20箱程である。紹介する遺物は遺構出土のものを中心に、時期比定の行いやすいものを抽出した。

5号住居址出土遺物

土師器　高坏（1）胎土が粗い。底部から体部にかけてはゆるやかに内湾し、体部から口縁部はほぼ真上に直線的に立ち上がる。脚部は破損している。ナデ調整が施されている。

土師器　高坏（2）1よりさらに直線的である。体部から真上に立ち上がった口縁は外反する。脚部は破損している。内外器面ともにナデ調整が施されている。

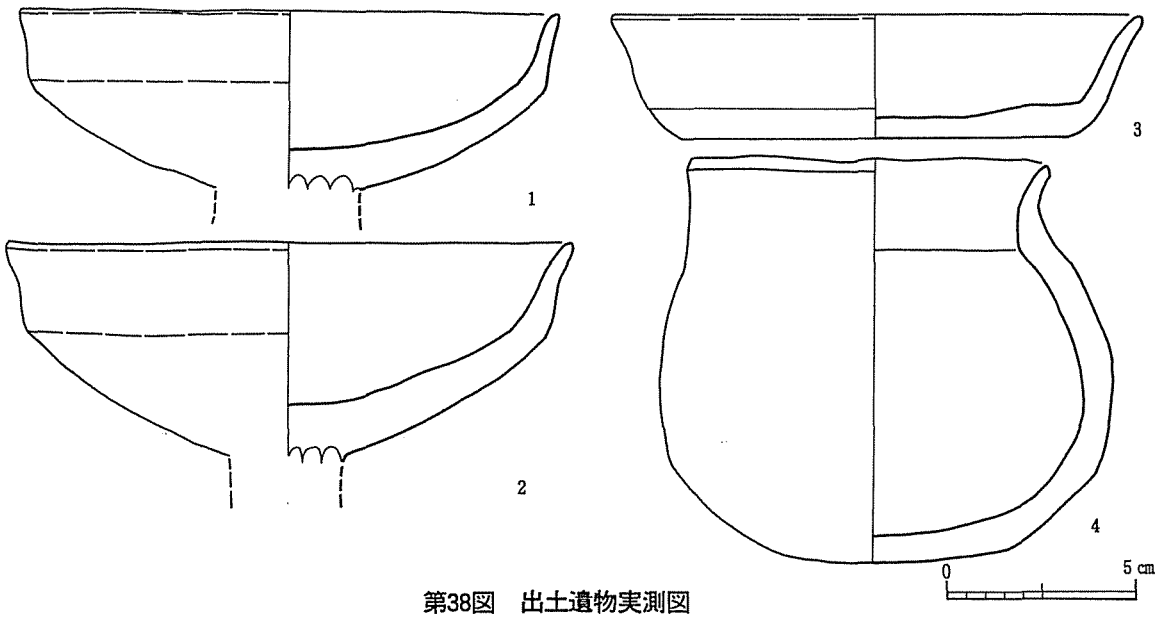
土師器　短頸広口壷（4）底部から体部はゆるやかに弧を描き、肩部が張らずに球状を呈する。丸底である。頸部は丸みを帯び、口縁部は外反する。外器面体部より下位はハケ目調整、頸部・口縁部および内器面はナデ調整が施されている。

次調査第2トレンチ出土遺物

土師器　坏（3）平坦な底部より丸みをもって体部へとつながり、口縁部は外反する。全体的に偏平である。体部下端には回転ヘラケズリがなされている。内外器面ともにナデ調整が施されている。

6．まとめ

今回の調査では遺構として住居址6軒および道路跡を検出することができた。昭和52年の調査と合わせると住居址は19軒を数える。いずれもグランド東南部よりの検出であり全容は明らかではないが、かなり大規模な集落が予想される。また遺跡の存続時期は出土遺物より、8世紀中葉から後半に位置づけることができる。したがって当遺跡は託麻郡家及び郡寺に関する拠点集落の一端を担うものと捉えている。さらに部分的ではあるが道路跡の検出は、当時の集落造営事業の復元に関して、有効な資料となり得るのではと考えられる。



第38図　出土遺物実測図

7．総　括

熊本大学構内における再開発事業に関連して、平成6年5月に当埋蔵文化財調査室が発足した。平成6年度の発掘調査は前出のとおりであり、黒髪・京町・城東・渡鹿の4地区における調査を行った。緊急を要する調査が非常に多かったことや遺跡の破壊状況を考えると、やはり早い段階における埋蔵文化財対策の必要性を再認識する。以下に6年度調査についての総括を述べる。

まず黒髪地区においては、奈良・平安時代の遺物包含層および集落跡を確認した。北地区の遺跡、南地区の遺跡のいずれも、出土遺物より8世紀末から9世紀前半に比定することができる[1]。住居址は2m四方程度の小規模なものが多く、改築を繰り返している。カマドは粘土のみによってつくられ、方向は不定である。住居のつくり自体がやや粗雑な印象を受ける。この一連の集落は、立田山から白川へ向かって傾斜する河岸段丘上に造営されたものである。本稿では紹介に至らなかったが、北地区における遺物包含層中からは椀や坏、鉄製の工具などの日常生活用品と言える遺物が大量に出土している。これら出土遺物には、地形の傾斜に従って北方より流入したものも多分に含まれていると考えられる。また住居址の密集が調査区北側に偏っていることより、集落の中心はより北方に存在するものと捉えている。集落の広がる範囲は明らかではないが、今回調査における資料は白川右岸地域におけるまとまった集落の存在を示唆するものである。さらに南地区からは土製の印が出土している。つくりが粗雑であること、逆字ではなく正字であることなどより、私印であると考えられる。ところが上記のように当遺跡における住居址は小規模であり、印を使用する人物像との間には落差が認められる。また同調査区からは溝状の遺構が検出されている。幅3m・深さ0.6〜0.8mをもって調査区を東西に横断する。全容は明らかではないが、かなり大規模な溝である。排水施設もしくは居住区画であると推定されるが、いずれにせよこのような大規模な施設を必要とする集落であれば、その規模もかなりのものであろう。これより調査区外における集落の展開が予想される。したがって土製印に関連する遺構の存在も期待できる。刻まれた文字が「國」という字であることは非常に興味深い。

渡鹿グランドでは、黒髪地区の遺跡にやや先行する時期、8世紀中葉から後半に相当する住居址群を検出した。住居址プランは約4m四方であり、主軸はすべて北よりやや西にずれた方位をとる。また第2トレンチより検出した道路跡も、同様にやや西に傾いて南北方向に延びる。非常に整然とした印象を受ける。住居北壁中央には砂岩性のブロックを支柱・支脚に用いてカマドを築く。ブロックを巧みに利用し、しっかりとした構造のカマドである。昭和52年の調査によって検出された住居址も同様の状況を示している[2]。以上より当集落の造営が綿密な計画の下に行われていたことを窺い知ることができる。また前回調査の結果を考慮に入れ、渡鹿地区においても広範にわたる住居址群の存在が予想される。大江遺跡群として一括される当調査区周辺一帯には、奈良・平安時代の集落址が数多く知られている[3][4]。当調査地区は大江遺跡群の北端を担い、今回調査による住居址も含め、一大集落が大江遺跡群内に存在することはほぼ明らかである。さらに調査区周辺が奈良・平安期には郡の中心をなしていたという指摘もある[5]。

以上、黒髪地区および渡鹿地区における調査結果の特徴について概括したが、これより両地区の住居址および集落に関していくつかの相違点を挙げることができる。1）住居址プラン

2）カマドの構築法　3）遺構の方向性　などである。集落の性格については判然としない面もあるが、恐らく白川を境界とする右岸地域と左岸地域との間に、何らかの差異が存在するものと考えられる。大学構内に止まらず、周辺地域における今後の調査により、両者の住居および集落の在り方についての解答が見出せるのではないだろうか。

京町地区の調査は、熊本大学による熊本県文化課への委託調査という形で行われた。井芹川・坪井川に挟まれる台地上に立地する当遺跡からは、今回調査により縄文時代から近代に及ぶまでの遺構・遺物が検出されている。本来当地区は弥生時代遺物の包蔵地として指定されており、調査では竪穴住居址2軒が検出された。時期は弥生時代後期に相当する。また江戸時代の遺物が豊富に出土している。これは同校敷地が、肥後藩家老澤村家の屋敷跡であることによる。

城東地区における調査は幅60㎝・長さ55㎝における部分的な立会調査のみである。6年度調査では、遺物包含層および遺構は確認できなかったが、熊本城との位置的な状況からみても、その関係は比定できない。今後の検討を待ちたい。

平成6年度調査より、熊本大学構内では、いずれの地区においても後世の撹乱による影響をかなり受けているにもかかわらず、奈良・平安時代を中心として様々な遺跡が包蔵されていることを確認することができた。また貴重な資料となり得る遺物および遺構を数多く検出するに至った。大量の遺物はほとんどが未整理のため、今回は十分な報告ができなかった。黒髪地区・渡鹿地区においてはさらに広範にわたる住居址群の存在があきらかであり、今後より精緻な調査が求められる。したがって今後緊急を要する埋蔵文化財調査においては、より充実した組織作りが望まれる。

註

（1）網田龍生「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会　1994年。

（2）松本雅明「熊本大学大江運動場遺跡調査報告」
『熊本市中央北地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1980年。

（3）網田龍生『大江遺跡群Ⅰ』熊本市教育委員会　1989年。

（4）網田龍生『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会　1993年。

（5）（1）に同じ。

図　　版

上．福利施設 2 号住居址　東より
下．福利施設 3 ～ 8 号住居址　西より

図版 2

上. 福利施設 1 号建物跡　南より
下. 福利施設 2 号建物跡　東より

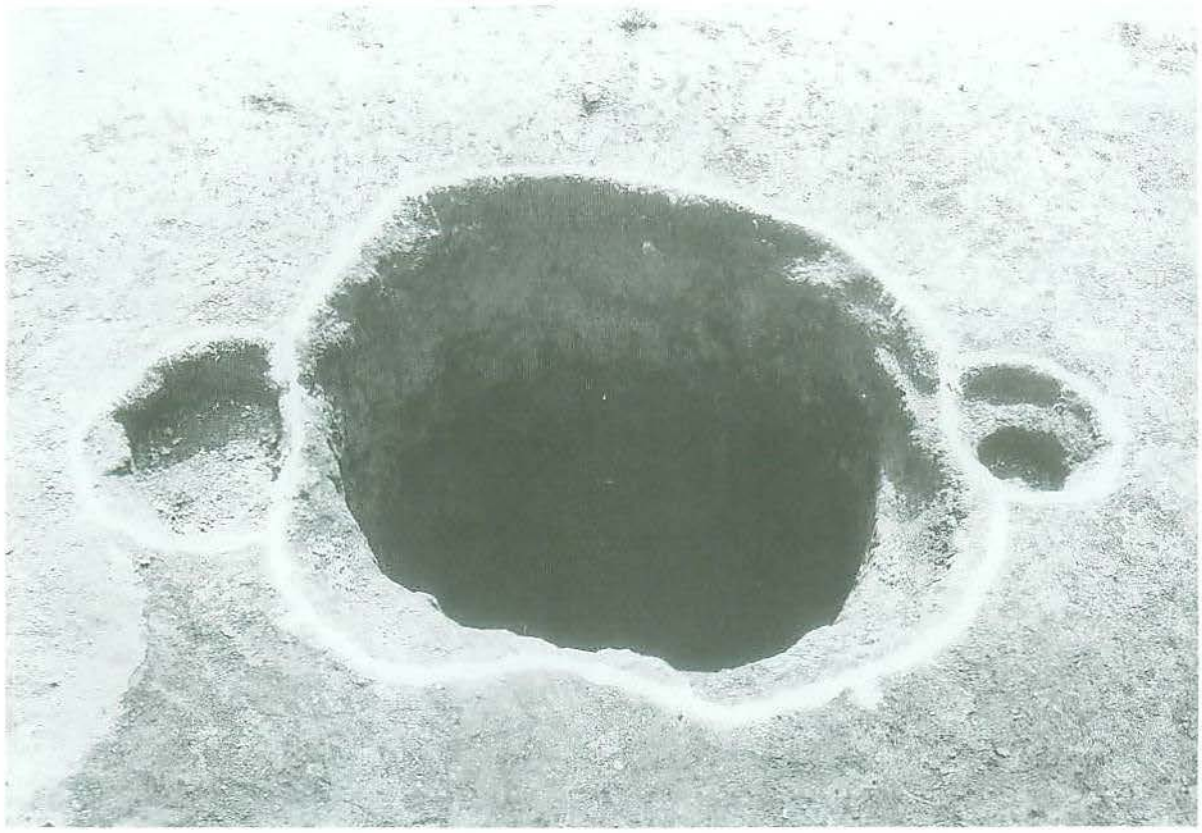
上. 工学部実験棟調査区全景　北より
下. 工学部実験棟溝状遺構　東より

図版 4

上．付属中学校　調査区全景　北より
下．付属中学校　1号住居址　西より

上．付属中学校　2号住居址　北東より
下．付属中学校　墓壙　西より

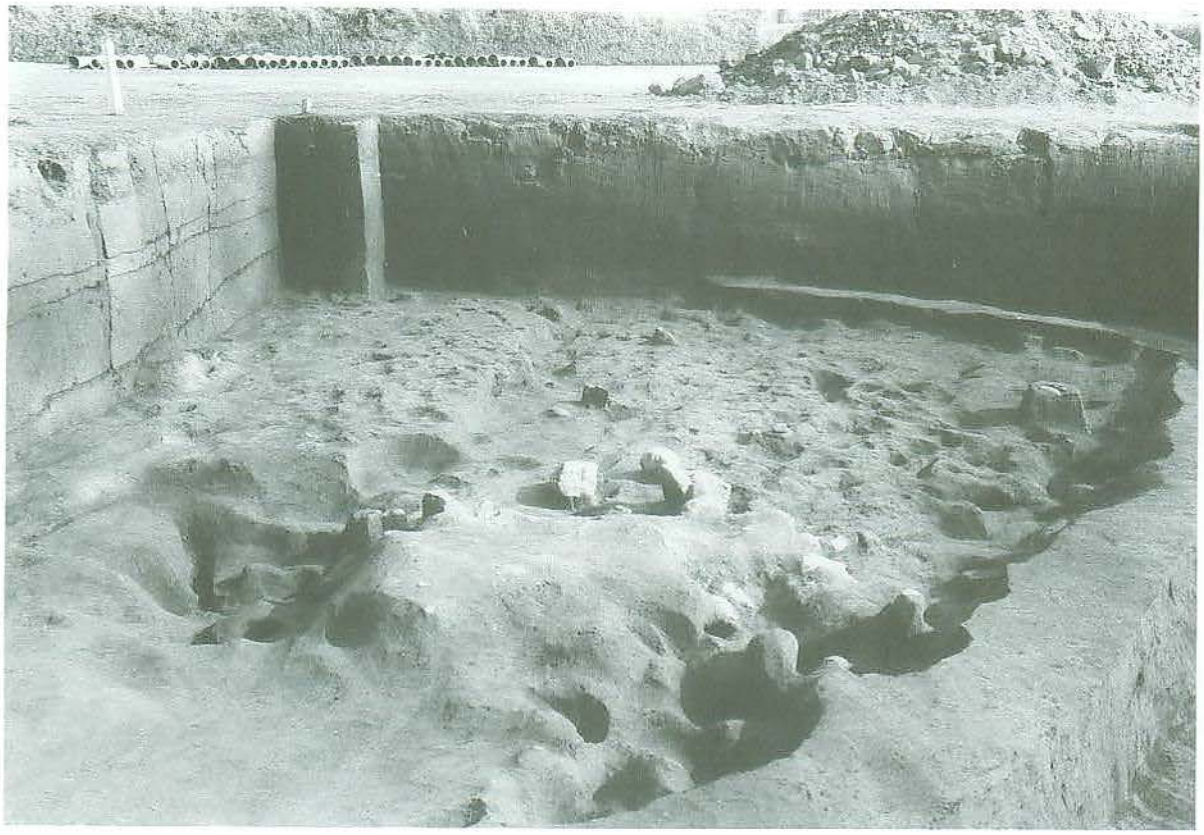
図版 6



上. 墓壙　南より
下. 井戸跡　東より

上．渡鹿グランド１号住居址　東より
下．渡鹿グランド道路跡　西より

図版 8



上．渡鹿グランド２・３号住居址　西より
下．渡鹿グランド第２トレンチ遺物出土状況　南より

上. 渡鹿グランド第４トレンチ　南より
下. 渡鹿グランド４号住居址カマド　南より

図版10

上．渡鹿グランド５号住居址カマド　南より
下．渡鹿グランド６号住居址カマド　南より

報 告 書 抄 録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぽう だい1しゅう
書　　名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報　第1集
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報
シリーズ号	1
編著者名	山田康弘・原田範昭・吉田昭一
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒860　熊本県熊本市黒髪2－39－1　　.096-344-2111
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くろかみ 黒髪遺跡	熊本県 熊本市 黒髪	43-201		32° 48′ 40″	130° 43′ 40″	19940415 ｜ 19950331	3482,0㎡	学校敷地内の 開発事業に伴う
おおえ 大江遺跡	熊本県 熊本市 大江	43-201		32° 48′ 16″	130° 43′ 51″	19940801 ｜ 19950331	290,0㎡	学校敷地内の 開発事業に伴う
きょうまちだい 京町台遺跡	熊本県 熊本市 京町本丁	43-201		32° 48′ 53″	130° 42′ 24″	19940517 ｜ 19950331	414,0㎡	学校敷地内の 開発事業に伴う
くまもとじょう 熊本城跡	熊本県 熊本市 城東	43-201		32° 48′ 11″	130° 42′ 46″	19950227 ｜ 19950331	33,0㎡	学校敷地内の 開発事業に伴う

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒髪遺跡	集落址	奈良・平安	竪穴住居址　16 掘建柱建物址　2 溝状遺構　1 集石遺構　1	土師器 須恵器	
大江遺跡	集落址	奈良・平安	竪穴住居址　7 道路状遺構　1	土師器 須恵器	
京町台遺跡	散布地	弥生時代 奈良・平安 江戸時代～	(弥生時代) 竪穴住居址　2 (江戸時代) 井戸　1 土壙　4	縄文晩期土器 弥生土器 布目瓦 陶磁器	
熊本城跡	熊本城 関係遺構	江戸時代～			

熊本大学理蔵文化財調査室年報
第1集

1995年3月31日

編集・発行　熊本大学理蔵文化財調査室
〒860　熊本市黒髪2-39-1
☎096-344-2111（内線　3832）

印　　刷　新　日　本　印　刷
〒861-41
熊本市南高江町字小岩瀬960-1
☎096-358-1151